

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 22

第42次調査

2024

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

正誤表

〈本文〉 p.17 35行目

【誤】南北方向の道路が想定しており、 → 【正】南北方向の道路を想定しており、

〈本文〉 p.22 36行目

【誤】ガラ土 → 【正】礫混じり土

〈本文〉 p.23 36・37行目

【誤】白磁鉢 → 【正】白磁大皿

〈本文〉 p.23 37行目

【誤】大皿・鉢 → 【正】大皿

〈表3〉 p.49 18行目

【誤】504 器種 雑軸壺 → 【正】504 器種 鉢

〈本文〉 p.64 14行目

【誤】主要道路面している → 【正】主要道路に面している

〈本文〉 p.66 5行目

【誤】整地の伴い → 【正】整地に伴い

〈巻末写真〉 PL.11 頁タイトル

【誤】町割遺構 → 【正】町割遺構、H区遺構

序 文

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の福井県による発掘調査事業は、昭和43年に朝倉館跡の調査に着手して以来、現在に至るまで、着実に調査成果を重ねてきました。これまでの調査により、戦国期の城下町の構造や当時の生活・文化の様相が徐々に明らかになってきています。

本報告書は字赤渕・川久保で実施した第42次発掘調査（昭和56年）の成果をまとめたものです。一乗谷川左岸に位置するこの地区には、谷を南北に貫く幹線道路とその両脇に展開する町屋区画および山際に立地する寺院群の遺構が良好に残されていました。特に第42次調査では、南北幹線道路から分岐し、一乗谷川右岸に位置する字上殿へと向かう東西道路が検出されました。この道路は『朝倉始末記』に登場する「上殿ノ橋ノ通」と推定されています。これは、一乗谷の中では、唯一当時の道路名が判明する貴重な事例です。

また、道路沿いでは、町屋と考えられる屋敷区画が検出されました。石組溝や石列で仕切られた町屋やその周辺からは、越前焼大甕の埋設遺構が検出されるとともに、石臼や鑿、金属製品の加工に用いられた埴塙や鑿、鉛の地金などが出土しました。これらは戦国期の城下町で活躍した職人たちの暮らしを彷彿とさせる、貴重な遺構と遺物です。

結びに、事業実施から報告書刊行に至るまで、文化庁はじめ関係各位、地元の皆様にも多大なご支援とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

令和6年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館
館長 清水 邦夫

例 言

- 1 本書は福井県立一乗朝倉氏遺跡博物館が、特別史跡一乗朝倉氏遺跡における計画的な発掘調査の結果を報告するものであり、第22冊目にあたる。発掘調査事業概要はIで報告する。
- 2 本書で報告する調査は、国庫補助事業として、福井県立朝倉氏遺跡資料館（現一乗朝倉氏遺跡博物館）が福井県福井市城戸ノ内町宇奥間野で実施したものである。
- 3 発掘期間は昭和56年（1981）7月21日～昭和57年（1982）3月23日、担当者は小野正敏、吉岡泰英、南洋一郎である。その概要については『特別史跡一乗朝倉氏遺跡XIII 昭和56年度発掘調査整備事業概要』で報告している。
- 4 本書作成のための遺物整理作業は令和2年度から5年度まで福井県立一乗朝倉氏遺跡博物館（令和4年10月に福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館から改組）で行った。
- 5 本書の編集・執筆は川崎雄一郎（当館学芸員）が行い、館員全員がこれを補佐した。木製品の樹種分析については、渡邊英明（同学芸員）が行った。なお、内容の多くについては上記概報およびその後の研究成果に依拠する。また、第V章は分析を委託した株式会社バリノ・サーヴェイ株式会社が提出した成果報告を川崎が編集して掲載した。
- 6 遺物写真は発掘担当者が撮影した。遺物写真については月輪泰・川崎雄一郎が撮影した他、過去に当館職員が撮影したものを一部使用した。また、出土遺物のうち石灯籠中台（P.L.37-159）は株式会社文化財サービスに撮影を委託し、提出された成果品を掲載した。遺物実測図の作成は基本的に当館職員と整理作業員が行ったが、一部の遺物については株式会社文化財サービス及び株式会社エヌ・エム調査設計に委託し、提出された成果物を編集して掲載した。
- 7 本書の調査区全体図・遺構詳細図は概報掲載の図を一部改変して使用した。なお、遺構原図はアジア航測株式会社に委託して作成したものを含み、原図のデジタルトレースは株式会社エヌ・エム調査設計に委託した。また、写真図版には、航空測量の際に撮影した上空写真も含まれる。
- 8 写真図版・挿図・表の遺物番号は符合する。写真は縮尺不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いた。X・Y座標値は国土方眼座標系第VI系（日本測地系）に基づく。
- 10 本書で用いた遺構の略記号は次のとおりである。
SA：土塁・塀・柵 SB：建物 SD：溝・濠 SE：井戸 SF：石積施設 SJ：石段 SK：土坑
SS：道路・通路 SV：石垣 SX：その他
- 11 遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編 新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修による。
- 12 本書に掲載した遺物と調査の際に作成した図面・写真は、福井県立一乗朝倉氏遺跡博物館に保管してある。
- 13 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は福井県立一乗朝倉氏遺跡博物館の整理作業員があたった。

目 次

I 事業概要	
1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 調査の方法および組織	5
II 調査の概要と経過	
1 調査の概要	8
2 調査の経過	9
3 調査区の設定	10
日誌抄	11
III 遺 構	12
IV 遺 物	29
V 自然科学分析	56
VI まとめ	62

図 版 目 次

挿 図

挿図 1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図	4	挿図 8 区画割図	14
挿図 2 第 42 次調査区周辺地形図及び基本区画割図	8	挿図 9 石灯笼台座出土状況	16
挿図 3 出土遺物集合写真	9	挿図 10 SF1881 完掘写真	19
挿図 4 調査前遠景 1	9	挿図 11 SF1881 土層模式図	19
挿図 5 調査前遠景 2	9	挿図 12 銅銭出土状況	20
挿図 6 作業風景	11	挿図 13 SX2009 検出状況	26
挿図 7 漆器椀出土状況	12	挿図 14 花粉化石群集	57
		挿図 15 遺構概念図	63

卷 末 図

- | | |
|---|---------------------|
| 第1図 グリッド配置図 | 第32図 出土遺物 区画内遺構(4) |
| 第2図 F区遺構全体図 | 第33図 出土遺物 区画内遺構(5) |
| 第3図 H・J区上位検出面全体図 | 第34図 出土遺物 区画内遺構(6) |
| 第4図 H・J区下位検出面全体図 | 第35図 出土遺物 区画内遺構(7) |
| 第5図 区画42-1上位検出面 | 第36図 出土遺物 区画内遺構(8) |
| 第6図 区画42-1下位検出面 | 第37図 出土遺物 区画内遺構(9) |
| 第7図 区画42-2・3・4・5上位検出面 | 第38図 出土遺物 区画内遺構(10) |
| 第8図 区画42-2・3・4・5下位検出面 | 第39図 出土遺物 区画内遺構(11) |
| 第9図 区画42-6上位検出面 | 第40図 出土遺物 区画内遺構(12) |
| 第10図 区画42-6下位検出面 | 第41図 出土遺物 区画内遺構(13) |
| 第11図 H2・4区(区画42-7・10・11・12・13)
上位検出面 | 第42図 出土遺物 区画内遺構(14) |
| 第12図 H2・4区(区画42-7・10・11・12・13)
下位検出面 | 第43図 出土遺物 区画内遺構(15) |
| 第13図 H3区(区画42-8・9)上位検出面 | 第44図 出土遺物 区画内遺構(16) |
| 第14図 H3区(区画42-8・9)下位検出面 | 第45図 出土遺物 区画内遺構(17) |
| 第15図 H区セクション断面図 | 第46図 出土遺物 区画内遺構(18) |
| 第16図 H区セクション断面図及び
道路遺構断面断面図 | 第47図 出土遺物 H区包含層(1) |
| 第17図 出土遺物 F区(1) | 第48図 出土遺物 H区包含層(2) |
| 第18図 出土遺物 F区(2)
町割遺構(1) | 第49図 出土遺物 H区包含層(3) |
| 第19図 出土遺物 町割遺構(2) | 第50図 出土遺物 H区包含層(4) |
| 第20図 出土遺物 町割遺構(3) | 第51図 出土遺物 H区包含層(5) |
| 第21図 出土遺物 町割遺構(4) | 第52図 出土遺物 H区包含層(6) |
| 第22図 出土遺物 町割遺構(5) | 第53図 出土遺物 H区包含層(7) |
| 第23図 出土遺物 町割遺構(6) | 第54図 出土遺物 H区包含層(8) |
| 第24図 出土遺物 町割遺構(7) | 第55図 出土遺物 H区包含層(9) |
| 第25図 出土遺物 町割遺構(8) | 第56図 出土遺物 H区包含層(10) |
| 第26図 出土遺物 町割遺構(9) | 第57図 出土遺物 H区包含層(11) |
| 第27図 出土遺物 町割遺構(10) | その他 |
| 第28図 出土遺物 町割遺構(11) | 第58図 出土遺物 銭貨(1) |
| 第29図 出土遺物 区画内遺構(1) | 第59図 出土遺物 銭貨(2) |
| 第30図 出土遺物 区画内遺構(2) | 第60図 出土遺物 銭貨(3) |
| 第31図 出土遺物 区画内遺構(3) | 第61図 出土遺物 銭貨(4) |
| | 第62図 出土遺物 銭貨(5) |
| | 第63図 出土遺物 銭貨(6) |
| | 第64図 出土遺物 銭貨(7) |

卷 末 写 真

- | | |
|---------------------|------------------------|
| PL. 1 調査区遠景 | PL. 34 出土遺物 町割遺構 |
| PL. 2 A・D区調査区全景 | PL. 35 出土遺物 町割遺構 |
| PL. 3 F区調査区全景 | PL. 36 出土遺物 町割遺構 |
| PL. 4 H・J区調査区全景 | PL. 37 出土遺物 町割遺構 |
| PL. 5 町割遺構 | PL. 38 出土遺物 町割遺構 |
| PL. 6 町割遺構 | PL. 39 出土遺物 町割遺構、区画内遺構 |
| PL. 7 町割遺構 | PL. 40 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 8 町割遺構 | PL. 41 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 9 町割遺構 | PL. 42 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 10 町割遺構 | PL. 43 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 11 町割遺構、H区遺構 | PL. 44 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 12 H区遺構 | PL. 45 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 13 H区遺構 | PL. 46 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 14 H区遺構 | PL. 47 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 15 H区遺構 | PL. 48 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 16 H区遺構 | PL. 49 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 17 H区遺構 | PL. 50 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 18 H区遺構 | PL. 51 出土遺物 区画内遺構 |
| PL. 19 H区遺構 | PL. 52 出土遺物 H区包含層 |
| PL. 20 H区遺構 | PL. 53 出土遺物 H区包含層 |
| PL. 21 H区遺構 | PL. 54 出土遺物 H区包含層 |
| PL. 22 H区遺構 | PL. 55 出土遺物 H区包含層 |
| PL. 23 H区遺構 | PL. 56 出土遺物 H区包含層、その他 |
| PL. 24 H区遺構 | PL. 57 出土遺物 その他 |
| PL. 25 H区遺構 | PL. 58 出土遺物 その他 |
| PL. 26 H区遺構 | PL. 59 出土遺物 その他 |
| PL. 27 H区遺構 | PL. 60 出土遺物 その他、写真報告資料 |
| PL. 28 出土遺物 F区 | PL. 61 出土遺物 錢貨 |
| PL. 29 出土遺物 F区、町割遺構 | PL. 62 出土遺物 錢貨 |
| PL. 30 出土遺物 町割遺構 | PL. 63 出土遺物 錢貨 |
| PL. 31 出土遺物 町割遺構 | PL. 64 自然科学分析 |
| PL. 32 出土遺物 町割遺構 | PL. 65 自然科学分析 |
| PL. 33 出土遺物 町割遺構 | PL. 66 自然科学分析 |

表 目 次

表 1	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧	2
表 2	出土遺物一覧	29
表 3	土器・陶磁器観察表	44
表 4	金属製品観察表（銭貨を除く）	50
表 5	木・石・骨・角・その他製品観察表	51
表 6	銭貨観察表	53
表 7	写真報告資料観察表	55
表 8	花粉分析・寄生虫卵分析結果	57
表 9	微細物分析・種実同定結果	58
表 10	骨同定検出分類群一覧	59
表 11	骨同定結果	59

I 事業概要

1 調査の目的

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名越前朝倉氏が領国支配の拠点とした所である。当主の館を中心として山城、城戸、一族・家臣の屋敷、町屋、寺院などの遺構が一体となって残されており、我が国の歴史を知るうえで欠くことのできない国民の共有の文化遺産として、永久に保存するため特別史跡に指定され、公有化が進められている。

昭和49年に策定した「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」では、遺跡保護の目標を、「単に遺構を物理的に保存するだけに止まらず、歴史的・学術的側面からの徹底した究明を行い、その成果をひろく国民一般の知性向上に資し得るものに深化させることにある」と定め、その方策を「個体人が遺跡の中に身を置いて「自ら歴史と生きた対話」のできる条件を整備すること」とした。こうした理念のもとに一乗谷朝倉氏遺跡の調査と整備が進められており、発掘調査は当時の一乗谷の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態などを直接的に明らかにする最も有力な方法と位置付けられる。計画的かつ連続的に行った発掘調査の成果に基づいて着実な環境整備を施し、適切な維持・管理のもと遺跡が公開され、その前提条件のひとつとしてこれまで調査を続けてきた。

本報告書は、一乗谷朝倉氏遺跡の計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、その第22冊目にあたる。その他、道路・河川の整備事業や中山間事業などの現状変更に伴う発掘調査の報告は別途に行われている。なお、各年次の発掘・環境整備事業の概要は、当該年次の概報として公開しているが、本書で正式に調査所見を報告するものとし、内容については本報告書が優先する。

2 調査の経過

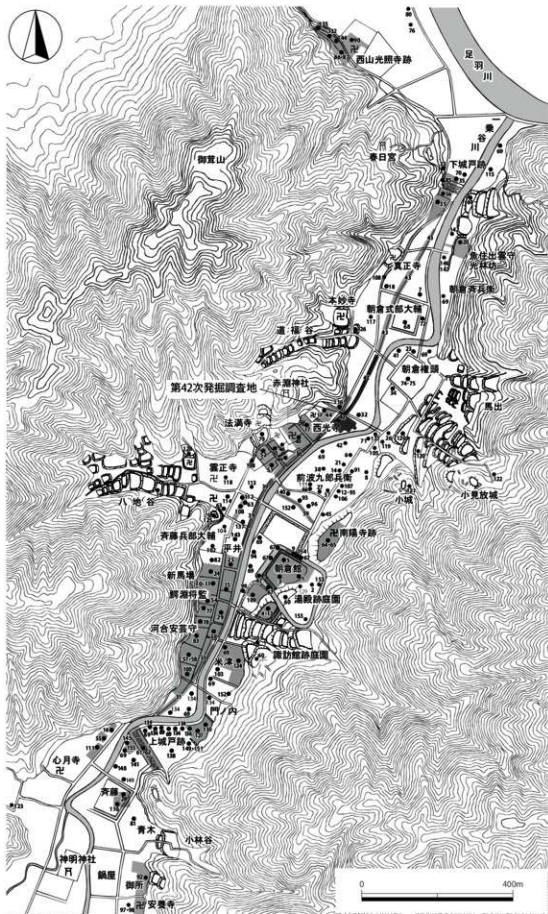
一乗谷朝倉氏遺跡の計画的な発掘調査は、昭和42年度から足羽町教育委員会を事業主体として始められた。昭和46年度から福井県教育委員会がこれを引き継いで発掘調査と環境整備事業を実施し、福井市が用地取得と遺跡の管理を担当するという機能分担で事業を進めている。同年7月に278haという広大な地域が国の特別史跡に格上げ指定され、福井県は、昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」のもと、同年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所を設置し、以後5ヵ年計画により継続して発掘調査と環境整備を実施した。これ以前の旧足羽町と福井県教育委員会による調査を、第1次5ヵ年計画とし、以後昭和61年度まで4次にわたって5ヵ年計画を進めた。第1次5ヵ年計画では朝倉氏最後の当主である朝倉義景の館跡を中心に調査を行った。この間、昭和45年には土地改良事業に伴い御所・安養寺や小林谷で緊急確認調査を行い、遺構の保存状態が良好であることを確認して、特別史跡指定の機運を高めた。第2次5ヵ年計画では、それに引き続いて平地地帯の武家屋敷跡や朝倉義景館跡に隣接する中の御殿跡、赤瀨地帯に所在するサイゴ寺跡、指定地内の北部に位置する瓢箪地帯や出雲谷地帯など、武家屋敷、寺院、町屋等とみられるいくつかの地点を選択して一乗谷の概況の把握を試みた。第3次5ヵ年計画では、一乗谷川の西側に敷設されることになった県道鯖江・美山線の改良工事に関連して、その両側の平地部分を計画的に調査した。引き続き第4次5ヵ年計画では、その最初の4年で指定地の中央に位置する赤瀨・奥間野・吉野本地帯を集中的に発掘調査し、この地区の道路、武家屋敷、寺院、町屋等の極めて良好な遺構を検出、大量の遺物が出土して大きな成果をあげた。最後

表1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査区数	調査箇所・住所	規模	報告書	面積	
昭和12年	1937	第1次3ヵ年	※各の発掘調査が福岡の繁栄に伴う後出調査から始まる。朝倉義景邸での調査は日本中世考古学の確立に貴重な役割を果たす。	第1次	諏訪館跡・湯船跡・地蔵寺跡の発掘	I	1	1,800	
昭和13年	1938	第2次5ヵ年		第2次	城下内町字新堀(朝倉義景東室部)	I	1	2,600	
昭和14年	1939			第3次	城下内町字新堀(朝倉義景東室部)	I	1	1,953	
昭和45年	1920			第4次	朝倉・安曇寺	II		769	
昭和46年	1971			第1次	城下内町字新堀	III		1	631
				第2次	城下内町字新堀	III		21	
				第3次	城下内町字新堀	III		1,992	
昭和47年	1972			朝倉義景邸の調査が終了し、武家屋敷や町屋群の調査を開始する。町屋群では職人の工務組が確認される。	第4次	城下内町字水谷(中ノ御殿北半分)	IV		1,340
					第5次	城下内町字新堀(朝倉義景南室部)	IV		1,305
					第6次	城下内町字新堀14丁	V	14	172
					第7次	城下内町字23-1, 23-2, 29-1	V	14	76
					第8次	城下内町字高取道13-25/26	V	14	70
昭和48年	1973		第3次5ヵ年	第9次	城下内町字新堀(朝倉義景北室部)	V		170	
		第10次		城下内町字平井	VI	II	2,425		
		第11次		城下内町字新堀	VI	II	1,243		
		第12次		城下内町字高取道	VI	II	129		
		第13次		城下内町字水谷(中ノ御殿北半分)	VI	III	2,250		
		第14次		城下内町字高取道3-1(浄土堂)	VI	III	42		
		第15次		城下内町字平井・川合・平井・安曇	VI	IV	2,400		
		第16次		城下内町字平井	VI	IV	209		
		第17次		城下内町字赤瀬	VI	V	2,050		
		第18次		城下内町字新堀	VI	V	2,500		
昭和51年	1976	第2次5ヵ年	第19次	城下内町字八幡宮45-1	VI	II	396		
			第20次	城下内町字川合跡2-4	VI	III	2,200		
			第21次	城下内町字高取道	IX	II	100		
			第22次	城下内町字高取道14-8	IX	II	14		
			第23次	城下内町字権助本8-1	IX	II	14		
			第24次	城下内町字新堀	IX	IV	2,200		
			第25次	城下内町字赤瀬・赤瀬	IX	IV	2,400		
			第26次	城下内町字15番9-11	IX	IV	36		
			第27次	城下内町字高取道14-66, 59	IX	IV	33		
			第28次	東新町字権助 小学校アール	X		14		
昭和53年	1978	第3次5ヵ年	第29次	城下内町字川合跡(平井)	X	V・VI	3,200		
			第30次	城下内町字川合跡	X	V	2,200		
			第31次	城下内町権助山田原・川合跡	X	V	1,700		
			第32次	城下内町字川合跡 龍井市公園センター	X	V	114		
			第33次	安曇貫町15字堂下9(はたるの里資料館)	X	I	14		
			第34次	城下内町字赤瀬	X	I	120		
			第35次	城下内町字上城戸	X	I	1,630		
			第36次	城下内町字赤瀬・東新町	II	III	2,800		
			第37次	城下内町字高取道14-59, 58	X	II	14		
			第38次	城下内町字高取道14-26, 1	X	II	14		
昭和55年	1980	第4次5ヵ年	第39次	城下内町字権助・権助	X	II	800		
			第40次	城下内町字新堀	X	II	3,000		
			第41次	城下内町字 権助電線センター	X	II	14		
			第42次	城下内町字川合跡・赤瀬	X	III	4,800		
			第43次	城下内町字権助・東新町・上城戸	X	III	4,700		
			第44次	城下内町字高取道	X	IV	2,600		
			第45次	城下内町高取道13-66 湯沢具置庫	X	V	63		
			第46次	城下内町字新堀	X	V	3,800		
			第47次	安曇貫町上武家野	X	V	190		
			第48次	安曇貫町上武家野	X	V	270		
昭和58年	1983	第4次5ヵ年	第49次	城下内町赤瀬野	X	VI	1,300		
			第50次	城下内町赤瀬野	X	VI	1,300		
			第51次	城下内町字吉野本	X	VI	1,720		
			第52次	城下内町字吉野本	X	VI	1,930		
			第53次	安曇貫町上武家野	X	VI	290		
			第54次	城下内町字平井	X	VI	1,800		
			第55次	西新町字ふじ寺	X	VI	560		
			第56次	城下内町字上城戸	X	VI	1,200		
			第57次	城下内町字川合跡	X	VI	2,500		
			第58次	城下内町字川合跡	X	VI	1,200		
昭和62年	1987	第1次10ヵ年後半	第59次	城下内町字上川原	X	VI	1,200		
			第60次	諏訪館跡・湯船跡近辺 湯水跡調査	X	VI	710		
			第61次	東新町字上城戸・城下内町字上城戸	X	VI	4,900		
			第62次	東新町字水堀・城下内町字上城戸	X	VI	200		
			第63次	城下内町字木堀	X	VI	200		
			第64次	城下内町 21字権助寺	1989	12	1,600		
			第65次	城下内町 21字権助寺	1989	12	1,600		
			第66次	城下内町 14-1, 6	1989	14	180		
			第67次	城下内町 22字新堀	1989	18	330		
			第68次	城下内町 6字中野	1990	14	300		
平成元年	1989	第1次10ヵ年後半	第69次	城下内町・安曇貫町・西新町(田代山敷)	1990	14	775		
			第70次	安曇貫町14字堂下本1-1	1990	14	100		
			第71次	城下内町14字川合本1-1, 2	1990	14	300		
			第72次	城下内町 6字中野	1991	14	210		
			第73次	城下内町 9字山原	1991	14	70		
			第74次	城下内町 8字権助	1991		2,600		
			第75次	城下内町 8字権助	1991		1,400		
			第76次	安曇貫町水堀	1991	14	600		
			第77次	城下内町字川合跡	1992	V	2,600		
			第78次	城下内町字吉野本	1992	14	120		
平成2年	1990	第1次10ヵ年後半	第79次	安曇貫町水堀	1992	14	600		
			第80次	安曇貫町水堀	1992	14	600		
			第81次	東新町字小林谷	1992	30	500		
			第82次	城下内町字権助	1993	14	1,930		
			第83次	城下内町字権助	1993	VI	1,300		
			第84次	東新町字水堀 朝倉安曇寺	1994	14	500		
			第85次	城下内町字上城戸	1994	VI	600		
			第86次	安曇貫町中野町西山北照寺	1994	11	2,400		
			第87次	東新町	1994	11	500		
			第88次	東新町	1994	11	500		
平成3年	1991	第1次10ヵ年後半	第89次	城下内町字上城戸	1994	11	100		

年度	西暦	調査計画	主要調査成果	調査回数	調査箇所・住所	延べ	報告書	面積
平成7年	1995	中期 第1次10ヵ年 後半	吾妻、川合地区の調査では、武家屋敷や町域等を確認。また、上城戸・下城戸の界にある寺院を中心に調査。 常盤整備事業では町堂立作業実施。	第90次	安芸賀中島町字高山・赤坂寺	1995	11	800
				第91次	城戸内町字八重巻	1995	14	100
				第92次	東新町字安曇寺(新築、安曇寺地蔵)	1995	13	2,600
平成8年	1996			第93次	城戸内町字上川原	1996	14	200
				第94次	城戸内町字新瀬原	1996	14	1,400
				第95次	城戸内町字八重巻	1996	14	400
平成9年	1997	中期 第2次10ヵ年 前半	吾妻、川合地区を中心とした調査を実施。上級武家屋敷と本殿確認。 中山間事業では城戸内全域で道路遺構を検出。	第96次	城戸内町字上川原	1996	13	2,400
				第97次	東新町字安曇寺	1996	13	2,400
				第98次	城戸内町字新瀬原	1996	13	1,900
平成10年	1998			第99次	城戸内町字山崎園、藤兵衛山原	1997	16	2,600
				第101次	城戸内町字松倉	1998	10	400
				第102次	城戸内町字吾妻	1998	5	3,300
平成11年	1999	中期 第2次10ヵ年 後半		第103次	城戸内町字米津	1999	10	100
				第104次	城戸内町字松倉	1999	14	2,900
				第105次	城戸内町字松倉9-18	1999	14	120
平成12年	2000			第106次	城戸内町字八重巻	1999	18	220
				第107次	城戸内町字北沢	52	14	98
				第108次	城戸内町字本殿、吉野木、熊町	52	中山間	1,400
平成13年	2001			第109次	城戸内町字新瀬原	52	18	3,900
				第110次	東新町字吾妻	中山間	1,000	
				第111次	西新町字月寺	中山間	150	
平成14年	2002	中期 第2次10ヵ年 後半	遊歩道周辺での調査を実施。東正寺遺構・岡司を調査。御衣倉の祠域に大坐の区画を検出。 中山間事業では道路遺構を確認。	第112次	城戸内町字東正寺	53	3,900	
				第113次	城戸内町字東正寺	34	1,700	
				第114次	城戸内町字東正寺	14	1,700	
平成15年	2003			第115次	安芸賀町字山崎	54	540	
				第116次	城戸内町字八重巻	中山間	318	
				第117次	城戸内町字中物	35	14	20
平成16年	2004			第118次	城戸内町字八重巻	36	14	111
				第119次	城戸内町字東正寺	36	14	3,900
				第120次	城戸内町字上殿	37	500	
平成18年	2006			第121次	城戸内町(八雲谷川)	100		
				第122次	城戸内町(八雲谷川)	30	14	41
				第123次	西新町字大戸(西新川)	50	250	
平成19年	2007	中期 第3次10ヵ年		第124次	城戸内町字米津	38	15	2,500
				第125次	城戸内町字八重巻・東正寺・吾妻	38	14	137
				第126次	城戸内町字中物	39	14	41
平成20年	2008			第127次	城戸内町字西ノ内	39	16	2,600
				第128次	城戸内町字八重巻	39	10	120
				第129次	城戸内町字水谷	40	16	200
平成21年	2009			第130次	城戸内町字西ノ内	40	14	42
				第131次	城戸内町(14字区画)	40	14	42
				第132次	安芸賀中島町字吾妻	41	11	3,500
平成22年	2010	改定基本計画 初期 第1次5ヵ年	城下町の防衛施設の要である上城戸について、城戸内外をつなぐ道路と城戸入口の構造および周辺の地形を面的に検討する。 河川改修事業および下城戸跡付近に位置する宇出雲谷・吾妻谷において、旧・兼谷川の両岸で石積遺構を確認。	第133次	城戸内町字庄島	41	14	40
				第134次	城戸内町字藤江田原・上城戸組	42	11	222
				第135次	安芸賀中島町字吾妻	42	11	600
平成23年	2011			第136次	城戸内町字上城戸	42	16	1,200
				第137次	城戸内町字本殿・吾妻	43	300	
				第138次	城戸内町字上城戸	43	900	
平成24年	2012	改定基本計画 中期 第2次5ヵ年	城下町の防衛施設の要である上城戸について、城戸内外をつなぐ道路と城戸入口の構造および周辺の地形を面的に検討する。 河川改修事業および下城戸跡付近に位置する宇出雲谷・吾妻谷において、旧・兼谷川の両岸で石積遺構を確認。	第139次	城戸内町字上城戸	43	14	660
				第140次	城戸内町字上川原	43	14	120
				第141次	東新町字上ノ木戸	44	800	
平成25年	2013			第142次	城戸内町字上城戸・通雲・出雲谷・吾妻谷	44	245	
				第143次	城戸内町字本殿・吾妻	44	30	
				第144次	安芸賀中島町字吾妻	44	11	600
平成26年	2014			第145次	東新町字上ノ木戸	44	290	
				第146次	城戸内町字出雲谷・吾妻谷	45	1,250	
				第147次	城戸内町字出雲谷・吾妻谷	46	33	
平成27年	2015			第148次	東新町字上ノ木戸	47	290	
				第149次	城戸内町字西ノ内・上城戸・兼谷町字上ノ木戸	47	300	
				第150次	安芸賀中島町字田原・石籠・龍岡	150次	5,500	
平成28年	2016	改定基本計画 初期 第2次5ヵ年	城下町の防衛施設の要である上城戸について、城戸内外をつなぐ道路と城戸入口の構造および周辺の地形を面的に検討する。	第151次	城戸内町字上城戸	48	180	
				第152次	城戸内町字上川原・上野倉・米津	49	60	
				第153次	城戸内町字水谷	50	20	
平成29年	2017			第154次	城戸内町字上川原・字上殿	51	130	
				第155次	坂市町東新町字上ノ木戸	51	1,100	

注 報告書略称 兼小学校→「兼谷町系氏道跡」兼小学校改定に伴う事前調査報告書1988.3。龍川・奥山線→「特別史跡・兼谷町系氏道跡 龍道遺構」、奥山線改定工事に伴う発掘調査報告書1983.3。武者野道跡→「武者野道跡 国道158号改定工事に伴う事前調査報告書1986.3」。連絡道路→「兼谷町系氏道跡 朝倉南連絡道路遺構に伴う発掘調査報告書1987」。水谷空間→「兼谷町系氏道跡 兼谷川水谷空間整備に伴う事前調査報告書1991.1」。龍尾、橋山線→「兼谷町系氏道跡 龍尾遺構・橋山線改定工事に伴う事前調査報告書1990」。中山間→『特別史跡・中山間地域総合整備事業地区別調査報告書』中山間地域総合整備事業地区別調査報告書多量に伴う発掘調査。第108次・第110次・第111次・第116次調査2005。砂防→「福井県環境文化財調査報告書 第129巻 兼谷町系氏道跡-砂防放棄瓦葺対策特別緊急事業(西新川)に伴う調査- 2012」福井県教育庁環境文化財調査センター



※数字は調査次数を示す

挿図1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図(縮尺1/10,000)

の5年目は再び平地地系の武家屋敷を調査し、さらに一乗谷の内外を区切る下城戸跡の本体の調査にも入った。

昭和62年度から中期第1次10ヵ年計画として上城戸跡や南陽寺跡、西山光照寺跡、御所・安養寺跡などの大規模寺院、そして中惣・権殿・河合殿などの武家屋敷・町屋跡を計画的に調査し、遺跡内の各地に所在する大規模かつ特徴的な遺構を究明した。

平成9年度から中期第2次10ヵ年計画として、町並立体復原地区の北に位置する八地谷川兩岸を連続的に発掘調査し、この地区の街路や武家屋敷の構造を明らかにした。また、遊歩道設置に伴う事前調査も実施した。途中、平成16年度は福井豪雨により遺跡や資料館が被災したため、雲正寺地係内での発掘調査を中断し、災害復旧に全力を注ぐこととなった。

平成17年度から改めて中期第3次10ヵ年計画を施行し、中断した調査を再開した。平成19年度からは、朝倉館跡から上城戸跡に至る遊歩道沿いの整備を進めるため、連続的に字米津や字門ノ内を発掘調査し、刀装具製作工房跡やガラス玉工房跡の存在が明らかとなった。平成22年度からは、西山光照寺跡の平地部北半を調査して、大規模な石垣や建物の存在を確認した。

平成24年度からは、前年度に改定した「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘・整備基本計画」（以下、改定基本計画という）に基づき、城下町の防御の要である上城戸跡の一带において、城戸内外をつなぐ道路跡と城戸入口の構造及び城戸周辺を面的に解明する目的でトレンチ調査を行い、屋敷地や道路跡の一部分を確認している。

令和元年度から令和3年度までは、内容把握の必要性や崩落等危険性の高い箇所について、緊急に発掘調査を行う必要性が生じたため、調査計画の変更を行なった。そのため中期調査計画からは外れるものの、朝倉館跡背後の土塁や斜面地、または朝倉館跡北側の浅崩落部分等の調査を実施した。

令和4年度は新博物館開館のため、報告書刊行に向けた整理事業のみを実施し、令和5年度から、再び改定基本計画に基づき、防御施設の解明に向けて発掘調査を再開した。

3 調査の方法および組織

発掘調査・環境整備は、国庫補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～同56年8月19日）、及びこれを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館（昭和56年8月20日～令和4年9月31日。平成4年4月1日に一乗谷朝倉氏遺跡資料館と名称変更。）が設置され、その任にあたってきた。平成24年度からは、県の機構改革で同資料館が教育庁から知事部局に移管となったことに伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが朝倉氏遺跡グループを設けて発掘調査関連業務を引き継いだ。平成29年度の機構改革で、一乗谷朝倉氏遺跡に関する全業務を知事部局が担うこととなった。令和4年10月から、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館と改称し、組織を改編した。

また当初から、「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき福井県朝倉氏遺跡調査研究協議会（平成8年度に福井県朝倉氏遺跡研究協議会と名称変更。）が設置され、博物館の業務を含む、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の保存整備に関する計画及び実施上の重要事項の調査研究について、指導と助言を受けている。本報告書に關係する年度における組織、及び経費を以下に記した。

○昭和56年度（第42次発掘調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会 ※50音順。役職は昭和56年9月当時。

委員 青園謙三郎（福井テレビ放送社長・郷土史）	委員 石井 進（東京大学教授・歴史）
委員 岸谷 孝一（東京大学教授・建築）	委員 木原 啓吉（朝日新聞社編集員・都市環境）
委員 木村竹次郎（朝倉氏遺跡保存協会会長）	委員 近藤 公夫（奈良女子大学教授・造園）
委員 重松 明久（福井大学教授・歴史）	委員 田畑 貞寿（千葉大学教授・造園）
委員 坪井 清足（奈良国立文化財研究所所長・考古）	委員 戸塚 文子（評論家）
委員 水上 勉（作家）	委員 城戸ノ内町内会長

朝倉氏遺跡調査研究所（～昭和56年8月）・朝倉氏遺跡資料館（昭和56年8月～）

所長・館長 藤原武二（造園）	次長 中谷 賢（事務）	文化財調査員 水野和雄（考古）
文化財調査員 小野正敏（考古）	文化財調査員 岩田 隆（考古）	文化財調査員 吉岡泰英（建築）
文化財調査員 南洋一郎（考古）	文化財調査員 伊藤正敏（歴史）	非常勤嘱託 青木研吾（芸芸）
非常勤嘱託 西村 広（事務）		

経費 昭和56年度 発掘調査経費 35,000千円（第40次調査費含む）

○令和2・3・4・5年度（本報告書作成）

福井県朝倉氏遺跡研究協議会 50音順。役職は令和5年度ものを記載するが、退任した委員については退任時の役職とする。

委員 池上裕子*（成蹊大学名誉教授・中世史）	委員 小野健吉（大阪観光大学教授・遺跡整備）
委員 小野正敏*（国立歴史民俗博物館名誉教授・中世考古学）	委員 岸田 清（（一社）朝倉氏遺跡保存協会会長）
委員 久保智康（京都国立博物館名誉館員・美術工芸）	委員 高妻洋成（（独）国立文化財機構文化財防災センター長・保存科学）
委員 小浦久子（神戸芸術工科大学教授・都市計画）	委員 杉本 宏（京都芸術大学名誉教授・庭園整備）
委員 染川香澄*（ハンス・オン プランニング代表・博物館教育）	委員 富島義幸（京都大学大学院教授・日本建築史）
委員 中井 均（滋賀県立大学名誉教授・考古学・城郭史）	委員 長谷川裕子*（跡見学園女子大学教授・中世史）
委員 吉田 智*（福井教育博物館教育アドバイザー・歴史教育）	

（*池上委員・吉田委員は令和4年1月まで、染川委員・長谷川委員は令和4年1月から、小野委員は令和4年3月まで）

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館（令和4年10月1日付一乗谷朝倉氏遺跡資料館より改組）

特別館長 小野正敏*（考古）

館長 西澤弘純*（事務）	館長 清水邦夫*（事務）	副館長 松村昌治*（事務）
副館長 半藤貴子*（事務）	副館長 川越光洋*（考古・保存科学）	次長 下山淳子*（事務）
主任 鈴木篤英*（考古）	主任 宮永一美（文獻）	主任 宮崎 認（考古）
主任 田中祐二（考古）	主任 窪田裕美*（美術工芸）	主任 酒井健治*（文獻）
主査 熊谷 透（建築）	主査 藤田若菜（庭園）	主査 吉田悠歩*（考古）
主査 高橋史弥*（民俗）	主査 石川美咲*（文獻）	企画主査 藤野一郎*（事務）
学芸員 渡邊英明（保存科学）	学芸員 川崎雄一郎*（考古）	学芸員 藤井佐由里*（遺跡環境科学）
学芸員 大竹桃子*（史跡整備）	学芸員 山口大地*（考古）	学芸員 多田明加*（美術工芸）
学芸員 下見 茜*（造園）	主事 渡辺尚弘*（事務）	主事常見彩花*（事務）
学芸員 藤田理紗*（教育普及）	考古専門研究員 月輪 泰（考古）	発掘調査指導監視員 北野左近*（考古）

歴史教育普及員 白木明博*（事務） 歴史教育専門員 志田浩満*（教育普及） 非常勤嘱託 花川洋介*（教育普及）
窓口業務支援員 眞保弘恵*（事務） 窓口業務支援員富阪昌代*（事務）

（*小野・清水・多田・渡辺は令和4年度から、西澤は令和3年度まで、松村は令和3年度～令和5年度5月まで、半藤は令和5年度5月から、川越は令和2年度まで総括文化財調査員、令和3年度から現職、下山は令和2年度まで、鈴木・酒井は令和5年度5月まで、窪田は令和3年度のみ、高橋は令和2年度まで、石川は令和4年度まで学芸員、令和5年度より現職、藤野は令和4年度から令和5年度5月まで、川崎・山口・下見・常見・志田は令和5年度から、藤井は令和3年度から、大竹は令和2年度及び令和5年度5月から、藤田は令和3年度10月から令和4年度まで、北野は令和4年度から令和5年度9月まで、白木は令和3年度～令和4年度まで、花川は令和2年度まで、眞保・富阪は令和2年度まで事務嘱託、令和3年度より現職）

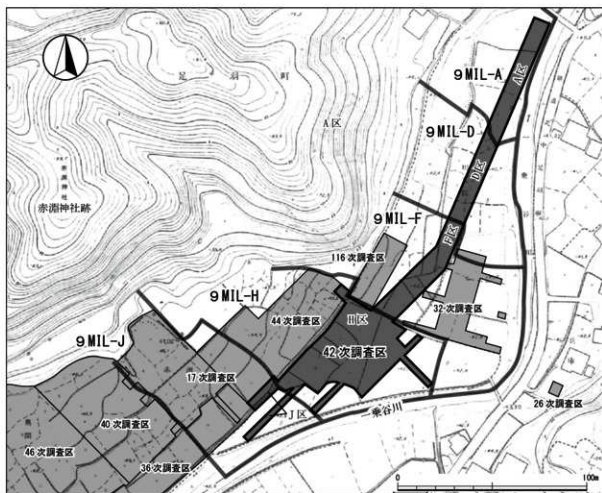
経費	令和2年度	発掘調査費	24,011千円（発掘調査、遺物整理、保存処理）
	令和3年度	発掘調査費	16,203千円（発掘調査、遺物整理、保存処理）
	令和4年度	発掘調査費	20,269千円（発掘調査、遺物整理、保存処理）
	令和5年度	発掘調査費	73,422千円（発掘調査、遺物整理、保存処理）

II 調査の概要と経過

1 調査の概要

今回報告する第42次調査地は、福井市城戸ノ内町字久保及び赤淵に所在し、調査面積は約4,800㎡である。当地区は、上城戸跡・下城戸跡に区切られた「城戸ノ内」の中央部に位置し、南から東側を足羽川の支流である一乗谷川が流れ、西から北側には福井平野と画する御芽山がそびえている。なお、一乗谷川を挟んだ南方にある朝倉館跡からは約400m離れている。

当地区ならびに隣接する奥野間・吉野本地区は武家屋敷・寺院・町屋等の遺構が良好に残り、全面的な発掘調査の結果、一乗谷の町並の様相が最も解明された地区の一つとなっている。第42次調査以前には南西側で第17・40次調査、南側で第36次調査を実施しており、西側の山裾に比較的大区画の寺院、東側の一乗谷川沿いに南北の幹線道路を基準に展開する小区画の屋敷群の存在が判明していた。これらの調査結果を受け、第42次調査では南北道路の延長及び、道路周辺の町屋と考えられる屋敷跡の構造ならびに町割の変遷の追求に主眼を置いた。



挿図2 第42次調査区周辺地形図及び基本区割図(縮尺1/2,000)

調査の結果、主な道路遺構としては、南北道路の延長とそこから分岐する2本の東西道路を検出した。検出した東西道路のうち、北側に位置する道路（SS1850）は、東に直進した先の地籍が字上殿であることから、『朝倉始末記』の記載にみられる「上殿ノ橋ノ通」であると判明した。また、道路面の下層からは、道路敷設以前の井戸を検出し、最終的な町割りが施行される前段階の様相の一部が明らかとなった。南北道路の東側では、4面にわたる遺構面を検出した。石組溝により区画された屋敷地は、その規模や構造から、町屋として利用されていた区画と考えられる。調査区東側の一部は、一乗谷川の氾濫による攪乱で遺構の残りが悪いものの、洪水等を契機に区画が変遷していく様子を確認した。遺物は、土器・陶磁器類を中心として、石製品や金属製品なども多数出土した。陶磁器類では、一括埋納された染付大皿1点、染付端反皿10点、白磁大皿1点が出土した。その他、当遺跡では唯一となる、銀粒子の付着した増埒や延板状の鉛地金など、金属加工に関わる特徴的な遺物が出土した。



挿図3 出土遺物集合写真

2 調査の経過

調査は昭和56年（1981）7月21日に着手した。調査対象地は一乗谷川左岸の水田域であり、その範囲は広大であるが、その多くは氾濫原を水田化したものと推定していた。作業は人力による耕作土・床土の除去から行った。調査当初は、遺構の存在する可能性が低いと考えていた駐車場予定地（H区東半及び新設県道予定地（A・D・F区））にトレンチを設定し、遺構範囲の確認を行った。その結果、一乗谷川沿いに位置する調査区北半及び調査区東半には、戦国期の遺構がほぼ存在しないことを確認した。その一方で、当初より遺構が存在する可能性が高いと考えていた調査予定地南西部では、床土直下にて遺構を検出した。検出した遺構は、第17次及び第36次調査で検出していた南北道路SS495の延長部分とその東側に広がる屋敷地であり、この地点を中心に調査を進めた。なお、本調査で検出した遺構は、調査時に連番で遺構番号を振って管理した。ただし、調査後の整理段階において新たに遺構番号を振る必要が生じ



挿図4 調査前遠景1（南から）



挿図5 調査前遠景2（北から）

た遺構については、調査時の最後の遺構番号の続きの番号を付与した。

調査では南北道路の延長を確認するとともに、南北道路に交わる東西道路 SS1850 を検出した。また、南北道路 SS495 と東西道路 SS1850 の交差点の南東には、町屋と考えられる屋敷区画が良好に残存しており、石組溝によって区画された敷地の内部では、掘立柱建物跡や越前焼大甕の埋設遺構などを検出した。F 区では、区画施設の一部と考えられる石列状の遺構などを検出した。また、遺構が残っていなかった F 区東側に設定した深堀トレンチでは、湿気の高い粘質土の堆積を確認し、堆積土中から、漆器碗や下駄など木質遺物が出土した。

上位検出面¹¹の調査を終え、昭和 56 年 10 月 13 日に、平面図作成のための空中写真撮影を実施した。その後、H・J 区では、下層遺構を検出するため、人力により遺構面を掘り下げ、遺構の検出を行った。下層遺構は新しい方から、第 I・II・III 遺構面の 3 面を確認した。下層第 III 遺構面では幹線道路敷設当初と同時期と考えられる区画施設を検出した。この他に建物跡や井戸、石積施設などを、屋敷地内で検出した。また、道路面の断割を行った結果、複数回にわたる道路面改修の痕跡を検出した。また東西道路 SS1850 の断割調査では、最古段階の道路面の下層から、幹線道路敷設以前に遡る石積井戸 SE1875 を検出した。

遺構の掘削は昭和 56 年 12 月 14 日まで行われ、それ以降は 12 月 28 日までの期間に下位検出面の図化作業を実施した。翌昭和 57 年 3 月 23 日には、一部の図面作成を残して調査を完了した。その後、昭和 57 年 7 月 1 日に下位検出面の空中写真撮影を実施した。これをもって、本調査に係る遺構の図化作業の全てを完了した。

3 調査区の設定

第 42 次調査は、第 17・36 次調査で検出した南北道路 SS495 の延長線上及びその東側の水田域(H・J 区)と県道鯖江・美山線新設予定地(A・D・F 区)及び駐車場整備予定地(H 区東半、現福井市史跡公園センター駐車場)にて実施した。道路新設部分については道路敷設予定地に合わせて、幅約 13 m の帯状の調査区を設定した。

今回の調査区は、当遺跡の基本区割り 9 M I L - A・D・F・H・J 区の 7 つの地区をまたいで設定した。調査にあたっては、各地区内に 3 m 四方のグリッドを設定した。グリッドの向きは、各地区の地形に合わせて設定しているため、地区ごとに向きが異なる。ただし、今回、遺構を検出した F・H・J 地区のグリッドは共通して座標北に対して東に約 45 度振っている。遺物の取り上げはこの 3 m グリッドごとに行った。遺物の取上げ区画名となるグリッドの名称は、南北列に地区名+アルファベット、東西列に数字を振っており、グリッド南東の交点をそのグリッドの名称とした。また報告文中の方位の記述については、基本的にこれまで同様に町割の方位を基準とする。つまり、グリッド座標北に対して東に 45 度振った方位を使用することとなり、一乗谷川側を東、御茸山側が西というように記述する。

日 誌 抄

昭和56年(1981)

- 7・24 除草、地区杭打ち。
 7・27 H地区駐車場予定地(南北畔石垣の東側)の調査着手。
 7・31 H地区駐車場予定地にて遺構面を確認、順次拡張。
 SD1920、SB1898等検出。
 8・3 A・D・F地区新設県道予定地のトレンチ調査着手。
 8・5 A・D地区、深堀トレンチにて砂利・礫層を確認。
 8・6 F地区の調査着手。
 SE1878、SB1900検出。一部で炭・焼土層を確認。
 8・21 J地区(H地区東側)でトレンチ調査。
 砂利層が続き、遺構がないものと判断。
 8・24 J地区(H地区南側)の調査着手。表土剥ぎ。
 8・25 36次調査から続く道路SS495を発掘。
 石組溝SD518と踏石を検出。道路面3面を確認。
 8・28 H地区の調査着手。表土剥ぎ。
 8・29 糞ビット SX1921・1922検出。石組側溝SD1851検出。
 8・31 SD1861、SX1940、礎石、SE1866・1867、SS495を検出。
 9・1 SB1895、SV1918、焼土土坑SK1901・1902等を検出。
 9・2 SF1880～1882・1884、SD1861、SE1867、SD1862・
 SB1896・SX1940等検出。
 9・3 SD1859、SB1897等検出。
 K-29ではほぼ完形の越前焼壺出土。
 9・7 SS1850、SD1852の一部を検出。
 9・11 SD1852の東端を確認。SX1959検出。
 9・12 石列SX1956検出。同石列脇から越前焼播鉢SX1957出土。
 9・14 G～H-20を掘り下げ。下層溝石と埋炭底部SX1925を
 検出。
 9・17 F地区トレンチ掘り下げ。
 青色シルト層から漆桶と下駄出土。
 H地区の遺構(糞ビット、溜槽、柱穴、土坑等)検出
 作業着手。焼土器SK1910から銅製品の金具出土。

- 9・18 H地区掘り下げ(下層第I面)。
 SE1868、焼土土坑SK1906、SD1860、SX1919等検出。
 N-22から漳州窯系白磁大皿1点・染付大皿1点、染
 付皿10点が一括出土。
 9・21 SD1861、SF1887・1888、焼土土坑SK1910・1991等を検出。
 東西道路石組側溝SD1853の検出作業着手。同溝から
 笏谷石製燈籠の台座出土。
 9・24 道路側溝SD1853検出作業実施
 G～H-31～33拡張区の掘り下げ着手。
 9・29 E～F-21～26の道路側溝SD1853検出続行。
 H-21でSE1872検出。
 9・30 拡張区の掘り下げ。
 SD1854、SD1855を検出。
 10・13 航空写真測量
 10・26 糞ビット群SX1923で新たに1基糞ビット検出。
 井戸SE1865検出。S-26で茶臼(上臼)出土。
 10・30 SF1996・SF1891検出。
 11・5 下層第II遺構面掘り下げ。石組溝SD1860完掘。
 瀝(?)SX1952の下層で礎石検出。
 11・18 下層第II遺構面掘り下げ。SD1920検出。
 駐車場予定地の下層(下層第I遺構面)掘り下げ。
 SF1890、石列等検出。
 11・24 石敷SX1975等検出。
 11・25 SB1899、SE1877等検出。
 11・26 SE1876検出。
 12・4 SE1873・1874検出。
 12・8 東西道路SS1850断り割りトレンチ掘り下げ。
 第3道路面下でSE1875検出。
 12・14 駐車場予定地の下層遺構実測開始(～12月28日)。



挿図6 作業風景(右上:F区遺構検出、左上:SD1852遺構掘削、右下:H1地区遺構検出、
 左下:区画42-6下層第II遺構面検出)

III 遺構

A・D区 (PL. 2)

A・D区は、一乗谷川に並行するように位置する。表土・床土の下層には、一面に砂利及び砂層が広がっており、顕著な遺構は検出できなかった。砂利・砂層の一部を断割って下層の確認を行ったが、河川由来と考えられる砂利及び礫層の堆積を確認したのみで、顕著な遺構は検出できなかった。

F区 (第2図, PL. 3)

F区は、南北約65m、東西約13mの範囲で遺構の検出を行った。調査区東側では顕著な遺構は検出できなかったが、西側には遺構が残存していた。検出できた遺構面は1面のみで、標高約42.4～41.5mの範囲で検出した。

F区の主な遺構は、礎石建物1棟、井戸1基、その他の遺構10基である。ただし、遺構の残りは総じて悪く、検出できた遺構も断片的な検出に留まっており、全容の掴めないものが大半を占める。

遺構が検出できなかった調査区東側では、深掘

トレンチを設定し、下層遺構面の検出を試みた。深掘トレンチ内で遺構は検出できなかったものの、河川由来とみられる砂・砂利層の下層で茶褐色粘質土及び青色粘質土を検出した。この青色粘土層を掘り下げたところ、漆碗、下駄、特棋の駒(第17図5～7)などが出土した。遺物が出土した標高からさらに粘土層を掘り下げたところ、青色シルト層に漸移しており、下層遺構面の存在は確認できなかった。SB1900 礎石が2つ並んで出土した。礎石間は約1.8mであり、基準尺の1間に相当する。付近では、この2石の他に関連する礎石を検出できなかったことから、建物の向きや規模は不明である。

SE1878 床土直下で検出した石積井戸である。径は約0.8mである。石材の中には全長0.7mを超える大型の石材も含まれる。周辺で関連する遺構は検出できなかった。

SX1985 L字に屈曲する石列状の遺構である。規模は東西1.5m、南北3.0mである。東西方向の石列は、第116次調査で検出した南北道路SS5801の延長軸に直交する。また南北方向の石列は、SS5801に並行することから、石列の屈曲点がSS5801に面して設けられた屋敷区画の南東角にあたるものと考えられる。

SX1986 南北方向の石列状遺構である。全長0.7mの比較的大型の礎が1石含まれるが、その他は全長0.3m程度である。延長方向がSS5801の延長軸に並行することから区画施設の一部であると考えられる。

SX1987 L字に曲がる石列状の遺構である。全長0.6mまでの礎が並び、東西約1.6m、南北約1.3mを測る。SX1985・1986同様に町屋の区画施設の一部であると考えられる。

SX1988 集石状の遺構である。全長1.3m程度の巨石を含む。石材の配置に明確な規則性は見出し難いが、全体的な石材の方向は現代の水田畦畔に並行しているように見える。

SX1989 石列状の遺構である。付近にSB1900が存在するが、建物の軸と石列の並びは一致しない。

SX1991 集石状の遺構である。同一レベルに礎が集中する。規模は南北約2.8mである。

SX1992 石列状の遺構である。延長は南北約8.7mを測る。現代の水田畦畔に並行している。



挿図7 漆碗出土状況

- SX1993 集石状の遺構である。石材が約1m四方の範囲に散在するが、配置に規則性はない。
- SX1994 現代の水田区画の段差に沿って並ぶ石列状の遺構である。
- SX1995 石列状の遺構である。遺構の延長は約3.8mを測る。延長方向は現代の水田畦畔と一致する。

H・J区（第3・4図、PL.4）

H・J区では、主な遺構として、道路3条、溝・石組溝16条、石列6条、建物6棟、井戸14基、石積施設17基、土坑16基、大甕埋設遺構6箇所、その他の遺構56基を検出した。主要な遺構面は、新しい方から上層、下層第Ⅰ、下層第Ⅱ、下層第Ⅲの4時期である。ただし、調査にあたっては、遺構面に関係なく上位検出面と下位検出面の2面に分けて遺構の図化を行なっている。そこで、本報告では記載事項と掲載図面との整合性を図るため、検出面ごとに遺構の報告を行う。ただし、各遺構の時期については、帰属遺構面に応じた4時期区分をもって記載する。なお、SS1850 断割では、道路敷設以前に構築された井戸を検出しており、下層第Ⅲ遺構面より古い時期の遺構が存在する。

個別の遺構については、町割に係る遺構と区画内の遺構に分けて報告する。町割に係る遺構の項目では、道路及び道路側溝、または道路側溝に接続する主要な石組溝等について記述する。道路上または道路の下層に存在する遺構についても、町割に係る遺構の項目で報告する。一方、区画ごとに存在する小規模な区画施設や、断片的な溝・石列等については各区画に帰属する遺構として報告する。

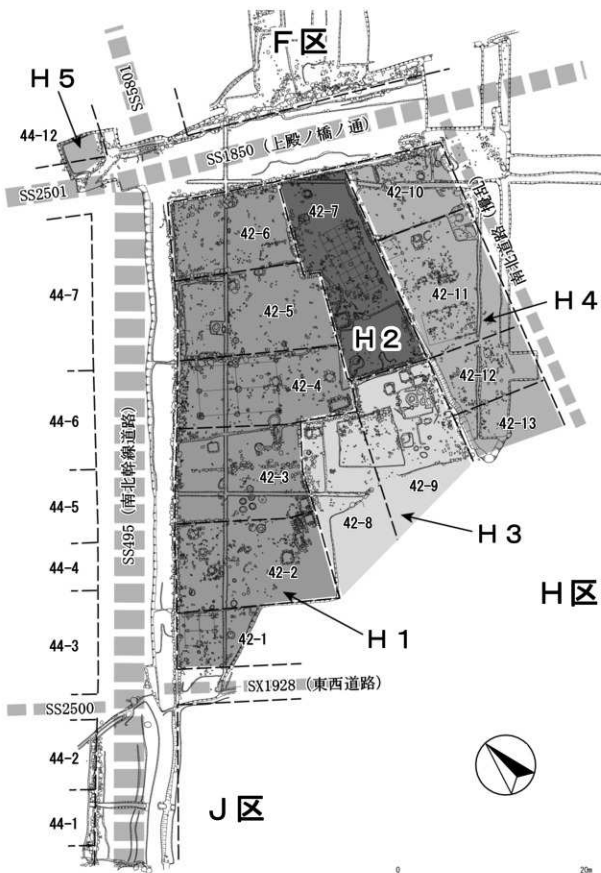
屋敷区画については、最小単位ごとに区画番号を振って識別する。ただし、屋敷区画の範囲は一定ではなく、区画の分割や統合によって区画範囲の変遷を想定できる。そのため、本報告では便宜上、上位検出面において確認した区画施設を基準に区画の設定を行った。

また、各区画の報告にあたっては、区画の出入口が接する道路に応じて、グルーピングを行った。これを中区画とする。南北道路SS495に面する区画はH1区、東西道路SS1850に面する区画はH2区、東西道路SX1928に面する町屋群はH3区とする。また、H2・3区の東側に隣接する区画については、H4区とする。H4区には、今回確認したいずれの道路にも面しない区画42-11・12が存在することから、本来は東側に南北道路が存在したものと推定できる。また、SS495とSS1850の交差点の北西に位置する区画をH5区とするが、この区画は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ』で報告していることから、今回は報告を割愛する。

町割に関する遺構（第3・4図、PL.5～11）

SS495 一乗谷川左岸を南北に貫く幹線道路である。今回の調査では、第17次、第36次調査で検出した道路の延長部分を検出した。これまでの調査では道路幅が未確定であったが、今回の調査で側溝を含む道路幅が約8.5mと判明した。SS495は、地形に沿って北側へ緩やかに傾斜しており、H区の北端で東西道路SS1850及びSS2501と交差する。交差点の北側は南北道路SS5801に接続する。また、本調査区において、SS495から東側に延びる東西道路SX1928を検出した。SS495の東西には屋敷区画が整備されており、道路軸に直交する方向の区画溝によって各区画の南北境界が設定されている。

路面を断ち割ったところ、下層で粘土層の広がりを確認したが、遺構は検出できなかった。ただし、最も古い路面の下層で木炭を含む粘土の堆積を確認しており、周辺には道路敷設以前の遺構または遺物包含層が存在する可能性がある。また、土層観察の結果、路面の改修が5回行われていることを確認した。最も遺構の残りの良かったH区Sラインの断割断面では、最上層の路面①から最下層の路面⑤までの5面にわたる路面を確認している。路面改修によって、路面⑤から①までは約0.5m嵩上げされてい



挿図 8 区画割図 (縮尺 1/400)

た。また、H区Yラインの断り断面では最下層の路面⑤から②までの標高差は約0.6mあり、最大で0.7m程度の嵩上げが行われたと推定できる。1回の道路改修では、約0.1～0.2m程度嵩上げされている。路面改修は、古い路面上に土土や粘土など、粒度の細かい土を盛り、その上に砂利を敷き、突き固める工法である。土土・粘土層の間には礫層が挟まれる箇所も確認した。

SS1850 南北幹線道路SS495から分岐する東西道路である。この道路の東延長線上の地籍が宇上殿であることから『朝倉始末記』の記述に見られる「上殿ノ橋ノ通」に比定できる。道路の両端には北側溝SD1853と南側溝SD1852が敷設されており、側溝を含めた道路幅は約7.5mである。H区の北西角あたりで南北道路SS495及びSS5801に交差する。交差点の西側は、道路側溝SD1855を挟んで東西道路SS2501に接続している。河川氾濫による攪乱によりH4区より東側の様相は不明であるが、H4区の東にSS1850から延びる南北道路が存在していた可能性が、屋敷区画の構造から推定できる。路面は東の一乗谷川に向かって緩やかに傾斜している。傾斜は検出面で約4%程度である。道路の南北には屋敷区画が形成される。

断り断面では、3面の路面を検出した。H区Hラインのセクション断面から、この路面はSS495の路面⑤～③に対応するものと判断した。改修方法はSS495とほぼ同様である。ただし、SS1850では、砂利層の下層で焼土を検出した箇所がある。

SX1928 南北幹線道路SS495から東に延びる東西道路である。路面が固く締まった砂利面で形成されている。SS495を挟んだ西側では、やや東西軸を異にするものの、東西道路SS2500が存在する。道路の北側区画施設は、下層第II遺構面から検出したSX2008である。道路幅は最低4.5m程度と推定する。攪乱により、道路東側の様相はほぼ不明であるが、この道路に面する屋敷区画と考えられるH3区から、少なくとも道路の北側には屋敷区画が形成されていたものと考えられる。

SD518 SS495の西側溝となる石組溝である。側石を含めた溝幅は検出面で約0.7mである。溝の深さは約0.6mである。溝は北側に傾斜する。溝の堆積土は上層から、焼土、黄色土混焼土、砂利層である。第44次調査で溝の北側延長部分を検出しており、SS495とSS1850・SS2501の交差点で道路側溝SD1855に接続することを確認している。路面改修に伴い、側石の積み直しが行われており、一部の側石の並びには上下でズレが生じている。溝の一部には屋敷地への出入りを目的とした笄石の板石が配置されていた。

SD1851 SS495の東側溝となる石組溝である。側石を含めた溝幅は検出面で約0.7mである。深さは約0.3mである。溝は北側に傾斜する。道路改修に伴う側石の積み直しと見られる箇所が存在するが、下層の溝は判然としない。溝の埋土は検出面から黄色土、焼土、黄色土、砂利層である。SS495とSS1850の交差点手前で道路側溝SD1852に接続することを確認した。

SD1852 SS1850の南側溝となる石組溝である。側石を含めた溝幅は検出面で約0.8mである。深さは約0.3mである。溝の埋土は炭混じり焼土である。攪乱により溝の東側延長部分は不明確であるが、溝の検出が途切れたH4区北東角付近に道路区画の一部と見られる土坑SK1914がある。この地点でH4区東側に位置する南北道路の区画施設に接続していたものと考えられる。西端は、SS495とSS1850の交差点で道路側溝SD1851に接続することを確認した。南の側石は、屋敷区画の北辺区画を兼ねているため、北の側石に比べて南の側石の方が一段高い箇所がみられる。一方、屋敷地の標高と道路の標高が一致する箇所では、南北の側石の高さに違いは見られない。区画42-6の北辺区画を兼ねる箇所には、上面の平坦な石材が含まれることから、建物の礎石を兼ねているものと考えられる。

SD1853 SS1850の北側溝である。溝の両端に石を積んだ石組溝である。後世の水田区画形成の際とみられる攪乱により、検出面付近の残りが悪いものの、側石を含めた溝幅は、SD1852よりやや広い約0.8mである。溝の深さも0.6～0.8mと深い。溝の埋土は礫混じりの暗色土である。溝の西側はSS495とSS1850の交差点で道路側溝SD1854・1855に接続することを確認した。溝の東側はH4区東辺あたりで途切れており、その先は攪乱により様相が不明確である。溝は東側に傾斜している。SD1853は、規模の大きさから、西側の区画から流れ出した水を一乗谷川へ排出する機能を有していたと考えられる。SS5801との交差点付近では、石灯籠の台座²⁾及び中台(第25図159)が出土した。道路付近の遺構検出面では宝珠(第57図565)も出土していることから、交差点に石灯籠が設置されていたものと考えられる。

SD1854 SS5801の西側溝である。溝の両端に側石を有する石組溝である。側石を含む溝幅は、検出面で約0.7mである。SS495とSS1850・SS2501の交差点で道路側溝SD1855に接続することを確認した。溝は北に向かって延びるものと考えられるが、SS5801を確認した第116次調査区の外に伸びており、延長部分は未確定である。

SD1855 SS495の西側溝のうち、SS1850及びSS2501の横断部分である。側石を含めた溝幅は、検出面で最大約1.1mである。溝の東側は遺構の残りが悪く、道路及び側溝の廃絶時の埋め戻しと見られる炭混じりの砂質土で覆われている。溝の本来の埋土としては、溝底面に礫混じりの堆積土を確認したのみである。

SD1856 第44次調査で検出した区画44-1南側を区画する東西方向の石組溝である。

SD1857 第44次調査で検出した区画44-1北側を区画する東西方向の石組溝である。

SD1858 区画42-4と42-5の境に位置する石組溝である。SD1851から東へ分岐しており、地形にあわせて東流するものと考えられる。遺構検出面においては、南の側石が北側に比べて一段高くなっている。これは、区画42-5に比べて、区画42-4の生活面の方の標高が高かったことを示しているものと考えられる。ただし、現代の水田区画に伴う段差が遺構の直上に設けられていたことから、溝の上部が破壊されている可能性も考慮する必要があり、断定はできない。また、溝の東側は攪乱が著しく、SD1851からの分岐する箇所から約7mより東側の状況は判然としない。ただし、本来は、屋敷地の東辺区画である石組溝SD1860に合流していたものと考えられる。側石を含めた溝幅は約0.8mである。深さは南の側石上面から約0.4mである。溝の埋土は炭混黄灰褐色土であり、底部に薄い木炭層を確認した。南側石の最上段には、上面の平坦な大型石材が含まれており、区画内の建物礎石を兼ねていた可能性が考えられる。

SD1859 区画42-5と区画42-6を区画する東西方向の石組溝である。SD1851から東へ分岐しており、地形にあわせて東流するものと考えられる。SD1858と同様に、東側の攪乱が著しく、SD1851からの分岐点から約7m地点より東側は判然としない。屋敷地の東辺区画である石組溝SD1860に合流するものと考えられる。南北の側石に顕著な高低差は認められない。溝幅は、側石を含めて約0.7mである。深さは側石上面から約0.5mである。埋土は礫混茶色土である。側石の一部に上面の平坦な大型石材が存在することから建物の礎石を兼ねていた可能性がある。また、側石の一部に笏谷石製の板石を含む。

SD1860 区画42-5・6の区画42-7を区画する南北方向の石組溝である。攪乱が著しく、部分的に遺



挿図9 石灯籠台座出土状況
(東から)

構が途切れている箇所を含む。SD1861が北へ屈曲する箇所から分岐し、SD1852に繋がる。途中で東西の区画溝SD1858とSD1859が合流する。溝は北に向かって傾斜しており、屋敷区画中央部からSD1852に向かって排水する機能を有するものと考えられる。側石を含めた溝幅は、検出面で約0.8mである。深さは側石上面から約0.5mである。調査時にSV1919と認識していた石列はこの溝の一部であった可能性がある。また、SF1888とSF1889の西辺はこの溝の推定ラインに接しており、一体の施設であった可能性がある。

SD1861 区画42-3・8・9の北側を区画する石組溝である。攪乱により溝の一部が途切れているものの、本来はSD1851から東に分岐し、区画42-9北東角まで延びていたものと考えられる。東側はやや不明瞭ながら、南に屈曲しSD1920に接続することを確認した。区画42-8と42-9の区画境では、東から北に向かって屈曲し、SD1860に接続する。側石を合わせた溝幅は、検出面で約0.7mであり、深さは側石上面から約0.3mである。

SD1862 区画42-2・3の東辺を区画する南北方向の石組溝である。南側は攪乱により破壊されているが、本来は区画42-1の東辺まで延びていたものと考えられる。溝は北流しており、掘割当初はSD1861に接続していたものと推定する。ただし、大甕の埋設遺構であるSX1923や石積施設SF1882により、溝の一部が破壊されており、排水施設としての機能を失っていた可能性がある。また、下層第Ⅱ遺構面では、この溝に区画42-3の中央部を流れる東西溝が合流していることを確認した。この東西溝の延長線は、上位で検出した石列SV1918の並びと近似しており、SV1918がSD1862の東西溝部分を踏襲して構築されたものであることを示す。側石を合わせた溝幅は、検出面で約0.7mである。

SD1920 区画42-11と12の境界を区画する石組溝である。下層第Ⅰ遺構面で検出した。H3区の東辺を流れるSD1861に繋がっており、接続部から東へと流れる。溝の接続部の南北には石積施設SF1893と石積施設状の遺構SX1983が存在する。側石を合わせた溝幅は、検出面で約0.7mであり、深さは側石上面から約0.2mである。

SE1875 東西道路SS1850を断ち割った際に、最下段の路面のさらに下層で検出した石積井戸である。この遺構は、当地点の下層にSS1850構築以前の遺構が存在したことを示す。湧水により、井戸底部の様相は不明瞭ながら、径0.2m前後の小ぶりな自然石を6段以上積み上げて構築されており、底面は礫敷となっている。検出面から井戸底までは約1.3mである。溝内からは越前焼中甕(図版28-208)が出土した。

SK1914 H4区の東辺に位置する平面楕円形の土坑である。深さは約0.7mである。H4区の東側は攪乱により遺構が失われているが、区画42-11・12に出入りするためには、H4区の東側に道路が必要となる。この道路は、位置も道幅も不明確であるが、SS1850の南側溝SD1852が途切れた箇所とSK1914の北端が繋がっていること、また、SK1914の長軸が下層で検出したH4区東辺の区画施設SX1977と一致することから、SK1914は道路側溝の一部、もしくは区画境の石垣などの痕跡と推定する。

SX1977 H4区東辺で検出した石列状の遺構である。南北方向に延びる3条の石列で構成される。規模は南北約3.5m、東西約1.2mである。石材は全長0.4～0.6mの大型礫が主体となり、大型礫の隙間には0.1～0.2mの礫が用いられる。また西石列の北端に全長0.7mの上面が平坦な巨石が配される。3条ある石列のうち両端の西石列と東石列は、区画の南北軸に沿って一直線に並んでいるが、中央の石列は石材の配列が不明瞭である。SX1977の東側には、南北方向の道路が想定しており、SX1977は、道路側溝や石垣の一部の可能性がある。下層第Ⅰ遺構面で検出した集石状遺構SX1964は、この遺構の一部と考えられる。

SX1927 SS495に掘り込まれた浅い溝状の遺構である。土層観察の結果、遺構埋土が道路廃絶後の堆積とみられる砂利・礫の多い茶褐色土と一体となっていることから、近世以降の掘り込みと判断した。

SX1959 東西道路 SS1850 上で検出した石列状の遺構である。道路の東西延長に沿って、3条の石列が構築されている。石列の長さは約2.3mである。石材は0.4m前後であるが、一部に全長1.0m弱の大型石材を含む。各石列間は0.2～0.3m程度であり、中央石列と北石列の間には浅い溝が掘り込まれている。道路に関連する遺構と考えられるものの、遺構の性格は不明である。

H1区

区画42-1(第5・6図、PL.11)

SS495及びSX1928に面する区画である。SX1928との間に明確な区画施設は確認できないが、下位検出面で確認したSX2008が区画の南辺と推定する。区画42-2との境も判然としないものの、SD1851の東の側石に含まれる大型石材や、下層第Ⅱ遺構面で検出した石列状遺構SX1930の延長線が、おおよその北辺と推定する。区画の東辺は攪乱を受けている。間口は約5.9mであり、基準尺3間に近似する。奥行はSD1862を基準に復元すると、約18m程度と推定できる。

上位検出面 上位検出面のベースは安定した礫混じりの土である。この遺構面では、焼土が堆積するピットや土坑を検出した。遺構はいずれも上層遺構面に帰属する。

SK1901 最大径約0.9m、深さ約0.3mを測る円形土坑である。単独の大壘埋設遺構の可能性がある。

SB1894 区画内の北西寄りの地点で検出した礎石建物である。礎石とみられる上面の平坦な石材6石を確認したが、石材の一部は一直線上に並ばないものも含まれる。そこで、柱間が約1.55m(5尺1寸)のグリッドを設定し、検出した石材の上に位置を合わせると、おおよそグリッドの交点近くに石材が配置されていることがわかった。そこで、一部の石材は原位置を保っていないものの、これらの石材は建物に伴う礎石であると判断した。柱間は南北2間、東西2間までを確認しているが、建物の東側は攪乱を受けており、全容は不明である。区画の南西角では、砂利面SX1929を検出したが、SB1894との関連は不明である。

下位検出面 下位検出面では、区画の端を示すと考えられる石列状の遺構及び性格不明の砂利面を検出した。遺構はいずれも下層第Ⅱ遺構面に帰属する。

SX1930 区画42-1の北辺と考えられるL字の石列状の遺構である。東西延長は約4.0mである。全長0.3～0.4m程度の礫が並んでいる。礫はすべて自然石である。

SX2008 東西方向にのびる石列状の遺構である。約2.7mにわたって断続的に礫が並ぶ。東西道路SX1928と区画42-1の間に存在することから、区画施設の一部と考えられる。

区画42-2(第7・8図、PL.12)

SS495に面する区画である。区画42-1との境界は明確でなく、SX1930の延長線とSD1851東の側石中の大型石材を結んだラインを区画の南辺と推定する。北辺はSV1917南側溝の延長線と考える。

間口は約9.3mであり、基準尺5間の値に近似する。区画の東辺は攪乱で判然としないが、SD1862を基準に区画の東辺を復元すると奥行は基準尺で8間に近似する約15.4mと推定できる。

上位検出面 上位検出面のベースは、区画42-1と同様の安定した礫混じりの土である。主な遺構は土坑、井戸、石積施設、越前焼大壘の埋設遺構である。遺構は基本的に上層遺構面に帰属する。

SK1902～1904 区画の南西角付近に位置する土坑群である。いずれも埋土は焼土である。配列に規則性はなく、性格は不明である。SK1904の埋土は礫を含む。SK1902の北側でも同様の遺構を検出している。

SE1863 円形の石積井戸である。径は約0.6mであり、石材には、0.4m前後の自然石を用いる。井戸の南側では、井戸の外周に礫が弧を描くように散乱しており、井戸との関連が想定できる。

SE1864 円形の石積井戸である。SE1863の北側約1.0m付近に位置しており、径は0.5mである。石材

には、全長約0.4mまでの自然石を用いる。SE1863同様、井戸の外周を囲むように自然礫が散乱している。
SF1879 一辺が約1m四方の石積施設である。深さは約0.3mである。側壁の石積は3段残存していた。
SF1880 長辺約1m、短辺約0.4mの長方形の石積施設である。深さは0.2m程度である。側壁の上段は残りが悪く、石積の一部は既に失われていた。

SF1881 平面が長方形の石積施設である(挿図10)。検出当初は、長辺約0.9m、短辺約0.8mの長方形の石積施設と認識していたが、遺構の掘り下げに伴い、南側に遺構が広がることが判明した。そのため、本来は長辺約1.5m、短辺約0.9mの長方形の石積施設であり、中央を石積によって区画していたことが明らかになった。深さは0.9mで、石積は6段程度残存していた。遺構内の堆積土は、最上層が遺物及び円礫を多く含む茶褐色土である。中層は、焼土及び炭を含む堆積土であり、締まりは弱い。最下層は炭、焼土、砂混じりの茶褐色土であり、土中に骨片が混じる(挿図11)。中層が廃絶時の焼土と考えると、最下層が機能時の堆積土であり、最上層と中層は遺構廃絶後の埋戻し土と考えられる。



挿図10 SF1881 完掘写真(東から)



最上層：円礫含む茶褐色土（遺物を多量に含む）
 中層：焼土及び炭混じり土（遺構廃絶時の埋戻し土）
 最下層：炭、焼土、砂混じりの茶褐色土（骨片含む）

挿図11 SF1881土層模式図(調査日誌の図面をトレース)

SF1936 長辺約1.0m、短辺約0.6mの長方形の石積施設である。遺構の内から、崩落した石材とみられる大量の礫を検出した。

SX1921 越前焼大甕の埋設遺構である。東西に2基の大甕を並べて埋設する。大甕同士の間隔は約0.1mであり、非常に近接した状態で埋設されていたものと考えられる。大甕は底部から0.4m程が土中に埋設していた。

SX1931 最大約0.3mの礫を並んだ状態で検出した。建物の礎石である可能性があるが、周辺に関連する礎石は検出できなかった。

SX1932 円形の配石遺構である。南に位置する井戸SE1863・1864に比べて不整形であり、方形に近い平面形を有する。石材は最大長約0.5m程度の大型石材を使用する。

SX1933 長楕円形の土坑である。土坑の長軸は区画の長軸方向と一致しており、土坑中央からは笏谷石製の石材が出土している。上層では、自然礫の密集する集石のような状態を検出したが、下層掘削時に遺構の掘方と、土坑内に埋没した笏谷石製の石材(第30図233)及び自然礫を検出した。

SX1934 集石状の遺構である。石列SV1917の延長線上にあり、関連する遺構の可能性がある。

SX1935 礫が散在する遺構である。区画東端の石積施設群に隣接しており、関連する遺構の可能性がある。

下位検出面 上位検出面から0.1～0.3m程掘り下げたところで下層第II遺構面に相当する遺構面を検出した。区画の南側では、上層より0.3m程度掘り下げたところで、黄色の山土混じりの茶褐色土を検出した。また、SX1921の南から土坑SX1933の北側にかけての範囲で、焼土の集中箇所を検出した。

SV1997 区画 42-1 との区画境に位置する石列である。石列状遺構 SX1930 と比較すると、1.0m程度北にずれているものの、延長方向はおおよそ一致する。SX1930 同様に区画施設の一部と考えられる。

SX1998 SE1863・1864 の西側で検出した石敷遺構である。石敷の北側隣接地でも砂利敷を検出しており、いずれも灰白色粘土で被覆されていた。区画の出入口である可能性がある。

区画 42-3 (第7・8図、PL. 13～15)

SS495に面する区画である。区画 42-2 とは石列 SV1917 によって区画される。上位検出面では、区画 42-4 との境界の一部と考えられる SV1999 を検出した。区画の東辺は、SX1940 及び SD1862 である。間口は、基準尺で 5.3 間の約 10.0m である。奥行は基準尺で約 7 間となる約 13.2m である。ただし、SV1918 は、後述する屋敷区画成立当初の区画施設 SX2004 の延長線上にあたり、このラインを境に区画が分かれていた時期が存在する可能性がある。

上位検出面 床土直下の標高 43.7m 付近で検出した。遺構面のベースは、焼土や黄色山土である。遺構は上層遺構面に帰属する。

SV1917 区画 42-3 の南辺に位置する東西方向の石列である。検出長は約 5.6m である。石列の西端は SD1851 の東石列と接しており、接点には、全長 0.8m の長楕円形の大型石材が配置される。石列の南側では、溝を検出した。この溝が区画 42-2 と 42-3 の境界と考えられる。石列には半間ごとに比較的大きめの石材が配置されており、礎石建物の礎石を兼ねていた可能性がある。

SV1918 東西方向の石列である。検出長は約 6.5m である。SV1917 と対になる石列である。SD1851 の 2.5m ほど手前で途切れているが、本来は溝まで石列が続いていたものと考えられる。

SF1882 長辺約 1.6m、短辺約 1.2m の長方形の石積施設である。検出面からの深さ約 0.6m である。南に隣接する SF1881 と南辺がほぼ接している。

SV1999 区画北辺にあたる石列である。遺存状態が悪く 5 石しか検出できなかった。石列は大塚埋設遺構 SX1923-4 の上に構築されていることから、大塚埋設遺構より新しい時期の区画施設と考えられる

SX1922 大塚の埋設遺構である。上層では、6 基の埋設土坑を検出した。そのうち 4 基に大塚が残存しており、残り 2 基は塚の抜き跡と見られる。大塚は底部より 0.3m 程度が埋没していた。遺構周辺の整地土は山土、茶褐色土、炭混じり土である。

SX1923 越前焼大塚の埋設遺構である。上層では、1～4 の 4 個体の大塚を埋設したままの状態を検出した。1～3 の 3 基は東西方向に沿って隙間なく並ぶ。4 は北側のやや離れた位置に埋設される。大塚は底部から 0.4～0.7m 程度が埋没していた。SX1923 を含む一帯は焼土で整地されている。

SX1938 SD1862 に合流する東西溝と重なる位置で検出したビット状の遺構である。

SX1940 南北方向の石列状の遺構である。延長約 2.3m にわたって、最大約 0.5m までの礫が並ぶ。SD1861 の一部が破壊された後の東辺区画施設と考えられる。

下位検出面 上位検出面から 0.1～0.2m 程度掘り下げたところで検出した。グリッド HS ラインに沿って設けた深掘トレンチの土層観察の結果、上層遺構面のベースと下位検出面のベースとなる堆積土に明確な違いはなかった。ただし、下位検



挿図 12 銅銭出土状況 (グリッド HS27)

出面のベースの方が黄色粘土を含むことから、この面を遺構面と判断した。遺構は基本的に下層第Ⅱ遺構面に帰属するものの、深掘トレンチ内で検出したSD2000のみ下層第Ⅲ遺構面に帰属する。

なお、下層第Ⅱ遺構面上で銅銭49枚(第59・60図630～677)が一括出土した(挿図12)。

SE1865 径0.6mの石積井戸である。笏谷石の板石で蓋をし、その上に礫を積んだ状態で埋設していた。

SX1922 上層遺構面で検出した大甕埋設土坑の東側で新たに2基の埋設土坑を検出した。下層の大甕は、上層で検出した大甕の埋土に完全に埋設していたことから、一段階古い時期の埋甕であることが明らかである。ただし、上層の埋甕との関係は明確ではない。2基とも土坑内に大甕が残存していた。

SX1923 下層遺構面では、上層で検出した4基に加え、新たに5～11の7基の大甕埋設土坑を検出した。6～11の遺構埋土には、越前焼の大甕が含まれていたものの、土坑内に据えられた状態ではなく、大甕の破片が埋め戻しの土に混ざり込んだような状態であった。このうち6～9の4基は、上層の大甕を敷設する際の整地土で完全に覆われており、上層遺構形成時には、既に埋設していたことが明らかである。それにも関わらず、1～3、6～10の埋設土坑は4個の甕が2列で整然と並んでいることから、遺構を更新する際に、1～3のみ、古い埋設遺構と同じ場所に大甕を据えたものと推定する。

SX1924 大甕の埋設遺構である。東西方向に並ぶ2基の大甕を検出した。遺構埋土及び遺構の近辺から朝鮮製の雑軸碗や六器、炭化紙、炭化布片、鹿角製品など特徴的な遺物が出土している。

SD2000 深掘トレンチ内で検出した東西方向の石組溝である。側石を含めた溝幅は、約0.5mである。溝は深掘トレンチの範囲外へ延びていく。下層第Ⅲ遺構面に帰属する遺構である。

区画42-4(第7・8図、PL.16・17)

SS495に面する区画である。区画42-3とは石列SV1999によって区画される。区画42-5との境界は石組溝SD1858である。区画の東端は、SD1862である。間口は、基準尺で4.5間の約8.46m、奥行は基準尺で約9.1間となる約17.1mである。

上位検出面 検出面の標高は43.5m付近である。ベースは礫混じり黄灰色土及び炭混じり茶褐色土であり、一部に炭混じりの焼土層の堆積を確認した。遺構はいずれも上層遺構面に帰属する。

SB1895 柱間2間×2間の掘立柱建物である。柱間は東西方向に長く東西方向は1間が約4.2mであり14尺相当である。南北方向は柱間が一定せず、やや不規則であるが、1間がおおよそ8尺半～9尺の約2.6～2.7mとなる。柱穴の直径は残りの良いもので約0.7m程度となる。柱穴の深さは約0.2～0.5mである。

SE1866 径約0.8mの石積井戸である。石材に笏谷石製の板石1点を含む。

SE1867 石積井戸である。径が約0.8mであり、規模はSE1866とほぼ同じである。

SK1905 直径約1.3mの土坑である。SX1923に隣接しており、周辺の整地土が共通することから一連の大甕埋設遺構の可能性がある。

SF1884 長辺約2.1m、短辺約1.0mの長方形の石積施設である。検出面から約0.6mの深さで、西側に炭混黒色土、東側に山土混茶褐色土を検出した。石積は最大4段残存している。

SX1941 区画の南西角で検出した礫敷き遺構である。全長0.3m前後の礫が東西2.3m、南北1.5mの範囲に広がっている。遺構の性格は不明である。

SX1945 石列状の遺構である。区画溝SD1858の延長にあり、側石の一部と考えられる。

下位検出面 上位検出面から0.1m程度掘り下げたところで検出した。ベースとなるのは、黄灰色から黄色の堆積土や炭層などである。下層第Ⅱ遺構面に帰属する。

SF1996 長辺約0.9m、短辺0.7mの長方形の石積施設である。検出面からの深さは約0.4mである。

石積は4段程度残存していた。遺構内部には、崩落した石積の石材が堆積していた。

SK1997 径約1.1mの円形土坑である。西側の一部で礫を検出した。大甕埋設土坑の可能性がある。

区画 42-5 (第7・8図、PL.17・18)

SS495に面する区画である。南に隣接する区画42-4とはSD1858によって区画される。北に隣接する区画42-6との境界はSD1859である。区画の東北角は、SD1860により区画されるが、SD1860の南側は途中で途切れている。そのため、この区画の東側の境界は判然としえないものの、遺構面検出面の高さ等を考慮して、SF1888やSF1889の西辺の延長線がこの区画の東辺であると推定する。

間口は、基準尺で4.5間に近似する約8.5mである。奥行は基準尺で約9.1間となる約17.1mである。**上位検出面** 標高43.3m付近で上層遺構面を検出したが、後世の削平を受けており、主な遺構はSK1907・SX2002のみであった。明確な建物の礎石は検出できなかったが、SD1859の南側石及びSD1858の北側石の石材の中に礎石の可能性のある上面が平坦な石材が含まれていることを確認した。

この区画では、上層遺構面の残りが悪いことから、航空測量を待たずに、上層遺構以外を約0.1m程度掘り下げ、下層第I遺構面を検出した。下層第I遺構面のベースは、黄色山土混じりの暗褐色土や炭混じり暗褐色、礫混じり黄灰褐色土などである。

SK1907 平面楕円形の土坑である。長径約1.0m、短径約0.8mである。

SX2002 礎石状の礫である。区画の軸に対して斜め方向に並ぶ0.2～0.3m程度の礫を3石検出した。

SE1868 径約1.0mの石積井戸である。石積には最大で全長0.6m程度の大型の自然石が用いられる。

SK1906 円形土坑である。直径は約0.7mであり、深さは約0.2mを測る。埋土は焼土である。

SX1946 直径約0.3mの円形に石材を配置した集石状の遺構である。遺構の性格は不明である。

下位検出面 下層第I遺構面を0.3m程度掘り下げたところで遺構面を検出した。この面では、土坑状の落ち込みを検出したほか、明確な遺構と認められるものは無かった。下層第II遺構面に相当する面である。

区画 42-6 (第9、10図、PL.18～20)

SS495とSS1850の交差点の南東に位置する区画である。区画42-5とはSD1859によって区画される。北側はSD1851によって区画される。東側は、SD1860によって区画される。

間口は、基準尺で4.5間に近似する約8.5mである。奥行は、おおよそ6.8間となる約12.7mである。

上位検出面 標高43.0m付近で検出した。この遺構面は南に隣接する区画42-5に比べて0.1m程度低い。遺構面を形成するベースは黄色山土混土や、礫混黄色土である。下層第I遺構面に相当する面である。

SX1948 集石を伴う土坑状の遺構である。遺構検出面では、全長0.5mまでの礫を7石程度検出した。遺構埋土を掘り下げた結果、中央部分が深くなる隅丸形状の土坑であることが判明した。土坑埋土は、焼土及び炭が混じる堆積土、または、礫混じりの暗褐色土である。火災後の処理にあたって、土坑内に礫を投棄したものと考えられる。土坑内からは完形に近い白石が複数出土した(図版38・39・310～312)。

SX1949 越前焼壺の埋設遺構である。壺は口縁を上にしてやや斜めに傾いた状態で出土した。壺の上部では大型の礫を検出しており、礫は口縁の一部を塞ぐように重なった状態であった。

SX1950 集石を伴う土坑状の遺構である。最大約0.7mまでの大型礫を含む。遺構を掘り下げたところ、長径約1.5m、短径約1.2mの楕円形の土坑となり、土坑の検出面上で複数の礫を検出した。土坑の埋土はガラ土である。遺構の性格は不明確ながら、SX1948と同様のものと考えられる。

SX1951 列石状の遺構である。石はL字に配られているようにも見えるが、完全に直角ではない。使用される石材は区画溝等に使用される礫よりも一回り小さい。

下位検出面 上位検出面から約0.1m掘り下げたレベルで検出した。下層第Ⅱ遺構面に相当する面である。

SE1869 石積井戸である。径は約0.7m程度であり、石積は自然石で構成される。

SX2003 埋土に大型の礫を伴う土坑状の遺構である。遺構埋土は炭・焼土混じりの灰褐色土である。遺構の性格は、SX1948やSX1950と同様と考えられる。

H2区

区画42-7 (第11・12図、Pl.20・21)

SS1850に面する区画である。区画42-6とはSD1860によって区画される。南辺はSD1861によって区画される。区画の東辺はH4区との境界にある段差と考えられ、SX1956が区画施設の一部である。

間口は、基準尺で3.7間に近似する約7mである。奥行は基準尺で約11.6間相当の約21.8mを測る。上位検出面 標高約43.3～43.0m付近で検出した。区画の南側約1/3の範囲は、上層遺構面が残存していたものの、北側では上層遺構面が既に削平されていた。そのため、北側は南側の遺構検出面より0.3m程度検出面が低く、遺構は下層第Ⅰ遺構面に属するものと考えられる。

SB1897 下層第Ⅰ遺構面で検出した礎石建物である。南北8間、東西4間で、柱間はおおよそ半間に相当する0.93mである。礎石の大半は失われており、残存する礎石から、規模を復元した。建物の長軸はおおよそ区画の長軸に一致している。建物の東辺及び北東角では、礎石間に礫を並べており、石列状を呈す。

SE1870 石積の井戸である。径は約0.6mである。石積の外側で径約1mの井戸掘方と見られる輪郭を検出した。竈の可能性のあるSX1954とは約1.6m離れた位置にある。下層第Ⅰ遺構面に属する。

SK1908 上層遺構面で検出した土坑である。区画42-4との境となる段差の直下で検出した遺構である。

SK1909 上層遺構面で検出した不定形の土坑である。深さは0.2m程度と浅い。

SF1888 一辺が約1.2mを測る正方形の石積施設である。遺構の東辺の残りがよく、石積は5段程度残存している。検出高からの深さは約0.6mである。東辺石積の最下段にのみ全長0.5m程度的大型石材を使用する。検出面は下層第Ⅰ遺構面であるが、東辺石積の高さから、上層遺構面に属する遺構と推定できる。

SF1889 一辺約1.4mの正方形の石積施設である。隣接するSF1888から北に0.8mほど離れた位置にある。深さは約0.6mである。最下段に全長0.5m程度的大型石材を用いる。検出面は下層第Ⅰ遺構面上であるが、SF1888と同様、本来は上層遺構面に属する遺構と考えられる。

SX1952 竈と推定する遺構である。下層第Ⅰ遺構面で検出し、遺構内を掘り進めたところ、遺構内部に礫敷を検出した。礫は一部しか残存しておらず、正確な規模や形状は不明である。

SX1954 礎石状の礫3石である。礫は南北方向に並んでおり、中央の礫はSB1897の礎石である。

SX1955 下層第Ⅰ遺構面に属する石列状の遺構である。0.3m程度の礫を南北に並んだ状態で検出した。

SX1956 区画東辺に位置する南北方向の石列状遺構である。下層第Ⅰ遺構面に属する。全長約5mである。

SX1973 区画の東辺で検出した石列状の遺構である。上層遺構面に属する。石列は南北方向に延び、長さは約2.8mである。石列状に並んだ礫のうち北半は、石列が二重になっている。同様の遺構SX1956に比べて、やや大型の礫が使用されている。建物の礎石または区画施設の一部と考えられる。

SX2005 中国製輸入陶磁器の一括埋納遺構である。下層第Ⅰ遺構面の砂利敷直上で検出した。内訳は染付大皿1点、染付端反皿10点、白磁大皿1点である(第40・41図325～336)。染付端反皿は10点1セットとして成立していたものと考えられ、横目で埋納されていた。白磁鉢と染付大皿は正位で重ねられており、染付大皿の上に白磁鉢が重ねられていた。各陶磁器の位置関係は大皿・鉢が西側、皿が東側となる。埋納時の掘方は検出できなかったが、検出時の状態から地表面に露出していたとは考えづらく、土

坑内に陶磁器を埋納した後、直ちに掘削土で埋め戻しを行ったものと推定する。そのため、遺物の検出面は下層第Ⅰ遺構面直上であるが、実際に埋納が行われたのは上層遺構面の時期と判断した。

下位検出面 上位検出面より0.2m程度掘り下げたところで遺構面を検出した。遺構は基本的に下層第Ⅱ遺構面に帰属するが、一部の範囲では下層第Ⅰ・Ⅲ遺構面に属する遺構も検出している。

SF1891 長辺が約2.2m、短辺が0.9mの石積施設である。石積の内部は東西方向の石積によって仕切られ、南側の方がやや広い。深さは約0.8mである。下層第Ⅱ遺構面に帰属する遺構である。

SE1873 下層第Ⅲ遺構面に属する石積井戸である。隣接するSF1891の検出面より0.2mほど標高の低い箇所で見出しており、相対的に古い遺構と判断した。井戸の径は約0.7mである。

SX1973 区画東辺に位置する石列状の遺構である。SD1861に接するように据えられた巨石と3条の石列で構成される。巨石は区画の南東角に位置しており、全長約1.2mを測る。3条の石列は巨石の北側に位置する。石列は概ね南北方向に延びるが、北端は東に向かって緩く湾曲する。中央石列と東側石列の間は溝状の掘り込みがある。下層第Ⅰ遺構面段階の区画施設と考えられる。

SX1982 区画42-7と42-11の間に位置する集石状の遺構である。

H3区

区画42-8 (第13・14図、PL.22・23)

東西道路SX1928に面すると推定する区画である。区画の南半は、攪乱により遺構が残存していなかった。西辺はSD1862またはSX1940によって区画される。区画の北辺はSD1861によって区画される。区画の東辺で明確な区画施設は確認出来ないものの、SD1861が北にむかって90°屈曲する地点が、東に隣接する区画42-10との境界であると推定する。

上位検出面 標高約43.7m付近で遺構面を検出した。区画の東側は攪乱を受けており、区画の西辺から約2m程度しか残存していない。遺構面のベースは粘土や木炭灰の暗褐色土や黄色山土等である。遺構は基本的に上層遺構面に帰属する。ただし、区画42-8・9の境目付近で検出した礫の堆積を除去した際、その下層で、下層第Ⅰ遺構面に帰属すると見られる不明遺構SX1970～SX1972を検出している。

SB1896 礎石建物である。SD1862と並行する石列が建物の礎石の一部と考えられる。石列の延長は4.7mを測る。礎石列は区画の西辺に位置しており、本来は東に続くものと考えられる。

SF1883 区画の北西角に位置する石積施設である。長方形の平面プランを有し、長辺約1.5m、短辺約0.9mである。遺構中央を南北方向の石積で区切っており、西側の区画のほうが東側に比べてやや大きい。深さも西の区画の方が0.2m程度深い。区画を仕切る中央石積には0.4m程度の大型石材を含む。

SX1926 区画の西端に位置する大塚埋設遺構である。越前焼大塚1基(第42図345)が単独で埋設されていた。礎石建物SB1969と石積施設SF1883の間に位置する。

SX1972 集石状の遺構である。約0.2m未満の礫が散在するが、石材の配置に規則性は見出し難く、遺構の性格は不明である。下層第Ⅰ遺構面に帰属するものと判断した。

下位検出面 標高約42.1mのところ検出した。この区画では、下層第Ⅱ・Ⅲ遺構面を検出した。下層第Ⅱ遺構面は残りが悪く、グリッドHS22とその周辺のわずかな範囲でしか検出できなかった。そのため、下位検出面の遺構は基本的に下層第Ⅲ遺構面に帰属する。

SD2004 平面プランがL字の溝である。幅は約0.8mであり、溝の両端に石組を有する。南北は約3.6m、東西は約3.7mであり、深さは0.2m程度である。SD2004は下層第Ⅲ遺構面段階の区画溝と考えられる。溝の東西軸はSS495に直交している。溝の西側は途切れており、他の区画施設に接続することはないが、

延長線上にはSV1918やSD1862が存在する。溝の北端は、南側に位置する同時期の区画施設SX2007の東端付近で途切れる。

区画42-9（第13・14図、PL.22・23）

東西道路SX1928に面する区画である。区画の南側が擾乱を受けており、北側にのみ遺構面が残存している。区画の北辺と西辺の一部をSD1861によって区画される。上位検出面において、区画の東辺に明確な区画施設は確認できなかったが、東側に隣接する区画42-12・13と比べて遺構面が一段高くなっており、その際に生じた遺構面の段差が区画の東辺と推定できる。

上位検出面 標高43.4～43.5m付近で遺構面を検出した。区画西半部では礫混じりの堆積土を検出した。上層遺構検出時に、この堆積土を除去したところ、下層第Ⅰ遺構面と考えられる遺構面を検出した。

SK1910 大甕埋設遺構と考えられる、3m四方の正方形の土坑である。遺構埋土は遺物や壁土を多量に含む焼土である。遺構の底面ではピット状の落ち込みを複数確認した。土坑底部の落ち込みは大甕埋設時の掘り込みと推定する。

SK1911 平面プランが隅丸方形の浅い土坑である。長辺約1.5m、短辺約1.2mを囲る遺構の底部にはピット状の落ち込みが1箇所確認できる。埋土には、部分的に焼土が混ざる。

SK1912 平面プランが楕円形の土坑である。長径約0.8mを測り、埋土は焼土である。

SF1885 石積施設である。平面プランは一辺が約0.8mの正方形に近い。深さは0.5mである。

SF1886 一辺約0.9mの正方形に近い平面プランの石積施設である。深さは約0.5mである。遺構の規模は、東側に位置するSF1885とはほぼ同規模である

SF1887 長辺約1.1mで短辺約0.8mの平面プランが長方形の石積施設である。深さは約0.8mである。

SX1967 集石状の遺構である。区画の南端に位置しているが、断片的であり、遺構の性格は不明である。

SX1968 集石状の遺構である。SX1967同様に、一部の礫が石列状に並ぶが、遺構の性格は不明である。

SX1969 SK1910の東辺に沿うように配置された石列状の遺構である。約2.3mにわたり、直線的に並んだ礫を検出した。SK1910の上層に関する遺構であると考えられる。

SX1970 石列状の遺構である。礫の整列方向に規則性は認められない。下層第Ⅰ遺構面に属する。

SX1971 集石状の遺構である。全長0.3m程度の礫で構成され、礫の表面が標高43.4m付近で揃っている。しかし、集石の範囲は断片的で、遺構の性格は不明である。下層第Ⅰ遺構面に属する。

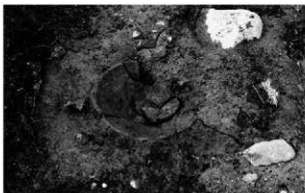
下位検出面 上層遺構面から0.5mほど掘り下げたところで検出した。基本的に下層第Ⅲ遺構面まで掘り下げているが、SX2009などを検出した調査区南側の一部は下層第Ⅰ・Ⅱ遺構面でも掘削を止めている。下層第Ⅰ遺構面及び第Ⅱ遺構面のベースは黄色い土土であり、下層第Ⅱ遺構面上では、薄い木炭層を検出している。また、下層第Ⅲ遺構面上でも同じく薄い木炭層を検出した。

SX2006 大甕埋設遺構である。土坑のうち6基が東西方向に一直線に並ぶ。土坑の径は0.7～0.9mとほぼ共通している。深さは0.1m未満から0.3m程度までばらつきが見られるが、総じて他の大甕埋設遺構と比べると浅い傾向にあり、遺構の上部は削平を受けているものと考えられる。土坑内に大甕は残存していなかった。遺構は下層第Ⅲ遺構面上で検出したが、大甕の配列は下層第Ⅱ遺構面以降の区画軸に準じており、新しい時期の遺構の可能性がある。

SV2007 区画の北辺付近で検出した延長約6.9mに及ぶ石列である。石列は、おおそ東西方向に並ぶ。石列の軸は上位検出面で確認した溝SD1861に比べると北に約15°振っていることから、石列の軸はSS495の延長方向に直交するものと考えられる。西端はSX2004の東端に近接しており、SX2004同様

に下層第Ⅲ遺構面段階の区画施設と考える。

SX2009 越前焼鉢(第44図388)の埋設遺構である(挿図13)。鉢は正位で、口縁部まで地中に埋設されていた。区画42-10でも同様の鉢の埋設遺構を検出しているが、遺構の性格は不明である。



挿図13 SX2009 検出状況(東から)

H4区

区画42-10(第11・12図, PL.23・24)

SS1850の南に面する区画である。隣接する区画42-7からは一段低い位置にあり、西辺の区画施設はSX1956である。区画42-11との境界は判然としませんが、水田区画に伴う段差が、区画の南辺と考える。区画の東側に明確な区画施設は見出し難いが、SK1914やSX1977が道路との区画施設と想定する。

隣接する区画42-11・12は建物配置や石積施設の配置から東側に入出口を有するものと考えられる。この区画も同様に東側に入出口を想定すると、間口は、基準尺で4間に近似する約7.6mである。奥行は、基準尺で5.5間程度となる約10.3mである。

上位検出面 標高約42.3m付近で検出した。床土直下が上層遺構面に相当する遺構面であるが、SE1871を除き顕著な遺構は検出できなかった。床土の下層は礫層であり、上層遺構の大半は攪乱を受けているものとする。礫層の直下では、下層第Ⅰ遺構面を検出した。

SE1871 石積井戸である。径は約0.6mである。区画の北西側で検出しており、敷地の奥に位置した井戸とみることができる。上層遺構面に帰属する遺構である。

SE1872 径約0.6mの石積井戸である。SE1871から東に2.2m程度離れた位置にある。下層第Ⅰ遺構面に帰属する遺構である。

SX1957 越前焼播鉢(第45図391)の埋設遺構である。意図的に底を抜いた播鉢が正位で埋設されていた。区画の西端で検出しており、区画42-7との境界となる段差に近接する位置にある。

SX1958 南北方向の石列状の遺構である。溝SD1852に直行するように接している。上位検出面で確認した遺構であるが、礫を検出した標高が遺構面に比べて僅かに低い位置であることから、下層遺構面に属する遺構である可能性がある。SS1850の延長軸に直交する区画施設の一部と考えられる。

SX1960 最大約0.4mの礫が含まれる集石状の遺構である。配置に規則性は認められない。

SX1961 区画の南西で検出した集石状の遺構である。集石に伴う掘り込み等は確認できなかった。

SX1925 石積井戸SE1872から東に1.3mほど離れた位置で検出した大甕埋設遺構である。検出面は西側に隣接する井戸SE1872に比べて0.2mほど低いが、井戸との位置関係から水甕等の用途を推定する。

下位検出面 下層第Ⅰ遺構面から0.2m程度掘り下げたところで、下層第Ⅱ遺構面を検出した。しかし、区画の南から東にかけての範囲は攪乱を受けているのか、顕著な遺構は検出できなかった。そこで、遺構を確認できなかった箇所を更に0.2mほど掘り下げたところ、下層第Ⅲ遺構面を検出した。

SE1874 石積井戸である。径は約0.8mである。下層第Ⅲ遺構面に帰属する遺構である。

SX1979 内部に0.2m程度掘り込みを有する円形の石列である。周辺で検出した井戸SE1871やSE1872に比べて掘り込みが浅すぎることから、性格不明の遺構と判断した。下層第Ⅲ遺構面に帰属する。

SX1980 方形のプランを有する石列と配石状の礫からなる遺構である。石列の規模は東西約1.5m、南

北約0.7mで、石列内を仕切る南北方向の石列を有する。石列の北側及び東側の礫は0.2m程度であるが、南側には0.3mを超える大型の礫を使用する。石列の内側は0.2m程度掘り込まれている。遺構の平面形が他の石積施設とは異なることから、性格不明の遺構と判断した。下層第Ⅱ遺構面に帰属する。

SX1981 全長0.4m前後の礫を東西に並んだ状態で検出した。礫の上面は平坦でなく、建物の礎石とは考えにくい。下層第Ⅱ遺構面に帰属する。

区画42-11 (第12・13図, Pl. 25～27)

H4区東側に想定する南北道路に面する区画である。北辺は区画42-10との間にある段差である。南辺はH2区とH3区を区画するSD1861の延長ラインと想定する。西辺は、区画42-7との境界にある段差であり、東辺は攪乱により不明である。

開口の幅は、当調査区最大の約13.4mであり、7間に相当する。区画42-10と同様に、SK1914やSX1977を基準に東辺を定めると奥行き、基準尺で5.5間程度となる約10.3mである。

上位検出面 標高42.7m付近で検出した。ベースは茶色・黄色土である。近世以降の石垣SV1984より東側に遺構は残っていないかった。そのため、区画の北東角を部分的に掘り下げ下層第Ⅰ遺構面の検出を行った。遺構は基本的に上層遺構面に帰属するものの、SK1913のみ下層第Ⅰ遺構面に帰属する。

SB1898 区画の北西角に位置する礎石建物である。南西角の礎石を失っているが、残る3つの礎石配置から、南北1間、東西1間の正方形の建物に復元できる。

SB1899 礎石建物である。礎石状の礫と建物の外周に沿って配置された石列を確認している。東西約4.7m(2.5間)南北約3.3m(1.75間)を測る。建物の南西角は礎石が失われている。建物内部にも礎石状の礫が複数確認できるが、断片的で礎石の配列は不明瞭である。下層第Ⅰ遺構面まで掘り下げると、建物基礎の一部と考えられる礫を建物の外周に沿って検出した。

SF1890 東西約1.5m、南北約1.1mを測る長方形の石積施設である。遺構の深さは約0.5mである。

SK1913 径0.9mを測る大型の土坑である。遺構は区画の北東角に位置している。検出面からの遺構の深さは0.2m未満とかなり浅い。下層第Ⅰ遺構面に帰属する。

SX1962 礫敷状の遺構である。およそ3m四方に礫が集中していた。礫は最大0.3m程度であり、礫の分布には粗密がある。下層遺構検出の際に、この礫を除去したが、人為的に構築された遺構と判断しがたく、堆積土の一部である可能性が考えられる。

SX1963 周囲に礫を伴う浅い東西方向の溝状遺構である。溝状の落ち込みは、延長約0.9mであり、周辺には0.3mまでの礫が配置される。検出した範囲が限定的であり、遺構の性格は不明である。

SX1965 SB1899内に位置する礫敷状の遺構である。礫の一部はSB1899の礎石の一部であり、周囲の礫敷状遺構も建物に伴うものである可能性が高い。

下位検出面 上位検出面から0.1m程度掘り下げたところで検出した。この面は下層第Ⅰ遺構面に相当する。ベースは炭・礫混黒灰色土等である。区画の中央部に目立った遺構が存在しなかったことから、0.1mほど掘り下げ下層第Ⅱ遺構面の検出を行った。

SE1876 径0.8mを測る石積井戸である。区画の中央東寄り検出した。下層第Ⅰ遺構面に帰属する。

SK1915 最大径1.5mを測る不整形円形の土坑である。下層第Ⅰ遺構面に属する遺構である。

SK1916 最大径約0.9mを測る大型の土坑である。深さは約0.3m程度である。下層第Ⅱ遺構面に属する遺構であり、性格は不明である。遺構の平面形から、本来は径0.7m程度の円形土坑2基が東西に並んでいたものと考えられる。遺構の規模から大甕の埋設遺構であった可能性がある。

SX1974 集石状の遺構である。全長0.3m程度の礫が集まって状態を検出した。下層第I遺構面に帰属する遺構であり、隣接するSX1975に関連する遺構であると推定できる。

SX1975 礫敷状の遺構である。規模は東西最大約2.6m、南北最大約1.6mである。北西部の約1m四方は礫敷が存在せず、本来の礫敷の範囲は不明である。下層第I遺構面に属する遺構である。使用される礫は最大0.5m未満で、一部の礫は区画の軸に沿って整列している。礫敷の蔵の可能性が考えられる。

SX1976 東西方向の石列状遺構である。延長は約0.8mである。下層第I遺構面に属する遺構である。

SX1978 集石状の遺構である。全長0.3m未満の礫を使用する。礫の配置に規則性はなく、礎石や礫敷とは異なる性格の遺構と判断した。下層第I遺構面に属する遺構である。

区画42-12 (第12・13図、PL.25～27)

H4区東側に想定する南北道路に面する区画である。北辺はSD1861の延長線と考えられる。上位検出面において南辺に明確な区画施設は存在しないものの、下位検出面では、南側隣接区画42-13との間に、東西溝SD1920を検出した。これを区画の南辺と想定する。西辺は、区画42-9との境界にある段差であり、東辺は攪乱により不明である。

間口は、当該区画最大の約6.0mであり、3間に相当する。奥行は、5.5間程度となる約10.3mである。

上位検出面 標高42.7m付近で検出した。ベースは炭混茶褐色土や黄色山土等である。SV1984より東側は河川堆積が広がっており遺構は残っていないかった。検出した遺構は上層遺構面に帰属する。

SV1984 近世以降の石列である。延長方向が現代の水田畦畔と一致することから、後世の石列と判断した。

SX1966 集石状の遺構である。礫はやや散漫に分布しており規則性は認められない。

下位検出面 上位検出面から0.1m以下の深さで、下層第I遺構面に相当する遺構面を検出した。

SE1877 径0.6mの石積井戸である。石材は0.3m前後と小径の井戸にしては大きめ石材を用いる。

SF1892 区画の北西角に位置する石積施設である。平面プランは一辺約1mの正方形に近い。SD1861より一段階古い時期の遺構と考えられるが、帰属遺構面は同じく、下層第I遺構面と考えられる。

SF1893 区画の南西角に位置する石積施設である。平面プランは正方形に近く、一辺は1.1m程度である。SD1861とSD1920の合流部にあわせて構築したものであり、石積施設の南壁と西壁は溝の側石と一体化している。

区画42-13 (第12・13図、PL.25～27)

区画42-12の南に隣接する区画である。区画の北西角付近に遺構面が残るが、区画の南から東にかけての大部分が攪乱を受けている。そのため、区画の全容は不明である。西辺は区画42-9との境界にある段差であり、北辺はSD1920である。

下位検出面 標高42.7m付近で上層遺構面に相当する遺構面を検出したが、礫が散在するのみで顕著な遺構は検出できなかった。上層遺構面から下位検出面までは0.1m未満の堆積しかなく、上層遺構面は後世の削平を受けているものと考えられる。下位検出面は下層第I遺構面に相当する面である。

SX1983 区画の北西角に位置する遺構である。L字形の石列が2重に配置された遺構である。北側の石列の内側を掘り込んでおり、掘り込みの中には、複数の礫が落ち込んでいた。崩壊した石積施設の可能性がある。下層第I遺構面に帰属する。

IV 遺物

第42次発掘調査出土遺物は総数34,188点で、その内訳は表2に示した通りである。

表2 出土遺物一覧

器種	破片数	%		
越前焼	壺	14,189		
	壺	1,829		
	鉢	439		
	掻鉢	2,016		
	御皿	1		
	椀	3		
	花生	3		
	瓶	1		
	壺	1		
	薬研	2		
	その他	1		
	計	18,485	54.0%	
	土師焼	壺	10,900	
耳皿		4		
丸皿		4		
土鉢		76		
土鉢		5		
壺		2		
灯芯押入		2		
その他		2		
計		10,995	32.16%	
鉄		鍋	232	
	皿	38		
	鉢	3		
	壺	128		
	茶入	9		
	小壺	2		
	徳利(瓶)	3		
	水筒	3		
	香炉	2		
	仏花瓶	11		
	その他	4		
	小計	425	1.24%	
	灰	瓶	42	
		皿	175	
		鉢	11	
		御皿	2	
		壺	4	
小壺		2		
香炉		3		
その他		1		
小計		240	0.70%	
黄瀬戸焼		瓶	8	
	壺	8	0.02%	
	計	7		
古瀬戸	深皿	9		
	小計	16	0.05%	
	その他	1		
その他	小計	1	0.003%	
	計	682	2.02%	
	瓦質	火鉢	16	
風炉		1		
香炉		39		
その他		8		
計		54	0.16%	
信楽焼	3	0.01%		
その他	17	0.05%		
日本産陶磁器合計	30,244	88.46%		
国産器・土師器	5	0.01%		
弥生土器	1	0.003%		
近世(産地不明を含む)	257	0.75%		
国産器合計	263	0.77%		

器種	破片数	%		
青磁	瓶	308		
	壺	169		
	器台	2		
	香炉	20		
	鉢	2		
	壺	34		
	花瓶	7		
	水注	1		
	酒急須	2		
	その他	22		
	小計	567	1.66%	
	白磁	瓶	6	
		皿	619	
杯		44		
壺		2		
その他		92		
小計		754	2.21%	
染付	瓶	230		
	皿	517		
	杯	17		
	合子	1		
	瓶	1		
	鉢	1		
	花瓶	1		
	その他	52		
	小計	820	2.40%	
	黒輪	茶入	1	0.003%
豊前彩繪	壺	1	0.003%	
合計	2143	6.27%		
朝鮮製陶磁器	瓶	28		
	皿	3		
	瓶	23		
	壺	4		
	その他	2		
	計	60	0.18%	
タイ製陶磁器	壺	14	0.04%	
産地不明陶器	鉢	9	0.03%	
その他	1	0.003%		
輸入陶磁器合計	2227	6.51%		

器種	破片数	%		
金銀	銅鏡	217		
	釘	176		
	鈿	4		
	蓋	3		
	壺	2		
	壺	1		
	壺	1		
	手括	1		
	金金	1		
	刺金	1		
	小柄・刀子	11		
	新羅(菊籠)	6		
	肥子	1		
	灯明籠	1		
	六部	1		
	日置	2		
	露付金具	2		
御金具	7			
鎌金具	1			
銅線	1			
拍摩金	1			
拍子	1			
佛堂	2			
その他	49			
近世	4			
計	492	1.44%		
大銅瓦	漆碗	1		
	漆皿	1		
	漆片	3		
	折敷	1		
	手敷	1		
	打機取	1		
	その他	14		
	計	22	0.06%	
	石製品	パンドコ	275	
		火鉢	17	
鉢・壺		214		
井戸枠		4		
礎		30		
碓石		54		
石臼		80		
石臼		9		
灯籠		11		
磨石台座		2		
埴石	1			
産地不明製品	2			
板石	43			
その他	99			
計	883	2.58%		
その他	農具製品	1		
	炭化布	1		
	炭化紙	1		
	埴織	1		
	焼土塊	20		
	壺土	11		
	炭化木	2		
	種子	1		
骨	2			
雲母	2			
炭	9			
その他	6			
計	57	0.17%		
総合計	34,188	100.00%		

※この表は、発掘調査時に作成した遺物台帳を基に作成したものであり、整理段階で分類・集計結果に一部訂正を加えた。

遺物の報告にあたっては、遺物台帳により出土グリッドと出土遺構または層位を参照し、遺構内から出土した遺物と遺構外から出土した遺物に分けた。

遺構内から出土した遺物については、各遺構の帰属遺構面を基準に報告を行う³⁾。ただし報告に当たっては、区画の性格を強く反映する遺物及び、図化に堪えうる遺物のみを選択し図化を行ったため、各遺構からの出土遺物を網羅的に掲載したわけでない。そのため遺構面単位の器種のバラエティ及びその内訳については包含層出土物をもって補完した。町割に係る遺構については個別の遺構の存続期間が長く、埋没時期が各遺構面とは対応していないものと推定することから、遺構単位で報告する。

遺構以外から出土した遺物の帰属については、包含層出土遺物とその他に分けて記載する。包含層出土遺物については、上層包含層と下層包含層に二分する。上層包含層出土遺物は、床土直下から上層遺構面までに含まれていた遺物であり、城下町滅亡後の堆積土に含まれていた遺物である。下層包含層は上層遺構面から下層検出面までに含まれていた遺物とする。下層包含層は下層第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3層に分かれており、上層遺構面から下層第Ⅰ遺構面上までに含まれていた遺物を下層第Ⅰ包含層、下層第Ⅰ遺構面から下層第Ⅱ遺構面上までに含まれていた遺物を下層第Ⅱ包含層、下層第Ⅱ遺構面から下層第Ⅲ遺構面上に含まれていた遺物を下層第Ⅲ包含層とする。下層遺構面の検出時に出土した遺物で、帰属層位の明確でないものについては一括して下層包含層出土遺物として扱うこととする。また層序に関係なく、遺構面直上で検出した遺物は、該当する遺構面に対応する包含層出土の遺物として扱う。上記の遺物包含層に含まれない土層から出土した遺物と表採遺物、出土層位が明確でない遺物はその他として扱う。

包含層出土の遺物については、基本的に各調査区単位で報告を行う。ただし、H区は、遺物量が多いことから、H1～4までの中区画単位で報告を行い、これに該当しない遺物のみH区で一括して報告する。出土グリッドが中区画の境界をまたいでいる場合は、グリッド内に占める面積の多い区画を優先して帰属区画を決定した。また、包含層出土遺物の中には、取り上げ時に帰属する層の時期が確定していない場合がある。その場合、日誌の記述と取上げ日、土層に関する記述をもとに帰属層位を決定した。遺構または区画をまたいで遺物の破片が接合した場合は、残存率の高い方を優先して帰属遺構・区画を決定した。ただし、遺構または層位に時期差が存在する場合は、残存率を問わず、より古い遺構または出土層位に帰属させるものとする。その上で、出土遺構・層位・区画の特定が困難な遺物は、表採遺物・表土または現代の堆積土から出土した遺物などと併せて、その他の項目で報告する。

最後に、遺物特性または遺存状態から、図化することが適当ではないと判断され、写真のみ掲載した遺物に関する報告を行う。

遺物の掲載順については、報告単位ごとに、国産土器・陶磁器類、輸入陶磁器類、金属製品、木製品、石製品、その他(骨角製品・紙・布等)の順で報告することとする。なお、銭貨については、便宜上別に図版を組んだ。

A・D区

A・D区では、国産陶磁器及び中国製陶磁器、金属製品、石製品等が出土している。ただし、いずれも近現代の耕作地に伴う床土や後世の河川氾濫によって堆積した砂利・砂利混土からの出土である。

F区

深掘トレンチ内出土遺物 (第17・58図、Pl.28・61)

越前焼 1は大甕である。口縁上部は水平で、肩部に陽刻の「本」と格子目の押印を有する。

中国製陶磁器 2は白磁皿である。見込中央部及び高台内は露胎である。3は染付碗である。見込には人物文が描かれる。C群である。

朝鮮製陶磁器 4は雉軸の碗である。軸は緑がかった発色であり、表面には貫入がみられる。

木製品 5はヒノキ属の板目材を用いた将棋の駒である。表は「角行」、裏は「龍馬」と線刻する。6は漆器碗である。外面に黒漆、内面に赤漆を塗布する。高台内に朱書きの銘がある。7はヒノキの追根目材を素材とした連雀下駄である。指跡から右足用と考えられる。台長15.0cmとやや小振りである。

石製品 8は笏谷石製の盤である。平面形は円形で、底部は平坦である。

金属製品 572は銅銭である。元豊通宝であり、書体は行書体である。

包含層出土遺物 (第17・18・58図、PL.28・29・61)

瀬戸・美濃焼 9は天目茶碗である。高台には薄い錆軸が施される。10は鉄軸の丸碗である。付高台であり。高台部には錆軸が施される。11は鉄軸の茶入である。

瓦質土器 12は香炉と思われる破片である。表面に刻印が刻まれるが、断片的であり図柄は不明である。
中国製陶磁器 13は青磁の稜花皿である。14は染付皿である。B1群であり、胴部外面には宝相華唐草文が施される。15は染付碗である。C群であり、胴部外面は芭蕉葉文が施される。

金属製品 16は鉄製の鑿である。金工などの金属加工に用いられたものと考えられる。573～576は銅銭である。573は元豊通宝、574は永楽通宝である。575は近世の文久永宝である。576は銭種不明である。

石製品 17は硯とみられる破片である。墨の付着を確認した。18は笏谷石製の井戸杵である。全体に煤が付着する。19は粉挽白の上臼である。結晶の粗い花崗岩を使用する。20は茶臼の下臼である。石材は小和清水産とみられる花崗砂岩である。

その他 (第18図、PL.29)

越前焼 21は大甕である。IV群に分類され、押印文は陽刻の「本」と格子目である。ヘラ記号を有する。

瀬戸・美濃焼 22は鉄軸の香炉である。脚付きの香炉であり、胴部は斜め上方に向かって直線的に開く。

金属製品 23は煙管である。銅製の吹口と竹製の羅字の一部が残存する。近世の所産と考えられる。

H・J地区

遺構内出土遺物

町割に関する遺構出土遺物

SS495 (第18・19・58図、PL.29・30・61)

越前焼 24・25は鉢である。口縁が内湾するタイプの鉢である。

瀬戸・美濃焼 26は天目茶碗である。27は灰釉の段皿である。見込に漆で菊花様の装飾を施す。

中国製陶磁器 28は青磁折縁盤である。口縁内面に雷文を有する。14世紀の所産とみられる。29は白磁の皿である。端反になるものとみられる。

金属製品 30は錠である。31は鉛片である。溶融した際の滓とみられ、路面の断割に伴い出土した。577～580は銅銭である。578は2枚が錯着して出土しているため、出土数は合計5枚となる。

石製品 32は平面D字形のバンドコ蓋である。笏谷石製である。33・34はいずれも茶臼の下臼である。35は茶臼の上臼である。挽手穴は二重の菱形である。36は板碑と推定される石造物の破片である。

SS1850 (第19・20・58図、PL.30・61)

越前焼 37は口縁が内湾する鉢である。38は壺の底部である。口縁端部を外側につまみ上げる。

土師質土器 39は皿である。底部が平坦なD類であり、口縁を強く外反させ、端部は斜めに下垂する。

瀬戸・美濃焼 40は底部外面に錆軸を施した鉄軸丸皿である。41は鉄軸の壺である。42・43は鉄軸の仏花瓶である。43は口縁を大きく開くタイプであり、口縁端部は上方につまみ上げる。

中国製陶磁器 44は染付の蓋である。

産地不明陶磁器 45は産地不明の輸入陶磁器の鉢の口縁部である⁴⁾。口縁は大きく外側へ屈曲する。

金属製品 583～585は銅銭である。銭種は咸平元宝、熙寧元宝、洪武通宝である。

石製品 46は上部に穿孔を施した円板状の石製品である。縞模様の日立つ石材を使用する。47は平面D字形のバンドコの身である。48は茶臼の上臼である。挽手穴は二重の菱形で、臼目は8分画である。

SD518 (第20・58図、PL.31・61)

越前焼 49～51は鉢である。52は壺である。53は肩部に突帯を有する短頸甕である。

土師質土器 54～56は皿である。54・55がC類、56がD類である。57は口縁部を菊皿のように波状に整形する特異な個体である。

瀬戸・美濃焼 58は天目茶碗である。高台脇の削り込みは浅い。59は高台を有する鉄軸丸皿である。60は小型の鉄軸茶入である。61は灰軸丸皿である。見込中央部に菊花の印花文が施される。

中国製陶磁器 62は青磁の輪花皿である。内面に白堆線を有する。63・64はいずれも白磁の端反皿である。65は染付皿である。漳州窯産とみられ、見込に蓮花を描く。

朝鮮製陶磁器 66は雉軸の瓶の口縁部である。口縁端部は外反する。

金属製品 67は鍍金を施した筒状の飾金具である。586～590は銅銭である。590は2枚が錆着して出土しているため、出土数は合計6枚となる。確認できた銭種は熙寧元宝と元豊通宝である。

SD1851 (第21・22・58・59図、PL.33～35・61)

越前焼 68～70は壺である。70は口径が小さく、肩部にヘラ記号を有する。71・72は甕である。71は中甕である。72は大甕の体部とみられ、ヘラ記号を有する。

土師質土器 73～87は皿である。73～75は小型で不整形なB類である。76・79～81・86は丸底のC類、それ以外がD類である。74・75、77～80は口縁部にタール痕がある。

瀬戸・美濃焼 88～92は天目茶碗である。90は厚手の体部を有する。93は鉄軸茶入である。94は灰軸平碗である。胴部外面にヘラ描きの蓮弁文を描く。

中国製陶磁器 95は青磁の盤である。見込中央に印花文を施す。96は4箇所に獣脚を有する青磁器台である。97は角杯形と推定される筒形の青磁花瓶である。98～100は染付碗である。98と100はC群である。99は饅頭心タイプであり、高台内に「萬福修同」の銘を有する。E群に分類できる。

金属製品 101は縁金具である。覆輪の可能性が有する。102は銅製の火箸である。103は把手とみられる棒状の銅製品である。端部には接合用の穿孔がある。104は円錐形の飾金具である。105は小柄の破片である。589～614は銅銭である。

石製品 106・107は黒色の石材を使用した玉石である。108・109はバンドコの蓋である。108は平面楕円形であり、蓋中央に窓を有する。表面には窓を影込むための髹書が残る。109は平面D字形である。110は浄教寺産の砥石である。未使用に近く、大部分に整形時の整痕が残る。

SD1852 (第22・23・59図、PL.61)

越前焼 111・112は鉢である。111は口縁部が内湾する。112の体部は直線的に広がる。112は内面にヘラ記号を有す。113は播鉢である。播目は7条一単位である。114～116は壺の底部である。

土師質土器 117～124は皿である。117・118・121・122はC類である。119・120・123・124はD類である。

123は白色の胎土を用いており、薄手のつくりである。124は口径18.6cmを測る大型の皿である。

瀬戸・美濃焼 125・126は灰釉丸皿、127は灰釉端反皿である。125は見込中央に菊花の印花文を有する。126は体部内面に刻文を施す。

中国製陶磁器 128は青磁の稜花皿である。二次的に熱を受けている。129は白磁皿である。底部が厚く基筒底の底部を有するものと考えられる。

金属製品 615・616は銅銭である。615は熙寧元宝である。616は1文字目が「嘉」である。

石製品 130は長方砵である。131は笏谷石製の盤である。平面円形で、底部は丸底となる。132は笏谷石製の火鉢と考えられる。肩部から口縁部にかけてすぼまり、口縁は垂直に立ち上がる。

その他 133は刀装具である。エイの革を長方形に裁断したものであり、刀剣の柄の装飾とみられる。

SD1853 (第23～25・59図、PL.35・36・37・61)

越前焼 134は鉢である。体部は斜め方向に直線的に立ち上がる。135は鉢または壺の底部である。136は壺の底部である。137は甕の口縁である。短頸甕の可能性もある。138は甕の口縁である。139は葉研車である。中央に方形の柄杓があり、一辺は1.7cmである。

瀬戸・美濃焼 140～143は天目茶碗である。144・145は鉄釉の徳利である。

中国製陶磁器 146は青磁の八角皿である。体部に草花文を有する。147・148は白磁の端反皿である。149～151は染付皿である。149はB1群の端反皿、150はC群の基筒底の皿、151はB2群の端反皿である。150は外面に芭蕉葉文、内面に捻花を描く。151は見込と高台内に銘を有する。

金属製品 152は鑿である。片刃鑿であり、刃幅は約0.95cmである。刃部に比して短い茎部を有する。造作材加工用の突鑿と考えられる(渡邊2017)。617・618は銅銭である。

木製品 153は端部が炭化した木片である。付け木として使用された燃えさしと判断した。154は刃物による線状痕のある木片である。まな板のように、刃物を使用する際の台として用いられたものと推定する。樹種はマツ属複雑管束亜属である。

石製品 155は用途不明の石製品である。外形は方形を呈し、内部が平面楕円形に彫込まれる。彫込みの中央には方形の孔が穿たれる。156は笏谷石製の灯台台座である。中央の方形孔に燈台の軸を差し込むものと推定する。157は茶臼の上臼である。挽手穴は三重の菱形である。158は、粉挽臼の下臼である。臼目は8分画である。159は、石灯籠の中台である。側面には線刻で連弁を描く。法量からSD1853出土の石灯籠台座及び宝珠565に組み合わさるものと推定する。

SD1854 (第25・26図、PL.37)

越前焼 160は鉢である。161は中甕の口縁部である。162は短頸甕である。突帯とヘラ記号を有する。

土師質土器 163はB類に属する皿である。器面には指頭圧痕が強く残る。

中国製陶磁器 164は脚付きの青磁香炉である。三方に脚が付くが、脚は短く接地はしない。

木製品 165は折敷の可能性のある板材である。良質なヒノキ材を使用し、表面に刻みが施される。

石製品 166は笏谷石製の盤である。円柱状の脚を有し、風炉や火鉢の可能性もある。167は平面D字型の笏谷石製バンドコ身である。

SD1855 (第26・59図、PL.37・38・61)

越前焼 168は壺の底部である。内面に焼成時の付着物がある。169は甕の口縁部である。

土師質土器 170～172は皿である。170と171がC類、172はD類である。170は口縁端部を上方に積み上げる。いずれもタール痕がある。

- 瀬戸・美濃焼 173・174は天目茶碗である。174は削出し輪高台で、腰部以下は露胎である。
- 中国製陶磁器 175は青磁の基筒底の皿である。底部外面は露胎である。176は青磁の碗である。龍泉窯系碗D類である。177は白磁の稜花皿である。内面に白堆線を有する。
- 金属製品 619は銅銭である。隸書体の宣和通宝である。
- SD1858 (第26・59図、PL. 38・61)
- 中国製陶磁器 178・179は青磁の碗である。いずれも龍泉窯系碗B4類に分類できる。178は二次的に熱を受けている。180は染付の端反皿である。B1群に属し、胴部外面に唐草文を描く。
- 金属製品 181は銅製の紅皿である。高台部を欠損する。620は景祐元宝、621は紹聖元宝である。
- SD1859 (第59図、PL. 61)
- 金属製品 622～624は銅銭である。銭種は622が至道元宝、623・624が元祐通宝である。
- SD1860 (第26図、PL. 38)
- 土師質土器 182は皿である。薄手のつくりで、口縁端部を面取りする。C類に分類できる。
- SD1861 (第26・27図、PL. 38・39)
- 越前焼 183は浅鉢状を呈す鉢である。184は四耳壺である。口縁部から肩部外面に自然釉がかかる。
- 土師質土器 185～195は皿である。185・186はB類であり、185には強い指頭圧痕が残る。186は内面に布目痕が残る。187～191はC類である。187は油痕が強く残り、内外面にタール痕がある。192～195はD類である。195は他に比べて丁寧な整形が施され、口径が大きく、器壁が薄い。
- 瀬戸・美濃焼 196は鉄軸の徳利である。197は鉄軸の壺である。底部は露胎である。198は灰釉の端反皿である。見込には印花文を有するが、釉薬が厚く図柄は不鮮明である。高台内に輪ドチ跡を有する。
- 中国製陶磁器 199は青磁の鉢である、胴部外面に蓮蓬弁文、見込に圈線及び印花文を有する。高台内は輪状に釉を剥ぐ。200は染付の基筒底の皿である。見込には吉祥字人型文を描く。C群に属する。
- 金属製品 201は刀子とみられる鉄製品である。腐食が著しく部位の特定は困難である。
- 石製品 202は浄教寺産の礎石である。未使用に近く、使用面には整形時の加工に伴う凹凸が残る。
- SD1862 (第27図、PL. 38・39)
- 瀬戸・美濃焼 203は鉄軸の壺である。口縁部は折り返し、玉縁状とする。
- SD1920 (第27・28図、PL. 39)
- 越前焼 204・205は壺である。204は小型の壺であり、頸部が大きく窄まる。
- 石製品 206は笏谷石製の盤である。平面は楕円形に近い隅丸の長方形であり、四隅に脚を有する。深さは約7.6cmと浅い。207は粉挽白の上白である。挽手穴は長方形である。白目は8分画である。
- SE1875 (第28図、PL. 39)
- 越前焼 208は越前焼の中甕である。ヘラ記号を有しており、円の内部に小さく「大」の文字が書かれる。15世紀末から16世紀初頭と考えられ⁵⁾、SE1875の埋没年代を示す資料である。
- 土師質土器 209・210は皿である。いずれもC類であり、量量・形態共に類似点が多い。
- 中国製陶磁器 211は青磁の碗である。龍泉窯系碗E類に分類できる。
- 石製品 212は、笏谷石製の盤である。平面は楕円形と考えられ、底部には方形の脚を有する。
- 町屋区画内遺構出土遺物
- 区画 42-1

区画 42-1 では、検出した主な遺構が、遺構面上に露出した礎石建物跡や石列状遺構などであったこ

とから、出土遺物は基本的にH1区包含層出土遺物の項目で報告する。

区画 42-2

上層遺構 (第29・30図、Pl. 39・40)

越前焼 213～215は大甕埋設遺構 SX1921から出土した大甕である。213は格子目の押印文を有する。水平で、幅広の口縁を有しており、IV群に分類できる。214・215は埋設土坑に据えられた状態で出土した大甕である。214はIV群に分類できる。押印文とヘラ記号を有し、押印文は格子目文である。底部外面には縄目痕と考えられる痕がみられる。215は口縁部を欠損する。

土師質土器 216～225は皿である。216～220・222はC類、221・223～225はD類である。いずれも厚手の作りである。222は口縁の一部を外側に引き伸ばし、片口状に整形している。SF1881からは、まとまった量の皿が出土しており、216～218・220・222～225がSF1881出土である。

瀬戸・美濃焼 226はSE1864から出土した灰釉の折縁深皿である。古瀬戸後期様式に属する。

中国製陶磁器 227はSE1864から出土した白磁の皿である。小型の端反皿である。

金属製品 228～231はSF1881から出土した釘である。石積施設の上屋に使用された釘の可能性はある。

石製品 232はSF1879から出土した砥石である。仕上げ砥と考えられる。233はSX1933下層出土の笏谷石製建材である。表面と側面は先端の尖った鶴嘴状の工具痕が残り、小口面には平刃の工具痕が残る。

区画 42-3

上層遺構 (第30図、Pl. 40・41)

越前焼 234はSF1882から出土した片口を有する越前焼の鉢である。片口の外面には指頭圧痕が付く。235はSF1882から出土した播鉢である。播目は9条一単位である。IV群に属する。

土師質土器 236・237はSF1882から出土した皿である。236がC類、237がD類である。236は口縁部内外面にタール痕がある。

瀬戸・美濃焼 238は鉄釉の稜皿である。胴部外面にトチン跡が残る。239は灰釉の端反皿である。見込に印花文を有する。238・239のいずれもSF1882からの出土である。

金属製品 240はSF1882から出土した釘である。本来の長さは10 cm程度であり、三寸釘と考えられる。

下層Ⅱ遺構 (第30・31・59・60図、Pl. 41・61・62)

越前焼 241はSE1865出土の播鉢である。播目は8条一単位である。播目同士の間隔は広く、見込に播目はつかない。Ⅲ群に分類できる。242～245はIV群の大甕である。242はSE1865から出土したもので、他は大甕埋設遺構 SX1924からの出土である。243は陽刻の「本」と格子目の押印文を有する。244はSX1924-2に据えられた状態で出土し、陽刻の「本」と格子目の押印文を有する。また体部内面にもヘラ記号を施す。245はSX1924-1に据えられた状態で出土し、陽刻の「本」と格子目の押印文を有する。

中国製陶磁器 246は染付の端反皿である。B1群に属し、見込に牡丹唐草文を描く。

朝鮮製陶磁器 247はSX1924出土の雑釉碗である。釉は灰白色で、細かな黒斑がみられる。いわゆる「蕎麦茶碗」である。

金属製品 248は銅製の火箸である。249は、六器と考えられる銅製の碗である。248・249ともにSX1924出土である。625～627は元豊通宝である。628～675は、遺構面上で一括出土した銅銭である。報告点数は48点であるが、655は2点の銅銭が錆着しており、実際は49点がまとまって出土している。

石製品 250はSX1924から出土した長方礎である。251はSE1865から出土した砥石である。浄教寺産と考えられる凝灰岩製である。

その他 252 は用途不明の鹿角製品である。半裁した鹿角の内部を溝状に彫り込んでいる。内外面共に丁寧に研磨されており、使用痕等は一切確認できない。SX1924 から出土している。

その他 (大甕埋設遺構) (第 32 ～ 37 図, PL. 41 ～ 45)

大甕埋設遺構 SX1922・SX1923 は、遺構面をまたいで形成されているため、遺物が帰属する遺構面が明確でない。そのため、SX1922・SX1923 出土遺物については、遺構面別の記載と区別して報告する。

越前焼 253 ～ 255 は SX1923 出土の中甕である。253 と 254 は同一個体の可能性がある。256 ～ 265 は SX1922 出土の大甕である。269 ～ 265 は埋設土坑に据えられた状態で出土したものであり、他は遺構埋土から出土している。260・264 は底部のみ残存しており分類不能であるが、256 ～ 259・261 ～ 263 は IV 群であり、265 は III 群である。265 の押印文は陰刻の「本」であり、口縁部形態からも一段階古い様相が伺える。266 ～ 279 は SX1923 から出土した大甕である。266 ～ 272・278・279 は遺構埋土から出土したものである。特に 278・279 は下層掘削時に出土したものである。273 ～ 277 は埋設土坑に据えられた状態で出土している。267 ～ 271・273 ～ 275 は IV 群、266・276 ～ 279 は III 群である。277 は口縁が大きく歪む。

土師質土器 280 は SX1922 出土の皿である。口縁端部をわずかにつまみ上げる。C 類に属する。

瀬戸・美濃焼 281・282 は天目茶碗である。281 は高台脇に釉溜まりを有し、口唇部のくびれが強い。

瓦質土器 283 は瓦質風炉の破片である。窓部として切り込みを入れた部分の破片である。

中国製陶磁器 284 は青磁皿である。体部は内彎する。285 は胴部外面に蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗 B 4 類である。286 は白磁の坏である。287 は白磁の端反皿である。

金属製品 288 は用途不明の鉄片である。表面に木質が付着している。

石製品 289・290 は長方硯である。290 は縁に彫刻を施す。291 は砥石である浄教寺産とみられる凝灰岩である。292・293 は笏谷石製のバンドコ身の底部である。293 は平面楕円形である。

区画 42-4

上層遺構 (第 37・38 図, PL. 45)

越前焼 294 は鉢である。底部に笠状の敷物圧痕が残る。295・296 は大甕埋設遺構とみられる SK1905 から出土した大甕である。295 は押印文を有す。296 は底部内面にヘラ記号とみられる線刻がある。

土師質土器 297・298 は皿である。いずれも C 類である。297 には油痕とタール痕が確認できる。

瀬戸・美濃焼 299 は天目茶碗である。高台脇から高台にかけて、錆釉を施す。

中国製陶磁器 300 は青磁碗である。胴部外面に蓮弁文を有する。龍泉窯系碗 B 4 類に分類できる。

下層第Ⅱ遺構 (第 38 図, PL. 45)

土師質土器 301 は皿である。見込に弱い圈線を有する D 類である。

区画 42-5

上層遺構 (第 38 図, PL. 45)

中国製陶磁器 302 は白磁の皿である。端反皿であり、二次的に熱を受けている。

下層第Ⅰ遺構 (第 38 図, PL. 45)

越前焼 303 は描鉢である。口縁下に沈線を有し、描目は 9 条一単位である。

下層第Ⅱ遺構 (第 38 図, PL. 45)

越前焼 304 は肩部の左右に耳の付く双耳壺である。片口を有し、肩部にはヘラ記号を刻む。

区画 42-6

下層第Ⅰ遺構 (第 38 図, PL. 45)

越前焼 305 は埋設遺構 SX1949 に掘えられていた壺である。口縁の一部を外側に引き伸ばし片口を形成する。肩部にヘラ記号を有しており、四角の中に「日」の字形の記号を記す。

瀬戸・美濃焼 306 は鉄軸の茶入である。底部には糸切り痕が残る。307 は灰釉の端反皿である。

金属製品 308 は小柄である。2 個体に分かれた状態で出土したが、同一個体と考えられる。

石製品 309 は笏谷石製のバンドコムの蓋である。表面には、窓部を彫込む際の罫書が残されている。

下層第Ⅱ遺構 (第 38・39 図、PL. 46)

石製品 310～312 は SX1948 出土の粉挽臼である。いずれも下臼である。310・312 が小和清水産とみられ、311 は笏谷石製である。310・311 の臼目は 8 分画であり、312 は臼目が不均等な 7 分画となる。

区画 42-7

上層遺構 (第 39～41・60・61 図、PL. 46～48・62)

越前焼 313 は壺の口縁部である。314 は SF1889 出土の中甕の口縁部である。

土師質土器 315～323 は皿である。315 は B 類であり、316～321 は C 類、322・323 は D 類である。

瀬戸・美濃焼 324 は SF1889 出土の鉄軸の丸皿である。低い削り出し高台を有する。

中国製陶磁器 325～336 は SX2005 から一括出土した陶磁器である。325 は染付の大皿である。見込に波濤、寿石、鳳凰、双雀等を描く。口縁は稜花形を呈し、四方禪文を描く。胴部外面には花卉文、魚文等が描かれる。326～335 は染付の端反皿である。326 が B 1 群、他が B 2 群に属する。326 は見込に玉取獅子文、胴部外面に宝相華唐草文を描き、高台裏は無銘である。327 から 335 はいずれも見込に折菊の文様、口縁内面に四方禪文を描き、高台裏に銘を有する。銘は、327 は「大明年造」、328～330 は「福」、331～335 は「福」である。327 は他に比べて口縁の反りが弱く、焼成は良好、呉須の滲みは少ない。336 は白磁の大皿である。軸はややくすんだ灰色を呈し、漳州窯産と考えられる。

金属製品 337～339 は釘である。長さはいずれも 4.5cm 前後におさまる。340 は鉄製の毛抜である。先端部が楕形に開く。676～628 は銅銭である。これらの金属製品はいずれも SF1889 からの出土である。

石製品 341 は砥石である。全体的に薄くなっており、一定程度使い込まれたものと考えられる。

下層第Ⅰ遺構 (第 41 図、PL. 48)

瓦質土器 342 は瓦質の香炉である。胴部外面に 2 条の沈線と渦状スタンプ文がめぐる。

下層第Ⅱ遺構 (第 42・61 図、PL. 48・62)

土師質土器 343 は皿である。小型で薄いつくりであり、口縁内外面にタール痕がある。

金属製品 683 は SF1891 から出土した銅銭である。銭種は熙寧元宝である。

下層第Ⅲ遺構 (第 42・61 図、PL. 48・62)

土師質土器 344 は皿である。指頭圧痕を有し、口縁に歪みが見られるが、内面はナゲ調整を施す。

金属製品 684 は SF1873 から出土した銅銭である。銭種は元豊通宝である。

区画 42-8

上層遺構 (第 42 図、PL. 48)

越前焼 345 は SX1926 から出土した大甕である。上半部を欠損しており、口縁形態等は不明である。

土師質土器 346・347 は皿である。いずれも B 類であり、共通して内面に網目状の圧痕が確認できる。

瀬戸・美濃焼 348 灰釉の丸皿である。見込及び高台脇の軸は厚く、胴部内面には刻文を施す。

区画 42-9

上層遺構 (第 42～44・61 図、PL. 48～50・62)

越前焼 350～352は鉢である。350は胴部に粘土塊を貼り付け把手としている。破片資料ではあるが、把手は左右一単位となるものと推定する。351・352は口縁部が内湾するタイプの鉢である。353～357は壺である。353の口縁は受け口状を呈す。356は四耳壺である。357は双耳壺の破片である。358は中甕である。口縁部が外反する。破片はSK1910のほか、隣接するSD1861など周辺遺構からも出土している。

土師質土器 359～363は皿である。363のみD類であり、他はC類である。

瀬戸・美濃焼 364～366は天目茶碗である。364は小型の天目茶碗である。365は内反高台を有する。367は灰釉端反皿である。368は灰釉の丸碗であり、文様等は確認できない。

瓦質土器 369は瓦質の香炉である。胴部に菱形のスタンプ文が巡る。全体的に摩耗が激しい。

中国製陶磁器 370は青磁の端反皿、371は青磁の稜花皿である。372は青磁の直口形碗であり、龍泉窯系統E類に属する。373は青磁香炉であり、胴部中央が張り出し、竹節状を呈す。374～377は白磁の端反皿である。375・376は青みがかった釉調を呈し、高台内面が丸く、砂の付着がみられる。15世紀中頃の所産とみられる。375と376は接合関係が無いものの、同一個体の可能性がある。

金属製品 378・379はいずれも菱形の目釘である。380は環付金具である。鐙、鐙台、座金、座金具がセットで出土している。鐙台は切り頭である。座金具には向い合う羽根を広げた鶴が毛彫される。381～385は銅製の飾金具である。383と384は隅金具である。385は机等の脚部の装飾金具と考えられる。685・686はSK1910から出土した銅銭である。銭種は685が唐國通宝、686は咸平元宝である。

石製品 386は硯である。裏面にいろは歌が線刻される。左列は「ろはにほへ」である。右列は文字が崩れ気味であるが「いろろ」と推定する。387は平面D字形のバンドコ身である。

下層第Ⅱ遺構 (第44図、PL.50)

越前焼 388は大甕埋設遺構SX2004から出土した鉢である。内面にヘラ記号と櫛目を交差させた格子目状の櫛目模様を有する。Ⅲ群に分類される。

下層第Ⅲ遺構 (第44図、PL.50)

金属製品 389は刀子、390は小柄である。389は幅が狭まることから茎部分と考えられる。

区画42-10

下層第Ⅰ遺構 (第45図、PL.50)

越前焼 391は埋設遺構SX1957出土の播鉢である。片口を有し、播目は11条一単位である。意図的に見込を打ち欠き、底部を抜いている。392は大甕である。Ⅳ群であり、肩部に格子目の押印文を有す。

石製品 393は茶臼の下臼である。安山岩とみられる石材を使用し、白目は8分画である。

下層第Ⅲ遺構 (第45図、PL.50)

瀬戸・美濃焼 394はSE1874出土の天目茶碗である。口唇部は薄く、強く外反する。

区画42-11

上層遺構 (第46図、PL.50)

土師質土器 395は皿である。全面にタール痕があるほか、内外面に樹脂状の炭化物が付着する。

石製品 393・397は硯である。397は縁に青海波状の装飾を彫込む。二次的に熱を受けている。

下層第Ⅰ遺構 (第46図、PL.50・51)

土師質土器 398・399はD類の皿である。いずれもSF1876から出土している。同一個体ではないものの法量・胎土・調整方法が共通しており、同時に生産されたものと考えられる。

中国製陶磁器 400は青磁碗である。外面にヘラ描きの蓮弁文を有し、龍泉窯系統B4類に属する。

区画 42-12

下層第 I 遺構 (第 46 図, PL. 51)

越前焼 401 は 8 条一単位の挿目を有する挿鉢である。402 は甕の口縁部である。

土師質土器 403・404 は皿である。いずれも C 類である。403 は口縁内外面にタール痕がある。

瀬戸・美濃焼 405 は SF1892 出土の灰釉端反皿である。胴部外面下半は露胎である。

中国製陶磁器 406 は青磁皿である。薄手の内彎皿である。407 は白磁の端反皿である。釉調はくすんでおり、高台内に角福の銘を有する。408 は C 群に属する染付の蓮子碗である。見込に蓮華文を有する。

金属製品 409 は SF1893 から出土した釘である。現状の長さが 15.3 cm であり、五寸釘と考えられる。

石製品 410 は SF1893 から出土した笏谷石製の盤である。平底であり平面形は隅丸方形を呈す。

区画 42-13

下層第 I 遺構 (第 46・61 図, PL. 51・62)

越前焼 411 は SX1983 から出土した壺である。口縁部は外に向かって直線的に開く。

金属製品 687～691 は SX1983 出土の銅銭で、687 が景祐元宝、688 は洪武通宝、他は銭種不明である。

H 区包含層出土遺物

H 1 区

上層包含層 (第 47・61 図, PL. 51・52・62)

越前焼 412 は鉢、413 は挿鉢である。412 は 9 条一単位の櫛で横方向の波状の櫛目模様を施す。413 は内面に十字形のヘラ記号を有す。414 は大甕体部破片である。押印文とヘラ記号を有する。

瀬戸・美濃焼 415 は内反高台の天目茶碗である。416 は灰釉香炉である。胴部中央及び下部が張り出し、竹節状を呈する。

中国製陶磁器 417 は青磁香炉である。胴部に龍の文様を施す。418 は青磁器台である。平面方形で四隅に脚部を有する。419・420 は白磁皿である。420 は木瓜皿であり、天文年間頃の所産と考えられる。421 は染付の端反皿である。B 1 群に属する。422 は見込に人物文を描く D 群の染付碗である。

金属製品 423 は壺金、424 は肘金である。423・424 は錆着した状態で出土した。425 は鉛の地金である。楕円形の地金を分割しており⁶⁾、分割の際は、0.5m 程度の厚みを残して切れ目を入れ、折り取るように切断する。重量は 464g であり、1 貫目 (3.75kg) の約 1/8 に相当する。629～694 は銅銭である。

下層第 I 包含層 (第 48・49・61 図, PL. 52・53・62)

越前焼 426 は大甕の破片である。押印文を有し、肩部に陽刻の「本」と格子目の押印をめぐらす。

土師質土器 427 は皿である。C 類に分類でき、口縁内外面にタール痕がある。

瀬戸・美濃焼 428 は鉄軸の稜皿である。高台内に輪軸手跡が残る。429 は天目茶碗である。

瓦質土器 430 は香炉である。全体的に摩耗しているが、胴部中央には菊花のスタンプ文が確認できる。

中国製陶磁器 431～436 は龍泉窯系青磁碗である。431 は竊蓮弁文を有する B 2 類である。432～435 は B 4 類であり、435 は見込に印花文を有する。436 は C 類であり、口縁外面に雷文帯を有する。437～439 は白磁皿である。437 は袂り高台を有し、見込にはトチン跡が残る。440～442 は染付の皿である。440・442 は B 1 群に属する端反皿である。441 は E 群の皿であり、高台内に銘を有する。443 は染付の大皿である。全体的にくすんだ釉調であり、漳州窯産である。444 は C 群の染付碗である。

朝鮮製陶磁器 445 は雑釉の皿である。軸はやや緑がかった灰色を呈する。底部を欠損する。

金属製品 446 は銅製の火箸である。447 は銅製の盤である。薄手の作りで、口縁部は肥厚する。695

～697は銅銭である。

石製品 448は笏谷石製のバンドコ蓋である。平面D字形であり、内面に平鑿状の工具痕が残る。

下層Ⅱ包含層 (第49・50・61・62図、PL.53・54・62)

越前焼 449・450は播鉢である。449はⅢ群でありヘラ記号を有する。450はⅣ群である。451は平面方形を呈する平底の浅鉢である。452は壺、453は中甕である。454は大甕である。口縁端部は水平で、Ⅳ群に属する。

瀬戸・美濃焼 455は内面に刻文を施す灰釉丸皿である。456は灰釉の卸皿である。口縁部のみ施釉する。457は黄瀬戸の碗である。胴部下半から高台にかけては錆釉を施す。

中国製陶磁器 458は青磁の丸皿である。459は染付の基筒底の皿である。見込に吉祥字人型文を描く。

金属製品 460は環付金具である。銅線を環状に曲げ、両端は直線状に揃える。698～714は銅銭である。

石製品 461は硯である。462～464は砥石である。463・464は溝状の使用痕が残る。465は平面D字形のバンドコ蓋である。466は茶臼の上臼である。挽手穴は二重の菱形であり、臼目は8分画である。

下位包含層 (第50・62図、PL.54・62)

金属製品 715～717は銅銭である。銭種は715が元豊通宝、716が淳熙元宝、717が永楽通宝である。

石製品 467は粉挽臼である。下臼であり、表面には鶴嘴状の工具痕が残る。臼目は8分画である。

H2区

上層包含層 (第51図、PL.54)

越前焼 468は鉢である。内面の櫛目模様は扇状で、櫛を捻るように動かしながら施文している。

瀬戸・美濃焼 469は天目茶碗である。口縁はS字状に外反する。腰部に錆釉を施す。

下層Ⅰ包含層 (第51・52・62図、PL.54・55・62)

越前焼 470～472は播鉢である。471は播目同士の間隔が広く、播目は内面下半部には続かない。472は播目に重ねて扇形の櫛目模様を施文する。473は壺の破片である。肩部にヘラ記号を有する。474は大甕である。口縁端部は水平で、肩部に凹字の「本」と格子目の押印文を有する。Ⅳ群に分類できる。

土師質土器 475は皿である。外面に指頭圧痕を残し、口縁は不整形である。B類に属する。

瀬戸・美濃焼 476・477は天目茶碗である。477は削り出し輪高台で、周辺に錆釉を施す。478は鉄釉の徳利である。479は灰釉の小壺である。底部に顕著な糸切り痕が確認できる。

金属製品 718～723は銅銭である。722は2点が錆着しており、2枚目の銭種は判読不明である。

石製品 480は平面D字形のバンドコ蓋である。481は玉砥石であり、溝状の使用痕が顕著である。

下層Ⅱ包含層 (第52図、PL.55)

瀬戸・美濃焼 482は天目茶碗である。やや厚手のつくりで、外面には軸溜りがみられる。腰部は露胎である。

中国製陶磁器 483は青磁の稜花皿である。484は龍泉窯系青磁碗B4類である。485は白磁の小坏である。高台周辺は露胎となる。

下層Ⅲ包含層 (第52図、PL.55)

越前焼 486は壺である。胴部は底から上方向に向かって強いヘラナゲを施す。487は徳利である。

中国製陶磁器 488は白磁皿である。高台部を欠損するが、挟り高台を有する皿の一群と考えられる。

石製品 489は笏谷石製のバンドコ蓋である。平面楕円形で、裏面には平鑿状の工具痕が残る。

その他(表土、攪乱堆積等)出土遺物 (第62図、PL.62)

金属製品 724は銅銭である。焼土混褐色土から出土した洪武通宝である。

H3地区

上層包含層 (第53図、PL.55)

越前焼 490は鉢である。口縁を内側に強く折り返しており、口縁下に段が形成される。

瀬戸・美濃焼 491は灰釉丸碗である。高台内部に輪下チ跡が残る。

瓦質土器 492が瓦灯の台部である。口縁が垂直に立ち上がるタイプであり、内面に炭化物が付着する。

朝鮮製陶磁器 493は雑釉の碗である。釉は黄色みがかかった灰色に発色する。見込の砂目跡は平滑に磨く。

下層第I包含層 (第53図、PL.55)

瓦質土器 494は火鉢である。胴上部に突帯を貼付け、胴下半に沈線と花卉状のスタンプ文がめぐる。

下層第II包含層 (第53・54・62図、PL.55・56・62・63)

越前焼 495は鉢、496は挿鉢である。496の挿目は9条一単位であり、IV群に分類できる。

瀬戸・美濃焼 497は黄瀬戸の碗である。高台付近に錆軸を施し、削出しの輪高台を有する。

中国製陶磁器 498は龍泉窯系青磁碗であり、B4類に属する。499は把手付きの白磁小壺である。口縁部が露胎であり、蓋が付属するものと推定する。500～503は染付皿である。500～502はB1群の端反皿である。503はC群の基筒底の皿である。漳州窯産である。

産地不明陶磁器 504は産地不明の輸入陶磁器鉢の底部である。内面に著しい器壁の剥離がみられる。

金属製品 505は刀子である。505は柄の端部を欠損するがほぼ完形である。506は小柄である。725～727は銅銭である。725が皇宗通宝、726が永楽通宝である。727は一文字目が「元」である。

石製品 507は球状石製品である。穿孔部周辺は平坦に整形される。508は笏谷石製のバンドコ身である。平面D字形を呈す。

下層第III包含層 (第54図、PL.56)

越前焼 509は大甕の体部である。肩部にヘラ記号を有する。

瀬戸・美濃焼 510は片口を有する灰釉の深皿である。口縁から胴部上半を施軸する。

瓦質土器 511は瓦灯の台部である。口縁が垂直に立ち上がるタイプであり、底部に高台を有する。

中国製陶磁器 512は青磁の稜花皿である。513は青磁丸皿である。見込を蛇の目に軸剥ぎする。514・515は白磁の皿である。514は疊付露胎である。515は高台内に墨もしくは漆書の銘を有する。

その他(表土、攪乱堆積等)出土遺物 (第54図、PL.56)

越前焼 516は口縁部に穿孔のある鉢の破片である。全体が著しく摩耗しているため表面は白色を呈す。

H4地区

上層包含層 (第54図、PL.56)

中国製陶磁器 517は青磁碗である。胴部外面に退化した雷文を有する。龍泉窯系碗C群である。

下層第I包含層 (第54・55・62図、PL.56・57・63)

越前焼 518・519は鉢である。518は口縁部が内湾する鉢で、底部に脚を有する。脚は3カ所に貼り付けられており、付け根付近を突起状に削り出す。520は壺である。胴部外面を突帯状に施文する。

瀬戸・美濃焼 521は鉄軸の小壺である。522は天目茶碗である。体部下半に濃い錆軸を施す。

瓦質土器 523は火鉢である。台形の脚を貼り付けており、胴部には菊花のスタンプ文を施す。

中国製陶磁器 524は青磁碗である。口縁外面に雷文、胴部内面に雷文と印花文を有する。龍泉窯系碗

C群に属する。525～527は白磁皿である。いずれも端反皿であるが、525は高台部から胴部が外反して口縁に至る。528は染付皿である。端反皿であり、B1群に属する。

金属製品 529は銅製の灯明皿である。見込中央に突起を有する高台付きの皿であり、中央の突起に灯芯を受ける銅板を差し込み固定している。782～784は銅銭である。銭種は782が祥符元宝、783が天禧通宝、784が熙寧元宝である。

石製品 530は笏谷石製のバンドコ蓋である。平面D字形であり、内面には平刃の工具痕が残る。

下層第Ⅱ包含層 (第55・62図, PL. 57・63)

越前焼 531は平底の鉢である。胴部に竹管状工具による円形の記号を有する。532・533は播鉢である。532は10条一単位の播目を有する。Ⅲ群である。533は9条一単位の播目を有する。Ⅳ群である。

中国製陶磁器 534は白磁坏である。胴部外面を面取りし、口縁は八角形を呈する。15世紀前半の所産と考えられる。535は染付の端反皿である。胴部外面に唐草文を描く。B1群に属する。

金属製品 536は銅製の小柄である。くの字状に折れ曲がった状態で出土している。731～734は銅銭である。銭種は、731が咸平元宝、732が治平元宝、733・734が永樂通宝である。

石製品 537は硯である。538は笏谷石製の脚付盤である。底部内面中央と口縁内面に煤の付着がある。

下層第Ⅲ包含層 (第56図, PL. 58)

越前焼 539は鉢である。平底と推定され、胴部は弱く内湾する。

土師質土器 540は焼成前穿孔のある皿である。D類である。タール痕はない。

下層包含層 (第56図, PL. 58)

越前焼 542は播鉢である。播目は8条一単位であり、播目の間隔は広い。Ⅲ群に属する。543は大甕の口縁である。口縁は外反し、端部は丸くおさめる。Ⅲ群に分類できる。

瀬戸・美濃焼 544は天目茶碗である。底部の鋳軸は薄い。二次的に熱を受けている。

瓦質土器 545は香炉である。台形の脚を有し、胴部外面には渦状のスタンプ文を施文する。

金属製品 546は刀子である。刀身の先端を欠損するが、柄の一部と刀身が残存している。

石製品 547は砥石である。浄教寺産の凝灰岩製であり、両面に使用による研磨面が確認できる。

その他(表土、攪乱堆積等)出土遺物 (第56・62図, PL. 58・63)

中国製陶磁器 548は青磁の腰折れの皿である。見込を蛇の目に釉刺ぎする。549は青磁の獣脚付き香炉である。550は白磁の坏である。体部下半が露胎となる。551は染付の端反皿である。胴部外面に唐草文、見込に梵字と仏器を描く。B1群に属する。

金属製品 735・736は銅銭である。735は元豊通宝、736は元祐通宝である。

石製品 552は粉挽白の上白である。小和清水産とみられる花崗砂岩である。白目は8分画である。

H地区包含層

上層包含層 (第56図, PL. 58)

中国製陶磁器 553は青磁の折縁の小皿である。胴部外面に蓮弁文を有し、15世紀中頃の所産とみられる。554は染付の基筒底の皿である。見込に捻花文を描く。C群に属する。

その他 555は唐津焼の碗である。後世の耕作等の際に混ざり込んだものと考えられる。

下層第Ⅰ包含層 (第56図, PL. 58)

産地不明陶磁器 556は産地不明の陶器鉢である。口縁部のみ残存する。

下層第Ⅱ包含層 (第57図, PL. 58)

中国製陶磁器 557 は染付の直口碗である。胴部は直線的に立ち上がる。D群に属する。

下位包含層出土遺物 (第57図、PL.58)

瀬戸・美濃焼 558 は天目茶碗である。高台周辺に錆釉が施される。二次被熱により釉が泡立っている。

その他(表土、攪乱堆積等)出土遺物(第57・63図、PL.59・63)

越前焼 559 はSS495とSS1850の交差点付近で出土した短頸甕である。肩部に貼付け突帯を有する。

瀬戸・美濃焼 560 は鉄釉の壺である。広口の直口壺であり、胎土は灰白色で焼成は堅緻である。

中国製陶磁器 561 は染付の端反の碗である。口縁内面に四方禪文を描く。B群に分類できる。

金属製品 562 は用途不明の輪状に丸めた銅線である。735～753は銅銭である。

石製品 563 は獣面の装飾のある硯である。陸部と海部は瓢形を呈し、硯面の縁には兎の頭部が彫刻される。564は脚付盤である。565は石灯籠の宝珠である。SD1853出土の台座や中台159と組み合わせものである。

その他 566は土師質の埴場である。見込は使用により黒色化しており、微細な銀粒子が付着する。567はタイ製の壺である。胴部外面に格子目のタタキを施す。内面は肩部から下に黒漆を塗布する。いわゆるハンネラの壺である。

その他(第57・63・64図、PL.59・60・63)

本調査にあたって、表探された遺物、または出土地が明確でない資料をここで報告する。

瓦質土器 568は脚付きの香炉である。胴部に渦状のスタンプ文と2条の沈線がめぐる。

金属製品 569は銅製の傘釘である。角錐状の釘部の頭に傘部を溶着する。754～783は銅銭である。

石製品 570は球状石製品である。穿孔部の中には木質が付着しており、周辺には接着剤とみられる漆が残存し、別の部品が接着されていたと考えられる。571は笏谷石製の浅い盤である。底部は厚く、やや丸底状を呈す。

写真報告資料 (PL.60)

784は華南彩釉陶器皿である。複弁の蓮花形の皿である。下層遺構面を覆う黄色山土から出土している。785は中国製とみられる茶入の破片である。薄手のつくりであり、外面に上部に黒褐釉が施される。786は薄手の銅製品の細片である。片面に鍍金が施される。器種は不明である。787～791はいずれも基石である。黒色の扁平な自然礫を素材としている。掲載した遺構内出土の5点に加えて、遺構外から6点の基石が出土している。792は炭化紙片である。複数枚の紙が重なった状態で炭化している。炭化紙の表面には径約0.3cmの紐及び繊維質の物質が付着している。紐は紙の束を綴っていた縦紐と考えられる。剥離した紙片に文字の一部とみられる線が確認できた。SX1924の付近から出土している。793は炭化した布片である。0.02cm以下の繊維を織り込んでいる。布表面には、0.2～0.3cmの紐が付着している。SX1924の付近から出土している。794はSK1910から出土した雲母の破片である。最大2cm程度の細片である。香を焚く際の銀葉と考えられる。795はSK1910から出土した二次被熱を受けた壁土である。粘土質の土にササ、礫、砂などが混ぜられている。796はSE1975及び下層第Ⅲ遺構面から出土した炭化米である。いずれも片面に木片や板材が付着している。797は乾燥した漆片である。0.1cm以下の薄い板状を呈す。容器等に付着した漆が固まったものと推定する。

表4 金属製品観察表

注1：法番の〔 〕内数字は残存値を示す。

注2：材質については外観から慣例的に判断したものであり、科学分析を踏んだ結果ではない。

No.	器種	材質	区画	面	地区	層/遺構	法番 (cm)			備考	図 P/L
							長	幅	厚		
16	壺	鉄	F	包含層		遺構面	06.25	1.3	0.7		17/29
23	樽首	銅	F	その他	HP25	HPアザシ	17.20	0.6	0.8	継ぎは竹製、近世	17/29
30	錠	鉄	B	区画	HP、JK30	SS495	13.6	3.2	0.8		18/29
31	銅片	銅	B	区画	HP29	SS495	2.3	2.1	0.5		18/29
67	銅金具	銅	J	区画	HP、月32	SD518	1.7	0.8	0.8	鍍金あり	20/31
101	鎌金具	銅	B	区画	HP29	SD1851	0.27	0.70	0.4	薄板か	22/33
102	火箸	銅	B	区画	HP29	SD1851	0.4		径 0.4		22/33
103	把手	銅	B	区画	HP29	SD1851	112.90	0.9	0.9		22/33
104	銅金具	銅	B	区画	HP29	SD1851	3.0		径 0.8	円形跡	22/33
105	小柄	銅	B	区画	HP29	SD1851	0.30	0.30	1.2		22/33
152	鑊	鉄	B	区画	HP23	SD1853	113.30	1.2	0.9		24/36
181	紅土	銅	B	区画	HP28	SD1858	4.9	11.70	-	高台底欠損	26/38
201	刀子	鉄	B	区画	HP23	SD1861	110.30	1.1	0.3		27/39
228	釘	鉄	42-2	上層	HP25	SP1881	15.30	0.6	0.6		29/40
229	釘	鉄	42-2	上層	HP25	SP1881	13.50	1.0	0.7		29/40
230	釘	鉄	42-2	上層	HP25	SP1881	14.60	0.7	0.6		29/40
231	釘	鉄	42-2	上層	HP25	SP1881	14.00	0.8	0.4		29/40
240	釘	鉄	42-3	上層	HP25	SP1882	11.1	0.9	0.9		30/41
248	火箸	銅	42-5	F層II	HP28	SS1924	12.4		径 0.4		31/41
249	火箸	銅	42-5	F層II	HP28	SS1924	7.6	3.3	4.0	法番：口径・器高・底径	31/41
286	銅片	銅	42-3	その他	HP	SS1925	13.6	1.4	3.1	木質付着	36/44
306	小柄	銅	42-6	F層I	HP28	SS2003	04.1	0.8	0.4	法番は35-1、35-2長：(4.90、幅：0.9、厚：0.3	38/45
337	釘	鉄	42-7	上層	HP24	SP1889	14.30	0.3	0.3		41/48
338	釘	鉄	42-7	上層	HP24	SP1889	14.60	0.9	0.8		41/48
339	釘	鉄	42-7	上層	HP24	SP1889	4.4	0.7	0.5		41/48
340	手板	鉄	42-7	上層	HP24	SP1889	7.5	1.8	1.1		41/48
378	日置	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	1.7	2.5	1.8	巻形	43/49
379	日置	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	11.60	2.3	1.8	巻形	43/49
380	隠行金具	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	6.5	-	-	器内径約3~4cm、木質付着	43/49
381	銅金具	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	1.6	1.5	1.5		43/49
382	銅金具	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	4.2	2.3	1.6		43/50
383	銅金具	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	4.3	6.0	5.8	銅金具	43/50
384	銅金具	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	6.1	6.2	1.6	銅金具	43/50
385	銅金具	銅	42-9	上層	HP21	SK1910	7.1	13.1	12.3	銅金具	44/50
389	刀子	鉄	42-9	F層III	HP20	SV2007	09.20	0.3	1.3		44/50
390	刀子	鉄	42-9	F層III	HP20	SV2006	15.20	0.3	1.3	折り曲げ	44/50
409	釘	鉄	42-12	F層I	HP20	SP1893	15.3	1.8	1.0	五寸釘	46/51
423	鍍金	鉄	III	上層包含層	HP29	遺構面	5.8	0.7	1.1	423と一体	47/52
424	鍍金	鉄	III	上層包含層	HP29	遺構面	15.90	1.2	0.5	423と一体	47/52
425	鍍金	鉛	III	上層包含層	HP29	床土底上	9.6	5.8	2.4	重量 464 g	47/52
436	火箸	銅	III	F層I包含層	HP29	遺構面	115.70	0.5	0.4		49/53
447	銅	銅	III	F層I包含層	HP25	遺構面	17.7	2.5	10.0	法番：口径・器高・底径	49/53
460	隠行金具	銅	III	F層II包含層	HP26	砂利混茶褐色土	2.0	0.4	0.9		50/54
505	刀子	鋼・鉄	III	F層II包含層	HP24	灰褐色山土	120.80	1.5	0.2		54/56
506	小柄	銅	III	F層II包含層	HP、HP24	灰褐色褐色土	15.20	1.4	0.3		54/56
529	灯明蓋	銅	III	F層I包含層	HP18	遺構面	8.7	2.0	4.4	法番：口径・器高・底径、灯芯受けの器高 2.4 cm	55/57
536	小柄	銅	III	F層II包含層	HP20、21	遺構面	4.5	11.40	10.20	折り曲げ	55/57
546	刀子	鉄	III	F層II包含層	HP20、21	遺構面	9.7	1.1	0.4		56/58
562	銅鑄	銅	B	その他	HP19、20	褐色硬質土	2.5	2.6	0.2		57/59
569	釘	銅	B	その他		表層	2.2	2.2	2.9	巻釘	57/59

表5 木・石・骨角・その他製品観察表

注1: 法量の() 内数は残存量を示す。

注2: 石製品の材質は肉眼観察(一部実体顕微鏡使用)によるもので、科学分析を経た結果ではない。

注3: 木製品の観測方法は両方カミソリ(フェザ-製FB-10)を用いて木製品から切片(木口面、横目面、板目面)を採取し、生物顕微鏡(ニコン製F200)によって40~400倍で観測同定した。同定に用いたプレパラートは水性材料用(大産産業製マウントキットアクアエス)で封入し、当館にて保管している。

No.	器種	材質	区画	面	地区	層/遺構	法量 (cm)			備考	図 11
							長	幅	厚		
5	付根板	木	F	-	FP20	深塚トレンチ	3.0	2.9	0.65	文字陰刻、角行(龍口)、ヒノヤ直	17/29
6	漆桶	木	F	-	-	深塚トレンチ	-	-	-	-	17/28
7	漆塗り皿	木	F	-	FP20	深塚トレンチ	15	6.4	2.4	右足用、ヒノヤ	17/28
8	皿	笄石	F	-	FP25	深塚トレンチ	径 17.9	138.0	-	底面平直	18/28
17	皿	緑松炭	F	包含層	FI、F20	聖徳土	08.0	15.9	1.30	断面、破損後に墨付着か	18/29
18	丹戸枠	笄石	F	包含層	FP26	遺構面	116.3	118.0	119.2	-	18/29
19	粉埴臼	花崗岩	F	包含層	FP27	遺構	径 40.4	13.7	上白	-	18/29
20	茶臼	花崗砂岩	F	包含層	FP27	遺構面	径 37.0	112.1	下白、小和清水産	-	18/29
32	バンドコシ	笄石	J	区画	JK32	SS495	16.8	110.5	3.5	平面口字部	18/30
33	茶臼	笄石	J	区画	-	SS495	径 38.0	8.2	下白、8分画	-	19/30
34	茶臼	安山岩	J	区画	-	SS495	径 38.5	9.7	下白	-	19/30
35	茶臼	笄石	J	区画	JK31	SS495	径 21.4	17.3	上白	-	19/30
36	石造物破片	笄石	J	区画	JK31	SS495	15.2	120.7	3.6	板状破片か	19/30
38	不明石製品	緑松炭か	H	区画	HP23	SI1850	径 4.6	2.1	上部に径 0.2mm程度の穿孔。浄数寺産か?	-	20/30
47	バンドコシ	笄石	H	区画	HP23	SI1850	09.3	20.9	7.6	平面口字部	20/30
81	茶臼	安山岩	H	区画	HP26、HP27	SI1850	径 18.0	111.2	上白 8分画	-	20/30
104	玉石	安山岩	H	区画	HP29	SD1851	2.5	3.4	2.5	玉砂利	22/33
107	玉石	安山岩	H	区画	HP29	SD1851	2.1	2.6	1.75	玉砂利	22/33
108	バンドコシ	笄石	H	区画	HP29	SD1851	9.6	112.6	1.9	-	22/33
109	バンドコシ	笄石	H	区画	HP、HP	SD1851	15.7	114.8	3.8	-	22/33
110	砥石	緑松炭	H	区画	HP29	SD1851	18.5	10.2	10.8	浄数寺産、墨痕あり	22/33
130	皿	緑松炭	H	区画	HP23	SD1852	14.1	8.9	1.5	長身型	22/35
131	皿	笄石	H	区画	HP27	SD1852	-	112.0	-	丸底	22/35
132	火鉢	笄石	H	区画	HP27	SD1852	-	8.2	-	-	22/35
133	刀筭長	漆	H	区画	HP23	SD1852	13.3	0.4	1.6	エイ骨製刀筭長	22/35
153	木片	木	H	区画	HP24、25	SD1853	13.3	2.0	2.2	先端部炭化、磨えし、マツ属産骨管束属	24/36
154	木片	木	H	区画	HP25	SD1853	39.0	0.3	1.0	表面に不規則な線状痕。マツ属産骨管束属	24/36
155	不明	笄石	H	区画	HP29	SD1853	66.2	14.9	3.3	-	24/36
156	磨り台座	笄石	H	区画	HP28、HP	SD1853	径 19.1	18.4	-	-	24/36
157	茶臼	笄石	H	区画	HP	SD1853	径 21.0	09.0	上白	-	24/36
158	粉埴臼	笄石	H	区画	HP	SD1853	28.4	10.1	-	下白、8分画	24/36
159	行篋	笄石	H	区画	HP	SD1853	59.8	79.8	18.3	石籠中台	25/37
160	手敷	木	H	区画	HP32	SD1854	06.5	2.9	0.1	ヒノヤ	26/37
166	笄石	笄石	H	区画	HP32	SD1854	-	06.5	-	磨付、風が・火鉢の可能性あり	26/37
167	バンドコシ	笄石	H	区画	HP32、HP32	SD1854	13.8	17.0	14.5	平面口字部	26/37
202	砥石	緑松炭	H	区画	HP20	SD1861	11.5	8.3	3.4	浄数寺産、ほぼ未使用	27/39
204	笄石	笄石	H	区画	HP21、HP20、HP20	SD1920	118.7	120.6	11.6	磨付	27/39
207	粉埴臼	安山岩	H	区画	HP20、HP20、HP21	SD1920	径 28.8	10.9	上白、8分画	-	28/39
212	皿	笄石	H	区画	HP、HP22	SE1875	-	116.5	139.4	磨付	28/39
232	砥石	緑松炭	42-2	上層	HP25	SP1879	23.9	7.4	2.3	柱上載	29/40
233	漆桶	笄石	42-2	上層	HP27	SK1923	38.4	19.8	12.8	-	30/40
236	皿	緑松炭	42-3	下層II	HP28	SK1924	10.4	6.8	1.1	長身型、無文	31/41
253	砥石	緑松炭	42-3	下層II	HP28	SE1905	08.0	3.6	1.20	浄数寺砥石 長さ 08.8、高さ 1.3、幅 3.6	31/41
255	不明	鹿角	42-3	下層II	HP28	SK1924	4.8	1.3	2.0	-	31/41
289	皿	緑松炭	42-3	その他	HP26	SK1923	110.3	7.6	11.4	-	36/44
290	皿	緑松炭	42-3	その他	HP27、28	SK1922	13.0	8.2	1.9	-	36/44
291	砥石	緑松炭	42-3	その他	HP・V河	SK1922	12.2	9.2	4.0	浄数寺砥石	36/44
292	バンドコシ	笄石	42-3	その他	HP26	SK1923	112.6	125.6	15.0	底面のみ残存	36/45
293	バンドコシ	笄石	42-3	その他	HP26、HP25	SK1923	19.6	23.9	09.0	平面輪郭形	37/45
309	バンドコシ	笄石	42-6	下層I	HP28	IX2003	11.2	14.5	2.6	産 磨り台集中地点 pit 1か	38/45
310	粉埴臼	花崗砂岩	42-6	下層II	HP28	SK1948	径 29.6	12.1	下白、8分画	-	38/46
311	粉埴臼	笄石	42-6	下層II	HP28	SK1948	径 32.7	12.8	下白、8分画	-	39/46
312	粉埴臼	花崗砂岩	42-6	下層II	HP28	SK1948	径 30.5	14.3	下白、7分画	-	39/46
314	砥石	緑松炭	42-7	上層	HP24	SP1889	06.8	3.4	0.8	-	41/48
316	皿	笄石	42-8	上層	HP25	SP1883	11径 41.0	09.0	-	-	42/48
366	皿	緑松炭	42-9	上層	HP21	SP1886	7.5	3.5	1.3	裏面に文字の線刻	44/50
367	バンドコシ	笄石	42-9	上層	HP	SP1887	17.8	114.8	110.3	平面口字部	44/50
369	茶臼	安山岩	42-10	下層I	HP21	SP1872	径 38.0	11.9	下白、8分画	-	45/50
386	皿	緑松炭	42-11	上層	HP20、21	SP1899	06.0	3.9	1.2	-	46/50
397	皿	緑松炭	42-11	上層	HP21	SP1890	17.9	15.3	1.9	背向炭化線刻	46/50
410	笄石	笄石	42-12	下層I	HP20	SP1893	121.4	118.9	8.1	平直、平面隅丸方形	46/51
448	バンドコシ	笄石	HP	下層I包含層	HP24	他土地	15.1	17.9	3.6	産	49/53
461	皿	緑松炭	HP	下層II包含層	HP28、29	深塚トレンチ	15.2	7.9	2.1	-	50/54

No.	品種	材質	区画	面	地区	層/遺構	法量 (cm)			備考	図 頁.
							長	幅	厚		
462	灰石	花崗砂岩	H1	下層Ⅱ包含層	ⅡB28、29	下層層り下丁	10.7	4.0	2.7	小和清水産か	50/54
463	灰石	頁岩	H1	下層Ⅱ包含層	ⅡB28	灰褐色土	12.8	7.8	1.0	器具使用痕、側面層り切り痕	50/54
464	灰石	頁岩	H1	下層Ⅱ包含層	ⅡB28、29	下層層り上丁	7.1	7.3	2.1	器具使用痕	50/54
465	バンドロ産	碧谷石	H1	下層Ⅱ包含層	ⅡB27、ⅡB27	遺構面	(11.6)	14.2	3.5	平面D字形	50/54
466	茶臼	花崗砂岩	H1	下層Ⅱ包含層	ⅡB20	遺構面	径 23.6	18.2	上丁、8分画、後半六二重巻形	50/54	
467	粉挽臼	花崗砂岩	H1	下層Ⅱ包含層	ⅡB、ⅡB28	-	径 28.4	10.6	下丁、8分画	50/54	
468	バンドロ産	碧谷石	H2	下層Ⅰ包含層	ⅡB23	砂利混茶褐色土	13.0	16.6	3.4	平面楕円形	52/55
481	灰石	粘板岩	H2	下層Ⅰ包含層	ⅡB21	紅褐色粘茶褐色土	10.9	4.9	1.4	玉嵌石	52/55
489	バンドロ産	碧谷石	H2	下層Ⅱ包含層	ⅡB24	灰褐色土	17.1	(22.7)	3.8	平面楕円形	52/55
507	産状石製品	碧谷石	H3	下層Ⅱ包含層	ⅡB、ⅡB24	灰褐色黄褐色土	5.0	5.1	4.3		54/56
508	バンドロ産	碧谷石	H3	下層Ⅱ包含層	ⅡB21	黄色山土	16.30	(18.2)	(16.7)	平面D字形	54/56
530	バンドロ産	碧谷石	H4	下層Ⅰ包含層	ⅡB20、21、ⅡB20	褐色茶褐色土	16.6	19.3	3.8	平面D字形	55/57
537	磁	粘板岩	H4	下層Ⅱ包含層	ⅡB、ⅡB23、ⅡB21、ⅡB21	灰褐色褐色土	(5.6)	7.4	2.25		55/57
538	磁	碧谷石	H4	下層Ⅱ包含層	ⅡB21	遺構面	(21.1)	(12.8)	14.9	底部内面に窪、平面楕円方形	55/57
547	灰石	粘灰岩	H4	下層Ⅱ包含層	ⅡB20、21	遺構面	17.1	3.1	1.5		56/58
552	粉挽臼	花崗砂岩	H4	その他	ⅡB22	遺構面	径 30.0	(12.0)			56/58
903	磁	粘板岩	H	その他	ⅡB32、ⅡB31、ⅡB32	拡張トレンチ地	(13.4)	(8.1)	1.8	断面視	57/59
964	磁	碧谷石	H	その他	ⅡB11	トレンチ地付近	(18.1)	(15.6)	(6.3)	脚付	57/59
965	打籠	碧谷石	H	その他	ⅡB28	遺構面	(32.3)	22.6	22.2	石打籠宝珠	57/59
966	増埴	土器	H	その他	28 判	東北セクシオン	5.8	2.4	3.5	磁粒子付着	57/59
967	磁	土器	H	その他	ⅡB28、29、32、ⅡB32	SD1853、SD1854、SD1855、SS1850	14.8	(15.3)	-	叩き目文面、タイ面、内面に黒漆塗布 法量：口径、器高、底径	57/59
970	産状石製品	碧谷石		その他	-	表採	5.0	5.0	4.1	穿孔部周りに漆による接着痕	57/59
971	磁	碧谷石		その他	-	表採	(27.8)	(7.5)	(25.0)	碧谷石	57/60

No.	題名	区画	面	地区	層/遺構	法量 (mm, g)			書体	初納年	備考	図/PL	
						長	幅	厚					
740	洋行通宝	日区	その他	H118	赤土砂利	2.47	0.10	1.94	真書	北宋	1026	63, 63	
741	大聖元宝	日区	その他	-	海東セラクションペレット	2.48	0.09	1.81	真書	北宋	1023	63, 63	
742	阜安通宝	日区	その他	H129, 30	遠路紅染区	2.48	0.10	2.65	真書	北宋	1030	63, 63	
743	阜安通宝	日区	その他	H8 - 1律 別	遺構面	2.47	0.12	1.25	篆書	北宋	1030	63, 63	
744	阜安通宝	日区	その他	-	海東セラクションペレット	2.35	0.11	1.91	真書	北宋	1030	63, 63	
745	嘉祐元宝	日区	その他	H128区	緑土中	2.42	0.10	1.89	真書	北宋	1036	63, 63	
746	嘉祐元宝	日区	その他	-	海東セラクションペレット	2.21	0.10	2.92	真書	北宋	1039	63, 63	
747	元豊通宝	日区	その他	-	SD1851カ	2.42	0.15	3.63	篆書	北宋	1078	63, 63	
748	元豊通宝	日区	その他	H129, 30	遠路紅染区緑土	2.33	0.13	2.50	行書	北宋	1090	63, 63	
749	洪武通宝	日区	その他	H8D3, 14, 15	赤土砂利	2.12	0.13	3.11	真書	明	1408	63, 63	
750	永樂通宝	日区	その他	H1地区	海北道路染印アゼ	2.38	0.12	2.92	真書	明	1408	63, 63	
751	□□元寶	日区	その他	H8 - 1律	遺構面	-	0.10	0.43	真書	-	-	咸平元寶 or 治平元寶	63, 63
752	興統本可	日区	その他	H120	砂利及び緑染残灰	-	0.13	0.63	-	-	-	63, 63	
753	□□元寶	日区	その他	H1地区	赤染	2.42	0.12	2.22	-	-	-	紹聖元寶か	63, 63
754	開元通宝	その他	その他	-	赤染	2.47	0.11	3.05	隷書	唐	621	63, 63	
755	淳化元宝	その他	その他	-	-	2.43	0.09	1.50	真書	北宋	991	63, 63	
756	祥符元宝	その他	その他	-	赤染	2.44	0.12	2.60	真書	北宋	1008	63, 63	
757	祥符元宝	その他	その他	-	赤染	2.49	0.12	2.34	真書	北宋	1008	63, 63	
758	祥符通宝	その他	その他	-	赤染	2.31	0.10	2.36	真書	北宋	1008	63, 63	
759	文徳元宝	その他	その他	-	-	2.37	0.13	3.13	篆書	北宋	1023	63, 63	
760	阜安通宝	その他	その他	-	赤染	2.49	0.12	1.48	真書	北宋	1030	63, 63	
761	阜安通宝	その他	その他	-	赤染	2.50	0.11	2.74	真書	北宋	1030	63, 63	
762	阜安通宝	その他	その他	-	赤染	2.47	0.11	2.96	真書	北宋	1030	63, 63	
763	阜安通宝	その他	その他	-	赤染	2.54	0.12	2.18	真書	北宋	1030	63, 63	
764	阜安通宝	その他	その他	-	不明	2.31	0.10	2.68	真書	北宋	1030	63, 63	
765	阜安通宝	その他	その他	-	赤染	2.44	0.11	3.11	真書	北宋	1035	63, 63	
766	治平元宝	その他	その他	-	赤染	2.41	0.13	1.43	真書	北宋	1064	63, 63	
767	聖元元宝	その他	その他	-	-	2.42	0.12	1.57	真書	北宋	1068	63, 63	
768	元豊通宝	その他	その他	-	赤染	2.42	0.13	3.26	篆書	北宋	1078	63, 63	
769	元豊通宝	その他	その他	-	赤染	2.30	0.15	1.60	行書	北宋	1078	63, 63	
770	元豊通宝	その他	その他	-	赤染	2.38	0.14	3.20	篆書	北宋	1078	63, 63	
771	元豊通宝	その他	その他	-	赤染	2.33	0.09	2.68	真書	北宋	1078	63, 63	
772	紹聖元宝	その他	その他	-	赤染	2.48	0.11	2.89	行書	北宋	1094	63, 63	
773	紹聖元宝	その他	その他	-	赤染	2.26	0.14	3.08	篆書	北宋	1094	63, 63	
774	聖元元宝	その他	その他	-	-	2.42	0.14	2.88	篆書	北宋	1101	63, 63	
775	政和通宝	その他	その他	-	赤染	2.39	0.12	1.97	篆書	北宋	1111	63, 63	
776	宣和通宝	その他	その他	-	赤染	2.50	0.13	2.33	真書	北宋	1119	63, 63	
777	洪武通宝	その他	その他	-	赤染	2.19	0.11	2.40	真書	明	1408	63, 63	
778	永樂通宝	その他	その他	-	赤染	2.51	0.11	3.09	真書	明	1408	64, 63	
779	永樂通宝	その他	その他	-	赤染	2.45	0.15	3.35	真書	明	1408	64, 63	
780	寶徳通宝	その他	その他	-	赤染	2.54	0.12	2.91	真書	明	1433	64, 63	
781	□□元寶	その他	その他	-	-	2.48	0.14	3.14	-	-	-	紹聖元寶か	64, 63
782	興統本可	その他	その他	-	-	2.40	0.11	2.37	-	-	-	阜安通宝か	64, 63
783	□□元寶	その他	その他	-	-	2.48	0.13	1.28	真書	-	-	64, 63	

表7 写真報告資料観察表

No.	大別	種類	区画	面	地区	層/遺構	法量 (mm)			備考	図/PL			
							長	幅	厚					
784	中国	佛舍利輪師部品	H3	下層包含層	H2 + R22 + 23 + 24	遺構面	-	-	-	圓筒輪	-			
785	中国	圓筒輪師入	H1	下層包含層	RN24	下層遺構面	-	-	-	圓筒輪	-			
786	車輪	不明陶師品	H1	下層第1包含層	H1R36	砂利敷面	-	-	-	1.3	0.6	0.1	磁金	-
787	石製品	基石	区画	-	R236	SS1650	1.5	1.9	0.7	磁灰質	-			
788	石製品	基石	区画	-	R236	SD1851	2.5	2.6	0.6	磁灰質	-			
789	石製品	基石	区画	-	R236	SD1851	2.3	2.4	0.5	磁灰質	-			
790	石製品	基石	区画	-	R236	SS2096	1.9	2.2	0.6	磁灰質	-			
791	石製品	磁化磁片	42-3	下層第II包含層	R236	遺構面	-	-	-	SS1924 村沼出土、磁じ種残存	-			
792	その他	磁化磁片	42-3	下層第II包含層	R236	遺構面	-	-	-	SS1924 村沼出土、磁じ種	-			
793	その他	雲母片	42-9	上層	HP21	SK1910	-	-	-	層上2cm程度残存	-			
794	その他	燧土	42-9	上層	-	SK1910	-	-	-	スチール、二次燃焼	-			
795	その他	磁化土	-	-	-	-	-	-	-	SR1975及び下層第III遺構面右列より出土	-			
796	その他	磁片	その他	その他	-	S 鋼トレンチ	-	-	-	-	-			

V 自然科学分析

一乗谷朝倉氏遺跡第42次発掘調査石積施設 SF1881 の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

一乗谷朝倉氏遺跡（福井県福井市城戸ノ内町に所在）は、一乗谷を中心に越前国を支配した戦国大名朝倉氏の城館と城下町からなる遺跡で、九頭竜川支流の足羽川、その支流である一乗谷川沿いの谷あい位置する。当時の遺構の用途、周辺植生、食糧事情等に関する情報を得る目的で、石積施設の覆土について花粉分析、寄生虫卵分析、微細物分析を実施する。そのほか、遺構や包含層から出土した骨貝類の種類についても検討する。

1. 試料

42次石積施設 SF1881 は方形の石積施設で、遺構内の堆積土が遺物及び円礫を多く含む茶褐色土の最上層、焼土及び炭を含むしまりの無い中層、炭・焼土・砂混じりの茶褐色土の最下層に分けられている。試料は、底付近から採取された堆積土である。

これらの試料を分割し、花粉分析、寄生虫卵分析、微細物分析を実施する。なお、微細物分析は、900gを使用する。なお、これら分析で残った157.25g（以下、残土壌サンプルとする）も骨抽出を目的として水洗する。

2. 分析方法

(1) 花粉分析・寄生虫卵分析

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、花粉・胞子および寄生虫卵を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての花粉・胞子と寄生虫卵について同定・計数する。同定に際しては、当社保有の現生標本の他、花粉化石は島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を、寄生虫卵は佐伯ほか（1998）、斎藤・田中（2007）等を参考にする。

結果は、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として、寄生虫卵については1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。また、100個未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。また、花粉化石群集の分布図としても表示する。図中の花粉・胞子化石は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出した相対頻度で示す。また、基数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

(2) 微細物分析

試料900gを常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約20回）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた

試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、それぞれ粒径4～0.5mmの篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。水洗・乾燥後の試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実の他、主に径2mm以上の炭化材、骨片や3cm以上の土器片などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。また、一部の種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測し、結果を一覧表に併記する。種実以外は、骨片、土器片は個数と重量、最大径、炭化材は重量と最大径、炭化材主体、岩片・土粒主体、植物片は重量を一覧表に併記する。なお、分析後は、抽出物を容器に入れて保管する。

（3）骨同定

残土壌の洗い出しは、0.5mmの篩を使用し、篩上の残滓を対象とする。微細物分析および残土壌の水洗で得られた骨は、肉眼あるいは実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種・部位を同定する。また、必要に応じデジタルノギスを使用して計測する。

3. 結果

（1）花粉分析・寄生虫卵分析

結果を表8、図14に示す。なお、図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。全体的に花粉外膜が破損・溶解しているものが多く、花粉化石の保存状態はやや悪い～悪い。

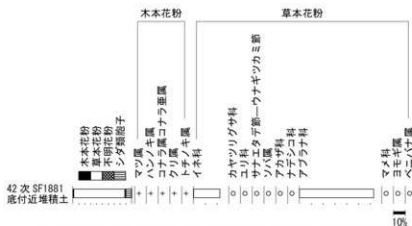
花粉化石群集についてみると、圧倒的に草本花粉が優勢し、アブラナ科が顕著に多産する。アブラナ科には複数の花粉が固まった状態（花粉塊）も確認された。次いでイネ科が多く、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ソバ属、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属、ペニバナ属なども産出したが、個体数は少ない。

木本花粉は、マツ属、ハンノ

表8 花粉分析・寄生虫卵分析結果

種 類	42次
	SF1881
底付近境積土	
木本花粉	
マツ属	1
ハンノキ属	1
コナラ属コナラ亜属	1
クリ属	1
トドノキ属	1
草本花粉	
イネ科	82
カヤツリグサ科	1
ユリ科	1
サナエタデ節—ウナギツカミ節	2
ソバ属	1
アカザ科	1
ナデシコ科	1
アブラナ科	230
マメ科	1
ヨモギ属	1
ペニバナ属	1
不明花粉	
不明花粉	5
シダ類胞子	
シダ類胞子	37
合 計	
木本花粉	5
草本花粉	322
不明花粉	5
シダ類胞子	37
合計（不明を除く）	364
寄生虫卵（個/cc）	
回虫卵	200
鞭虫卵	<100

- 1) 寄生虫卵については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。
- 2) 寄生虫卵の合計は、丸める前の数字を合計した後に、100単位に丸めている。
- 3) <100：100個体未満。



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。丸印は15未満、+は基数100未満の試料において検出された種類を示す。

挿図14 花粉化石群集

キ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、トチノキ属が確認されたが、それぞれ1個体ずつの検出であった。一方、寄生虫卵は、回虫卵と鞭虫卵が確認された。堆積物1ccあたりの含量は、回虫卵が約200個、鞭虫卵が100個未満である。

(2) 微細物分析

結果を表9に示す。試料900gを洗い出した結果、種実遺体27個、不明炭化物20個、植物片0.02g、炭化材2.7g(最大1.3cm)、炭化材主体(骨片、灰混じり)7.4g、骨片2.6g(詳細は別途記載)、岩片・土粒主体225.8g、土器片14個28.4g(最大4.5cm)が検出された。

種実遺体は、栽培植物のイネ粃(基部)6個、粃5個、穎果(玄米)2個(残存長2.48mm)、メロン

表9 微細物分析・種実同定結果

分類群	部位・状態・粒径	42次 SF1881		備考
		底付近堆積土		
木本種実				
オニグルミ	核	破片	炭化	1(個)、残存径4.57mm
コナラ亜属(ナラガシワ?)	殻斗	破片	炭化	3(個)、残存径4.41mm、厚さ1.00mm
クリ	果実	破片	炭化	1(個)、残存長7.98mm
サンショウ	種子	完形	炭化	1(個)
		破片	炭化	3(個)
草本種実				
イネ	粃(基部)	破片	炭化	6(個)
	粃	破片	炭化	1(個)
	粃	破片	灰化	4(個)
	穎果(玄米)	破片	炭化	2(個)、残存長2.48mm
メロン類	種子(基部)	破片	炭化	1(個)
トウガン	種子	破片	炭化	2(個)、残存幅4.72mm
不明種実		完形	炭化	1(個)、長さ3.45、幅2.87、厚さ2.63mm、偏球体
		完形	炭化	1(個)、長さ2.03、幅1.31mm、卵体
種実合計(不明を除く)				25(個)
不明炭化物		破片	炭化	20(個)
植物片				0.02 乾重(g)
炭化材				12.64 最大径(mm)
	>4mm			0.80 乾重(g)
	4-2mm			1.86 乾重(g)
炭化材主体	2-1mm			3.30 乾重(g)、骨片、灰混じり
	1-0.5mm			4.06 乾重(g)、骨片、灰混じり
岩片・土粒主体	>8mm			98.49 乾重(g)
	8-4mm			62.82 乾重(g)
	4-2mm			38.36 乾重(g)
	2-1mm			15.69 乾重(g)
	1-0.5mm			10.44 乾重(g)
骨片				2.56 乾重(g) 詳細別途記載
土器片				28.36 乾重(g)
				44.86 最大径(mm)
				14(個)
分析量				900 乾重(g)

類種子(基部)1個、トウガン種子2個(残存幅4.72mm)の他、木本のオニグルミ核1個(残存径4.57mm)、コナラ亜属(ナラガシワ?)殻斗3個(残存径4.41mm、厚さ1.00mm)、クリ果実1個(残存長7.98mm)、

サンショウ種子4個の、合計25個が同定された。種実遺体の保存状態は不良であり、トウガンを除いて炭化している。

(3) 骨同定

微細物分析サンプル、残土壌サンプルとも焼けた骨が検出され、コイ科(フナ属?)、タラ科?、コチ科、マダイが確認される(表10)。同定結果を表11に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

微細物分析サンプルからは、フナ属の可能性がある腹椎、タラ科の可能性がある右前上顎骨、マダイの左主上顎骨、マダイの可能性がある左前上顎骨、魚類の歯・腹椎・椎骨・鱗棘等計20点と骨破片多数、合計2.558gが検出される。

残土壌サンプルからは、タラ科の可能性がある尾椎、コチ科の尾椎、魚類の椎骨・鱗棘等計11点と骨破片多数、合計など計0.414gが検出される。その他、土器片、礫、砂礫等、微細骨片含む残渣がみられる。

表10 骨同定検出分類群一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthyes
コイ目	Order Cypriniformes
コイ科	Family Cyprinidae
コイ亜科	Subfamily Cyprininae
フナ属?	Genus <i>Carassius</i> ?
タラ目	Order Gadiformes
タラ科?	Family Gadidae?
	タラ科? Gen. et. sp. indet.
カサゴ目	Order Scorpaeniformes
カサゴ亜目	Suborder Scorpaenoidei
コチ科	Family Platycephalidae
コチ科	Gen. et. sp. indet.
スズキ目	Order Perciformes
スズキ亜目	Suborder Percoidei
タイ科	Family Sparidae
マダイ亜科	Subfamily Pagrinae
マダイ	<i>Pagrus major</i>

表11 骨同定結果

地点層位等	試料	分析重量(g)	種別	部位	左右	状態等	数量	重量(g)	被熱	備考		
42次SF1881 底付近堆積土	微細物サンプル	900.00	コイ科(フナ属?)	腹椎		破片	1	0.006	○	椎体長2.81mm		
			タラ科?	前上顎骨	右	破片	1	0.032	○			
			マダイ	主上顎骨	左	破片	1	0.234	○	H2:9.17mm,w:9.58mm		
			マダイ?	前上顎骨	左	破片	1	0.156	○			
			魚類			破片	1	0.004	○			
				腹椎		破片	1	0.113	○			
				椎骨		破片	1	0.094	○	中大型、椎体長8.48mm		
							6	0.037	○			
						鱗棘等		破片	7	0.025	○	
						骨	不明	破片	多数	1.857	○	
	残土壌サンプル	157.25	タラ科?	尾椎		破片	1	0.025	○			
			コチ科	尾椎		略完	1	0.123	○	椎体長11.71mm		
			魚類	椎骨		破片	2	0.007	○			
				鱗棘等		破片	7	0.020	○			
			骨	不明		破片	多数	0.239	○			
			土器			破片	1	0.506				
			礫				15	39.074				
			砂礫等					15.334				
			残渣					12.711		微細骨片含む		

4. 考察

(1) 遺構の用途と周辺植生

花粉分析の結果をみると、保存状態が全体的に悪い。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。珪藻分析を実施していないため詳細な堆積環境

は不明であるが、花粉外膜が破損・溶解している状況や、試料採取箇所が溜樹内であることなどを考慮すると、得られた花粉化石群集は経年変化による分解・消失の影響を受けており、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。

本試料は、この分解の影響を考慮しても、アブラナ科の多産が顕著である。トイレ遺構の検証については、一般的に寄生虫卵の産状が一つの判断基準とされるが、花ごと食べる種類の多産も判断基準となりうる。アブラナ科には、花ごと食べる習慣のある「菜の花」が含まれる。また、わずかに認められたベニバナ属もトイレ遺構からの検出例が多い。一方、寄生虫卵の産状をみると、回虫卵が200個/cc、鞭虫卵が100個未満/ccであった。トイレ遺構の検証例としては決して多い含量ではないが、寄生虫卵の分解に対する抵抗性が花粉化石と同程度とされていることから（黒崎ほか、1993）、寄生虫卵も分解の影響を受けている可能性がある。寄生虫の生態についてみると（吉田、1991；金原、1996；佐伯ほか、1998など）、回虫と鞭虫の生活環は人間の体内で完結し、糞便とともに排出された虫卵が、葉菜類などの食物とともに体内に入って消化器管内で成虫になる。このため、尿尿を肥料として利用していた戦前以前は、日本では非常に多い寄生虫感染症であった。これらの結果を総合的に解釈すると、本試料には糞便などの混入があった可能性が高く、トイレ遺構の可能性が指摘される。なお、以前に分析した一乗谷朝倉氏遺跡第150次調査で検出された溝の結果では、寄生虫卵が500個/cc～100個未満/cc検出され、分析したすべての試料から回虫卵、鞭虫卵が検出された、それに加えて肝吸虫卵、異形吸虫類卵、日本海裂頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵なども確認され、溝内に人糞などが混入したことや、中間宿主が何らかの形で堆積物中に取り込まれたことなどが想定されている。

その他の草本類では、イネ科が多く、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属など、開けた明るい場所に生育する種群が検出されている。これらは調査地点周辺の草地植生を反映していると推測される。また、栽培の可能性のあるソバ属も確認されたことから、これらの利用の可能性もうかがえる。また、木本類では、わずかに針葉樹のマツ属、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、トチノキ属などが確認された。これらは現在の周辺地域でも普通に見られる種類であり、これまでの分析でも確認されていることから、当時の周辺森林植生に由来すると考えられる。

(2) 植物利用

試料900gを洗い出した結果、種実遺体、炭化材、骨片、土器片などの遺物が検出された。栽培植物は、穀類のイネ、果菜類のメロン類、トウガンが確認された。当時利用された植物質食糧と示唆される。また、イネ穂、穎果（玄米）、メロン類は炭化（一部灰化）していることから、火を受けたとみなされる。イネ、メロン類、トウガンは第150次調査、イネは第136次調査、第138次調査等でも確認されている。

栽培植物を除いた分類群は、全て木本から成り、落葉広葉樹のオニグルミ、コナラ亜属（ナラガシワ？）、クリ、サンショウが確認された。高木になる河畔林要素のオニグルミや、林縁などの明るく開けた場所を好んで生育する二次林要素のコナラ亜属（ナラガシワ？）、クリ、低木のサンショウは、現在の本地域にも分布しており、当時の遺跡周辺域の落葉樹林に生育していたと考えられる。堅果類のオニグルミ、クリは、果実内の子葉が食用可能であり、コナラ亜属（ナラガシワ？）は、あく抜きを施すことで果実内部の子葉が食用可能となる。サンショウは果実が食用や薬用、香辛料等に利用可能である。オニグルミ、クリの出土炭化核片や果実片は、周辺の落葉樹林から持ち込まれ、食用のために中の子葉を取り出した後の食糧残滓と示唆され、火を受けたとみなされる。

(3) 動物利用

今回検出された骨は、フナ属の可能性のあるコイ科、タラ科？、コチ科、マダイが確認され、いずれも食用資源となっていたと思われる、いずれも焼かれた後に廃棄されたものと考えられる。

タラ科？、コチ科、マダイはいずれも海水魚であり、これまでの調査でも検出されている。タラ科は、冬季に浅場で産卵し、夏季になると深場で棲息する。コチ科は、沿岸からやや沖合の砂底、砂泥底に生息し、幼魚や若魚期には河口域に入り込む。マダイは、水深約 30～200m の岩礁域・砂礫底・砂底に生育し、春～夏季に浅い沿岸域に移動して産卵し、稚魚や幼魚は浅場で生育する。破片のため断言できないが、大きさからみて成魚であったと考えられる。いずれも過去の調査で検出されている種類であり、一乗谷朝倉氏ではごく普通に食されていたと考えられる。被熱を受けているため骨自体が収縮しているとみられるが、コチ科が体長約 40cm 程度、マダイが体長約 30cm 程度の可能性がある。また、椎体長 8.48mm の椎骨は、種類不明であるが、中大型個体に由来する可能性がある。

一方、フナ属の可能性のあるコイ科は、淡水魚である。椎体長 2.81mm と小さく、体長 20cm 以下の小さな個体であると考えられる。本遺跡第 150 次調査の東区や東区南半のⅢ面からは、ブリ属の可能性のある右方骨、ヒトの可能性のある破片、イルカ・クジラ類、イヌ、ニホンジカが確認されている。本遺跡では、コイ科をはじめとする淡水魚の検出はほとんどなく、微細な骨を対象としたことによって得られた貴重な資料である。一乗谷川・足羽川の河川あるいは谷内を流れる小河川、あるいは溝や堀内に棲息しており、そのような内水面漁猟も当時行われていたことを示唆する。今後とも、土壌の洗い出しを行って微細な骨類に注目することで、より詳細な食生活の復元につながっていくものと期待できる。

引用文献

- 藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑, アクアコーラル企画, 155p.
- 金原正明, 1996, 稲作とともに拡大した病氣, 季刊 考古学, 雄山閣出版, 56, 64-69.
- 黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子, 1993, 糞堆積物の分析—特に寄生虫卵分析について—, 日本文化財学会第 10 回大会研究発表要旨集, 日本文化財学会, 115-115.
- 三宅 尚・中嶋信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態, 植生史研究, 6, 15-30.
- 三好敦夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑, 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標識 I II (図版), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 12, 13 集, 91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版), 東北大学出版会, 678p.
- 佐伯秀治・丹 秀夫・早川典之, 1998, 臨床検査シリーズ 寄生虫鑑別アトラス—オールカラー版—, 株式会社メディカルサイエンス社, 162P.
- 斉藤崇人・田中義文, 2007, 寄生虫卵殻の形態分類, 徳永重元博士献呈論集, パリノ・サーヴェイ株式会社, 407-416.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第 5 集, 60p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる 734 種 増補改訂—, ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子・化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 吉田幸雄, 1991, 図説 人体寄生虫学, 南山堂, 284p.

VI まとめ

第42次調査区のうち、A・D区は擾乱によって遺構が残存していなかったが、F区の一部及びH・J区では道路及び道路に面する屋敷区画を検出した。特にH区では、南東部が擾乱によって失われているものの、南北幹線道路SS495及び東西道路SS1850、SX1928を検出するとともに、石組溝等で区画された一連の屋敷区画を検出することができた。この屋敷区画は規模や構造から町屋と考えられる。

本項では、F・H・J区で検出した遺構・遺物から、道路遺構及び区画の変遷とその年代、また各町屋の性格について検討を行う。

遺構及び区画の変遷について

この調査区で最も古い遺構は、井戸SE1875である。この遺構は東西道路SS1850の下層で検出したものであり、この地区の主要な道路であるSS495及びSS1850が敷設される以前の遺構である⁷⁾。

一方、主要道路の敷設以降の遺構面として、古い方から下層第Ⅲ、下層第Ⅱ、下層第Ⅰ、上層遺構面の4面を確認した。F区で検出した遺構面は、検出面の高さなどからH区上層遺構面に対応するものと考えられる。以下、この4面の遺構面を基準に本調査区の区画の変遷について言及する。

下層第Ⅲ遺構面は、主要道路敷設当初の遺構面と考えられる。残存する遺構は多くないものの、区画施設SD2000、SX2004、SX2007は共通してSS495の延長方向に対して直交または平行している。このことから、区画成立当初は全体的にSS495を基準とした町割が施行されていたものと考えられる。下層第Ⅲ遺構面の成立時期は、SS1850の敷設に伴いSE1875が埋没したタイミングと考えられ、SE1875から出土した越前焼中壺から16世紀初頭以降と考えられる。これは一乗谷全体の時期区分ではⅢa期(小野1997)に該当するものと考えられる。

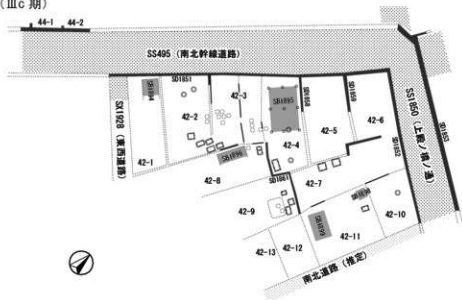
下層第Ⅰ・Ⅱ遺構面では、全体的に区画内の嵩上げが実施されている。この時期から、SS495に直接接しないH2・3・4区の区画軸は、SS1850を基準とするものに変わっている。これ以降、区画の軸は固定され、大幅な変更は見られない。H区Hラインのセクション断面では、下層第Ⅲ遺構面と第Ⅱ遺構面の間に約0.3mの隙層を確認した。これは一乗谷川の氾濫による河川礫の堆積と考えられ、区画改変の原因として一乗谷川の洪水の可能性がある。

上層遺構面は、下層第Ⅰ・Ⅱ遺構面上に盛土を行うことで形成されている。ただし、区画42-1～4では下層第Ⅰ遺構面が検出されなかったことから、一部区画では切土を伴う整地が行われている可能性がある。また、区画42-2～4では、区画境界の変更が行われた可能性がある。ただし、全体的な区画割は下層第Ⅰ・Ⅱ遺構面の時期から変更されない。町屋全体の嵩上げが実施された契機は明確でないものの、整地土に含まれる炭や焼土の存在から火災等が候補に挙げられる。上層遺構面は、本調査区における最も新しい遺構面であり、天正元年(1573)の城下町滅亡直前の遺構面と考えられる。つまり、一乗谷全体の時期区分ではⅢc期に該当する遺構面であり、これより古い下層第Ⅰ・Ⅱ遺構面がⅢb期に相当するものと考えられる。

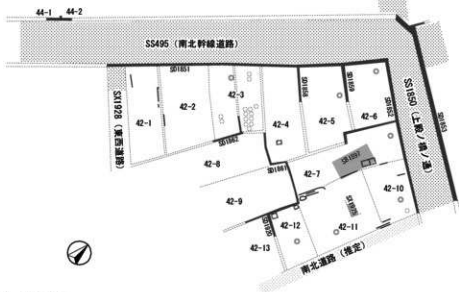
道路及び区画割の構造について

前述のとおり、今回検出した屋敷区画は主要道路SS495およびSS1850の敷設を契機に整備されたものである。道路敷設当初とみられる下層第Ⅲ遺構面では、南北幹線道路であるSS495の軸を基準に町割が施工されていることから、城下町整備当初における南北幹線道路の位置づけの重要性が伺える。路面の改修は最低でも5回は行われており、敷設当初の路面から、最大で0.7m程度の嵩上げが行われてい

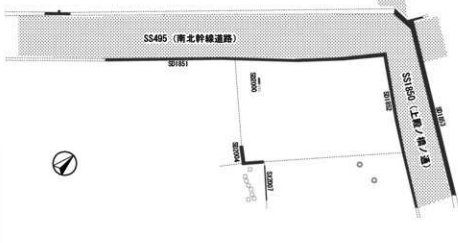
上層遺構面 (Ⅲc 期)



下層第Ⅰ・Ⅱ遺構面 (Ⅲb 期)



下層第Ⅲ遺構面 (Ⅲa 期)



挿図 15 遺構概念図

る。道路の構築・改修方法は一定して、粒度の細かい山土や粘土の上に砂利を敷き、突き固める工法を採用している。一方、第10・11次で調査した武家屋敷地の道路SS260では礫層の上に直接砂利を入れ、路面を形成する工法が採用されている。今回の調査では、SS495の一部で路面改修に伴い礫層を形成している状況を確認したが、部分的であり同様の工法とは認められない。SS260は路面改修も1回に収まっており、道路の構築方法や維持・管理の方法にはバリエーションが存在するものと考えられる。

東西道路SS1850は、南北幹線道路SS495に匹敵する規模を有する。この道路は、『朝倉始末記』に見える「上殿ノ橋ノ通」に比定している。道路の東側は河川氾濫による攪乱で途切れていたが、残存していた道路を直線的に延長すると、一乗谷川を挟んだ対岸にある字上殿へと延びていく。字上殿及び隣接する字馬出地区は一乗谷城への登り口と想定される要地であり、第120次調査では、山裾を階段状に整地した平坦面から石敷建物等が検出されている。道路面の断割によりSS1850の敷設時期がSS495と同時であることは明らかであり、道路敷設当初から、南北幹線道路から分岐し、対岸の要地へと続く重要な道路と位置づけられていた可能性は高い。

この他、東西道路SX1928やH4区東の南北道路が主要道路から分岐している。今回検出した屋敷区画の北辺と西辺は主要道路面しているものの、その裏手側に位置する区画は主要道路から出入りすることはできない。また、今回の調査では、区画内通路が検出されていないため、裏手側の区画への出入りするためにはSX1928やH4区東の南北道路を使うほかない。これらの道路の敷設がSS495・SS1850の敷設時に遡るかどうかの判断はつかないものの、いずれも、主要道路に面しない区画に出入りすることを目的に敷設されていることを考慮すれば、遅くとも最終的な町割りが定まった下層第Ⅱ遺構面段階には成立していたものと推定する。

屋敷区画については、間口が基準尺4間(約7.5m)以上の区画が半数を占める。これは、赤羽・奥間野・吉野本地区の他の区画と比較して、やや広い傾向にある。区画42-3のSV1999など、一部で区画の分割も確認できるが、極端な敷地の細分化は行われず、全体的に広い間口を維持している。基本的に屋敷区画は間口に対して奥行が長い長方形となっているが、H4区では全体的に奥行が短い傾向にある。これは、H4区が一乗谷川に隣接しているという地形的要因によるものと考えられる。

町屋群の性格

具体的な町屋の使用法を示す遺構としては、大甕埋設遺構が代表的である。本調査区においては、3個以上の大甕を埋設する遺構を4か所で検出した。特にSX1923は遺構面をまたいで同じ場所で大甕の埋設遺構が更新されていることから、この区画では、大甕を使用する特定の業種の住人が長期間にわたってこの区画を使用していたことがわかる。また、3個以上の大甕を有する埋設遺構は町屋群の南西側に集中している状況が確認できた。SS495を挟んだ西側の屋敷区画でも同様の大甕埋設遺構が検出されており、道路を挟んで、この一帯に大甕を生業に用いる住人がまとまっていたものと考えられる。具体的な業種としては、紺屋や大甕を用いた液体調味料や酒の醸造などが候補となるが、特定にいたる遺構・遺物は検出できなかった。区画42-6では石臼の一括投棄が確認され、その周辺からも石臼の出土が目立った。石臼はほとんどが粉挽臼である。特定の区画に石臼が集中する状況は、他の区画では確認できず、日常生活に用いたものとは考え難い。石臼はいずれも使用痕が確認されたことから、石臼を用いた製粉等の業種が想定される。また、銀粒子の付着した埴塼、製、鉛地金・鉛片の出土から、金属加工を職業とする住人の居住も示唆される。これまでの調査で銀粒子が付着した遺物は、他に見つかっておらず、城下町で銀を素材とした金属製品の加工を行ったことが確認できる唯一の資料である。鉛の地

金についても、融解した鉛片は朝倉館や武家屋敷の周辺で複数出土事例があるが、地金の状態で出土しているのは第17次調査区と本調査区のみである。また地金の形状に関しても、これまで確認されていた棒状の地金とは異なる楕円形の地金が出土したことで、形態の異なる2種類の鉛地金が流通していたことが明らかになった。その一方で、第17次調査地で一括出土した弾丸を除き、周辺で銀や鉛の製品は出土しておらず、具体的な生産物は明らかでない。このほか、区画42-4において検出した掘立柱建物SB1895は、礎石建物が主流となる一乗谷内では希少な事例である。一般的な居住用建物ではなく、何らかの作業施設のような性格も想定できるが、今回の調査では、周辺遺構や出土遺物から建物の用途を特定することはできなかった。

区画の使用方法及び住人の業種に限らず、各屋敷区画に共通する施設として井戸と石積施設がある。井戸は町屋の出入り口付近に設置される場合と敷地奥に設置される場合があり、区画内の建物配置や利用方法の差異を示すものと考えられる。石積施設は基本的に敷地奥に設置されており、単独で構築されるものと区画溝や区画境の段差に接して構築されるものがある。想定される用途は、便所や水溜りなど多岐にわたり、各石積施設の用途を特定することは困難であるが、SF1881に関しては最下層堆積土中からアブラナ科の花粉塊や微細な種実・魚骨片、寄生虫卵が検出されたことにより、便所としての可能性が高い。今回の調査区では、共同の井戸・石積施設と考えられる遺構が無いことから、本調査区に限っては、各区画が独立した町屋として成立していたものと考えられる。

出土遺物

今回、出土した遺物の大半はH・J区の石組溝や屋敷区画から出土したものである。出土遺物の時期としては、わずかに龍泉窯系青磁碗E群や15世紀半ばに遡る白磁皿が混ざるものの、全体的には15世紀後半から天正年間頃の所産であり、屋敷区画の成立年代と齟齬はみられない⁸⁾。遺構埋土の上層付近、または遺構外から出土した遺物については、整地に伴う遺物の移動を考慮すべきであるが、基本的には、町屋の住人が所持・使用していたものと考えられる。とくに、越前焼大甕や石臼、砥石、鑿、鑿、埴壇、鉛地金等は町屋での生産活動の一端を示し、具体的な職人の姿を示唆する遺物群と評価できるだろう。またSX2005から一括出土した中国製陶磁器類は、町屋の住人が所有していた食器のセットであり、何らかの理由で土中に埋納されたものと考えられる。埋納の理由は定かでないものの、町屋住人の具体的な所持品の内容を示すという点で貴重な一括資料と評価できる。遺構の形成時期も考慮するならば、天正元年(1573)から天正3年(1575)にかけての時期も視野に入れる必要があり、城下町の終末期における、町屋住人の具体的な行動を示している可能性もある。

また、特筆すべき遺物の出土状況を示す遺構としては、SX1924とSK1910が挙げられる。SX1924は大甕埋設遺構であるが、遺構埋土やその周辺からは、大甕以外の遺物も多数見つかっている。「蕎麦茶碗」と呼称される朝鮮製雑碗や鹿角製品、炭化紙片、炭化布片など、一乗谷全体でも出土事例の少ない遺物がまとまっている。これらの遺物は、出土遺物の中に六器が含まれることから、寺院関係の遺物と考えられ、整地の際に混ざり込んだものと考えられる。SK1910も同じく大甕埋設遺構であるが、遺構埋土からは多彩な遺物が出土している。その中には出土数が限られる越前焼双耳壺や四耳壺が含まれる。同じ越前焼では、類例の無い把手付の鉢もこの遺構からの出土である。これらは、高級品とは評価し難いものの、他の区画の出土遺物と比較して特異な製品が目立つことは事実である。また金属製品は調度品等に付属していたとみられる飾金具類が多数含まれていた。特に、環付金具は装飾付の座金具や切り頭に加工した鑑台が付属しており、一般的な町屋の建具や調度品とは考え難い。遺構埋土内からは、焼

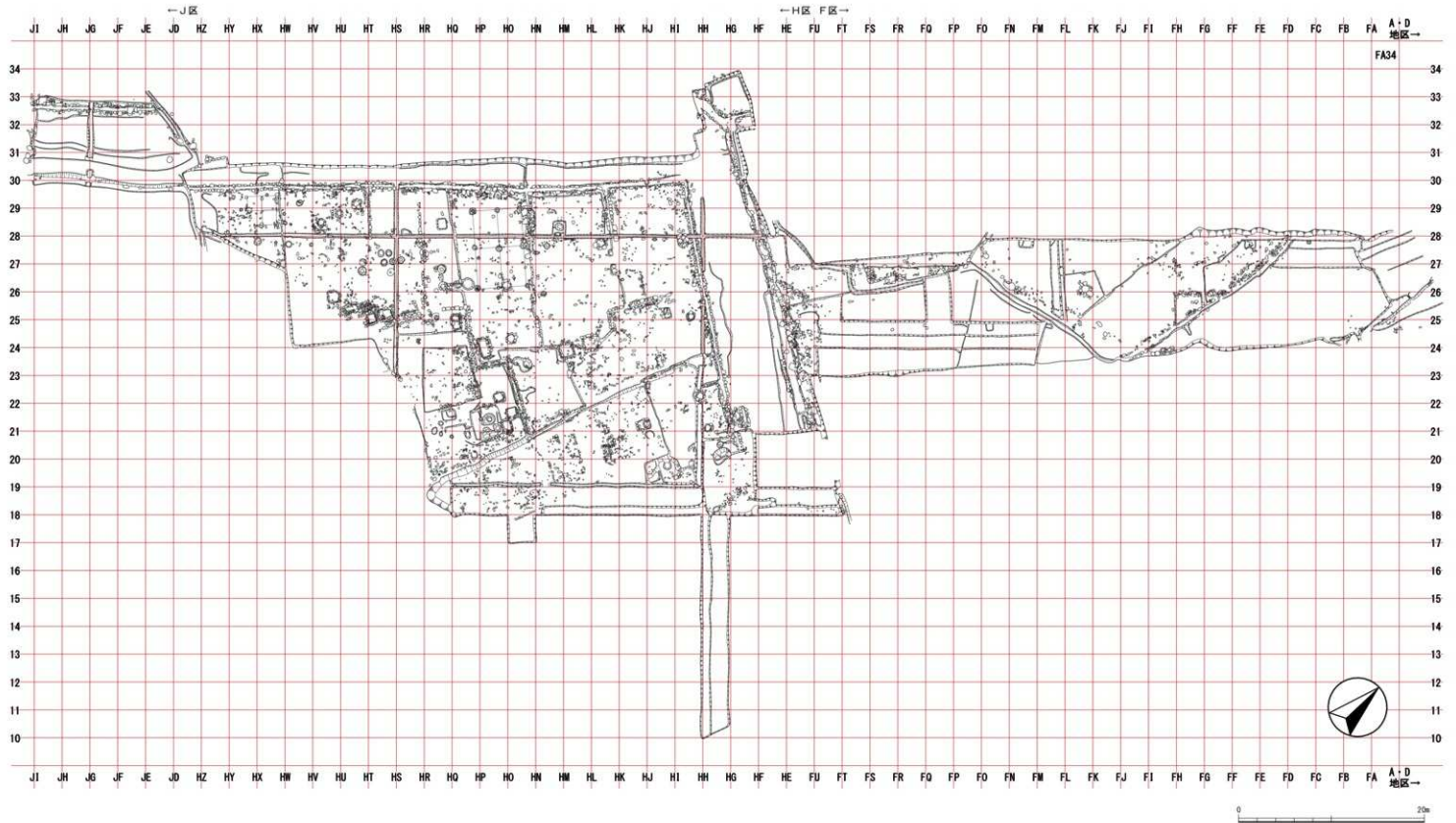
けた壁土も出土している。この遺構は、大堯の埋設にあたって意図的に焼土を持ち込んでいる可能性があり、出土した遺物は焼土に混ざって屋敷区画の外から運ばれてきた可能性がある。

そのほか、遺構外から出土したタイ製の壺や獣面装飾付硯、華南彩釉陶器皿、中国製黒褐釉茶入など希少品については、町屋住民の経済力の高さや城下町における流通の発展度合を示す可能性もあるが、SX1924の出土状況を鑑みると、調査区外に存在した寺院などの遺物が、整地の伴い流入してきている可能性を想定すべきであろう⁹⁾。

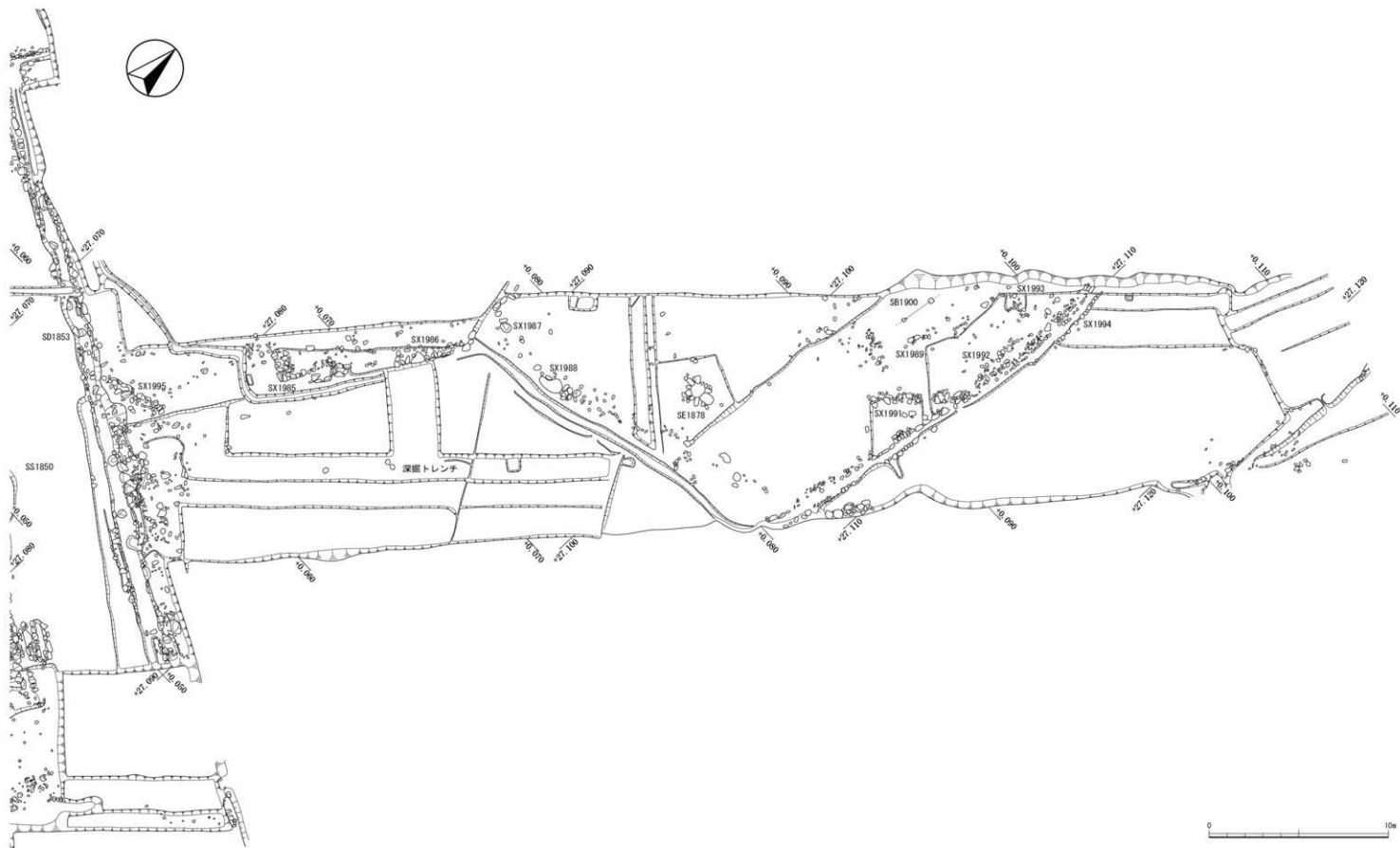
- 注 1) 概報では、前半に航空測量を実施した遺構検出面を「上層部」、後半に測量を実施した遺構面を「下層」と記述していた。ただし、この用語は遺構面の新旧を表す「上層・下層(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)」の用語と紛らわしく、わかりづらい。そこで、本報告においては、前半に測量を行った「上層部」を上位検出面、後半に測量を行った「下層」を下位検出面と記述し、遺構面の記述との区別を図ることとする。
- 2) SD1853内で検出された石灯籠台座は、取上げが困難であったことから、一旦埋め戻され、平成15年に実施した第116次調査の際に取り上げを行った。遺物の詳細については『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告～中山間地域総合整備事業施設間連絡道路整備事業に伴う発掘調査～』において報告しているため、今回は報告を割愛する。
- 3) 遺構出土遺物は個別の遺構の機能または各町屋の使用実態を反映している可能性があるが、その一方で、近接する遺構間で遺物の破片が接合する状況が確認されたほか、SF1881場合、遺構の埋戻し土から多量の遺物が出土している。これらの状況を考慮すると、遺構内出土遺物の様相が直ちに個別の遺構の性格や使用状況を示すわけではなく、区画内の遺構面の更新に伴う一括した遺物群としての性格が強いと判断した。
- 4) 当遺跡で出土した同型の鉢の生産地について、既往の報告では朝鮮製と報告してきた。しかし、このタイプの鉢の生産地を中国南部地域に求める見解もあり(吉田2003)、現時点においては、明確な生産地は不明と言わざるを得ない。そこで、本報告では、産地不明の輸入陶器として扱うこととする。
- 5) 越前橋中堯の年代については『福井県教育庁埋蔵文化調査センター所報6 越前橋総合調査事業報告』(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2016)を参考に決定した。
- 6) 同形とみられる鉛地金は駿府城跡(静岡市教育委員会1998)や佐渡金山奉行所跡で出土している。駿府城跡出土の完形品の重量は約9～12kgであり、おおよそ3貫目に相当する。駿府城では分割した鉛地金も出土している。分割面は刃で一気に切断したようであり、今回の出土品とも共通している。
- 7) この遺構は、第44次調査で最下層遺構として検出された幅員2mの南北道路及び隣接する井戸SE2550に対応する遺構と考えられる。
- 8) 出土品の中には、ごく少量ではあるが、古代の須置器など、城下町成立以前の遺物も含まれる。
- 9) 「一乗谷古絵図(安波賀春日神社蔵)」では、今回の調査区の西側に天正寺の記載があり、南北幹線道路SS495の西側屋敷区画の背後に寺院が存在した可能性が高い。ただし、寺院を発掘した際に出土する石造物類がほとんど出土しないことから、遺物の流入元を寺院のみに限ることはできない。

参考文献(本書全体) 幸一乗谷朝倉氏遺跡の概報・報告書・展示図録については主なもののみ記載

- 小野正敏 1982 『15、16世紀の染付・藍の分類とその年代』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏・水塚真編 1990 『よみがえる中世6 実像の戦国城下町 越前一乗谷』平凡社
小野正敏 1997 『戦国城下町の考古学 一乗谷からのメッセージ』講談社選書メチエ
国立歴史民俗博物館 1993 『国立歴史民俗博物館資料調査報告4 日本出土の貿易陶磁』国立歴史民俗博物館
静岡市教育委員会 1998 『静岡市埋蔵文化財調査報告44 駿府城跡1(遺物編1)』静岡市教育委員会
瀬戸市史編纂委員会編 1993 『瀬戸市史 陶磁史編四』愛知県瀬戸市
福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所 1981 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅷ-昭和55年度発掘調査整備事業概報-』
福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1982 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅢ-昭和56年度発掘調査整備事業概報-』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 『福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報6 越前橋総合調査事業報告』福井県教育委員会
福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 奥道鶴江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県教育委員会
福井県立朝倉氏遺跡資料館 1988 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ 第10・11、第54次調査』福井県教育委員会
福井県立朝倉氏遺跡資料館 2000 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅷ 第44次17次調査』福井県教育委員会
福井県立朝倉氏遺跡資料館 2006 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告～中山間地域総合整備事業施設間連絡道路整備事業に伴う発掘調査～』福井県教育委員会
福井県立朝倉氏遺跡資料館 2006 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 37 平成18年度発掘調査・環境整備事業概報』福井県教育委員会
吉田 寛 2003 『中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について』『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会
渡邊 晶 2017 『一乗谷朝倉氏遺跡出土壺・鉢・碗の調査報告』『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2017』



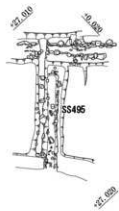
第1図 グリッド配置図（縮尺1/400）



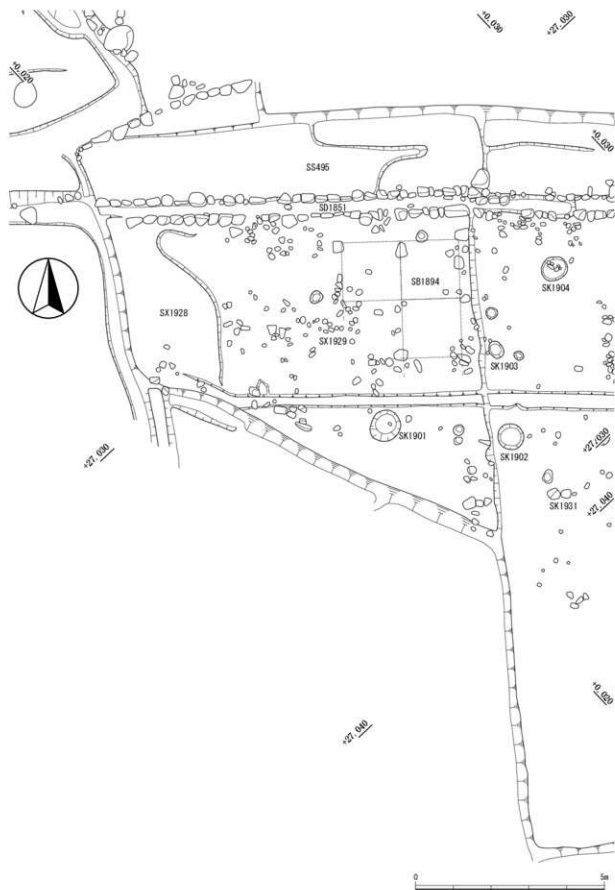
第2図 F区遺構全体図 (縮尺1/200)



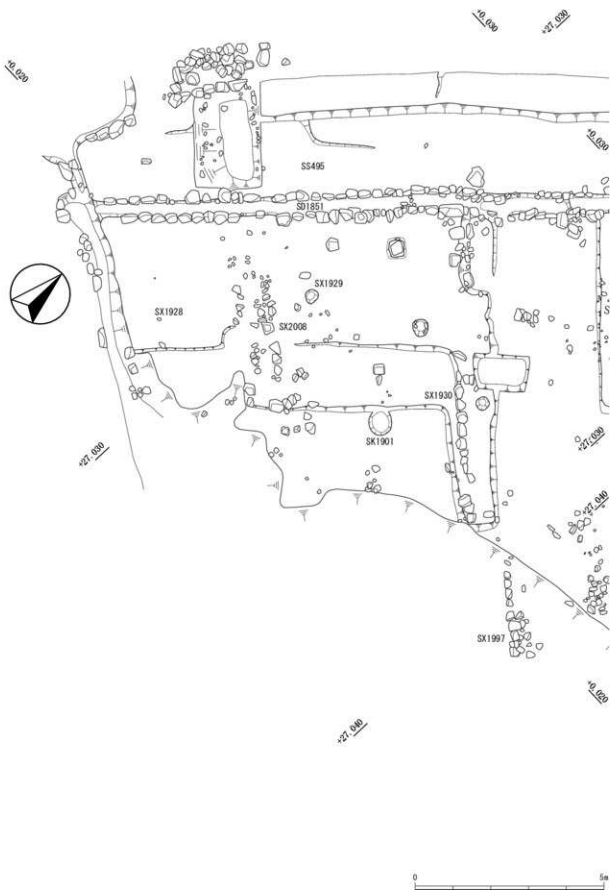
第3图 H·J区上位検出面全体图 (縮尺1/200)



第4图 H·J区下位検出面全体图 (缩尺1/200)



第5图 区画42-1上位検出面(縮尺1/100)



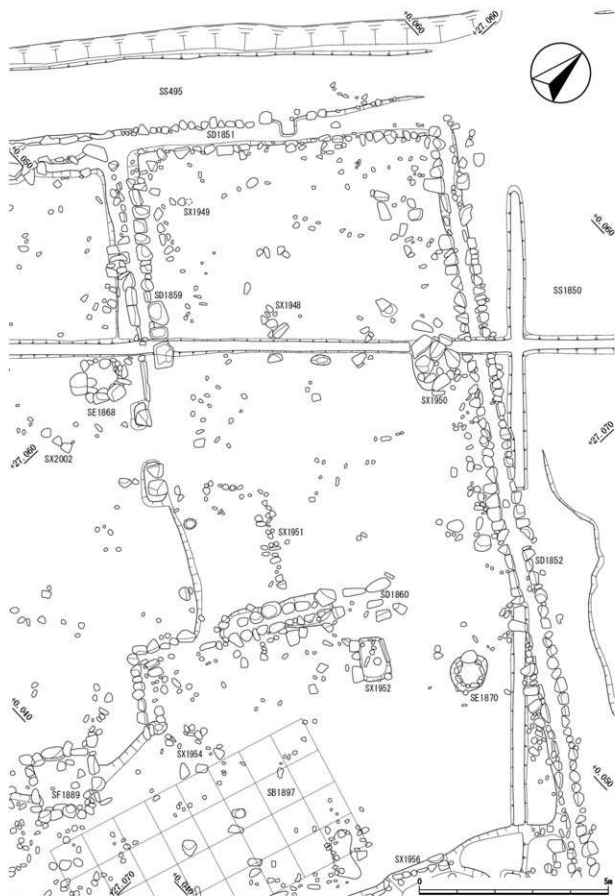
第6图 区画42-1下位検出面(縮尺1/100)



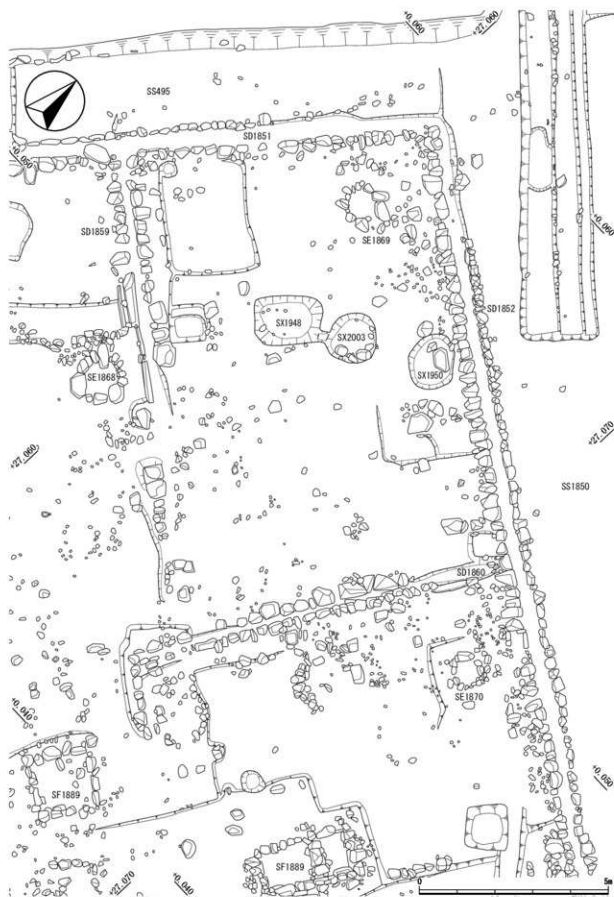
第7图 区画42-2·3·4·5上位検出面(縮尺1/100)



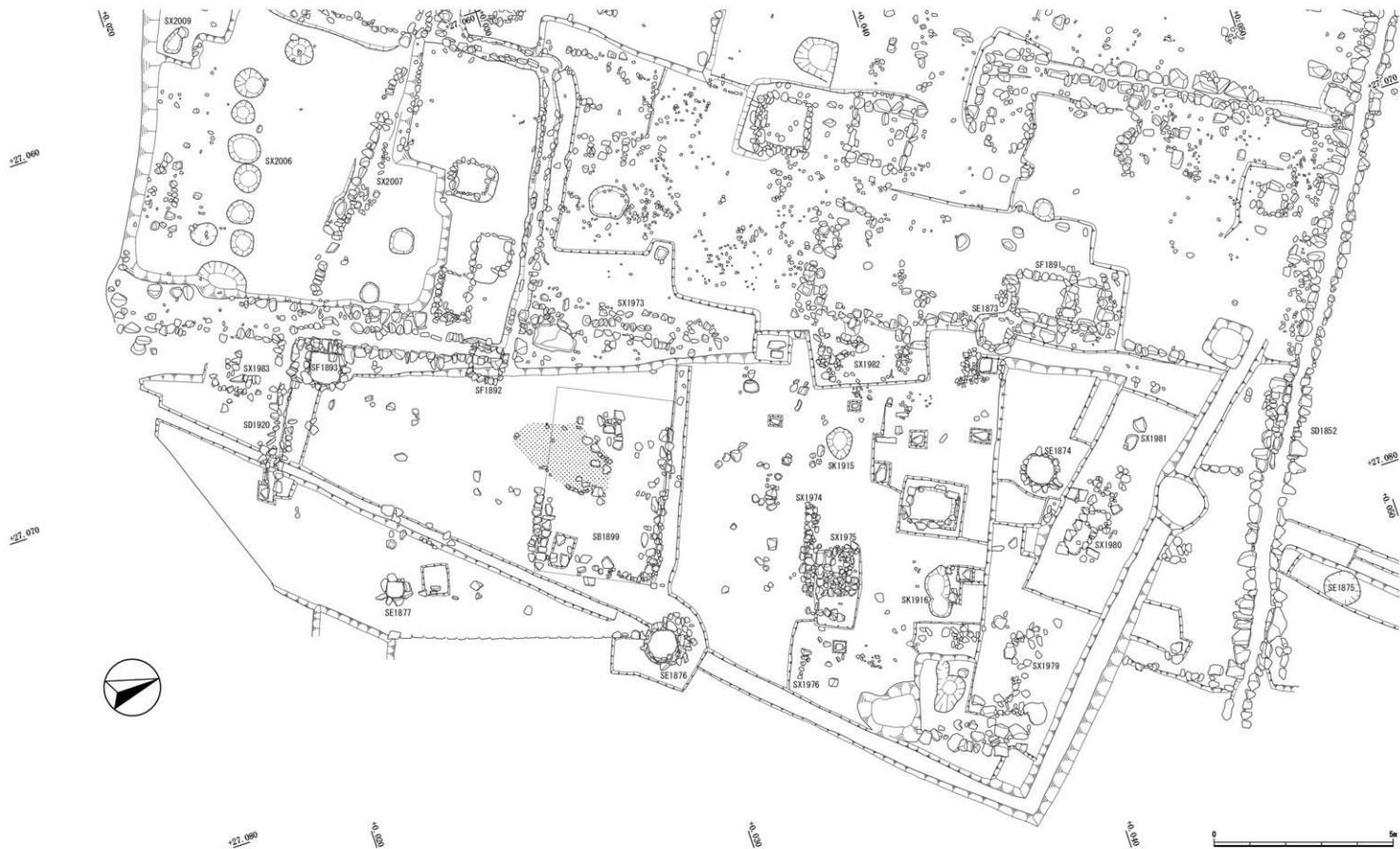
第8图 区画42-2·3·4·5下位検出面 (縮尺1/100)



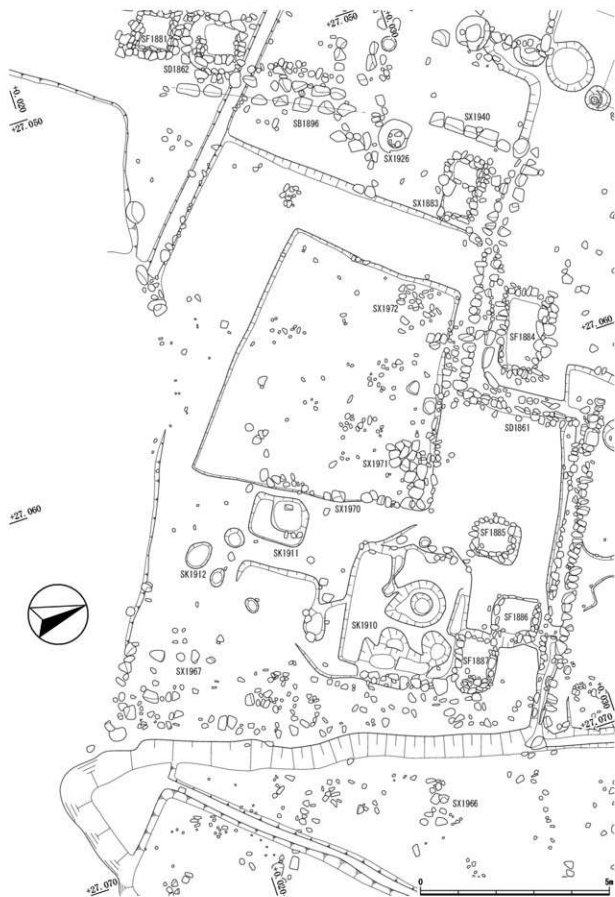
第9图 区画42-6上位検出面 (縮尺1/100)



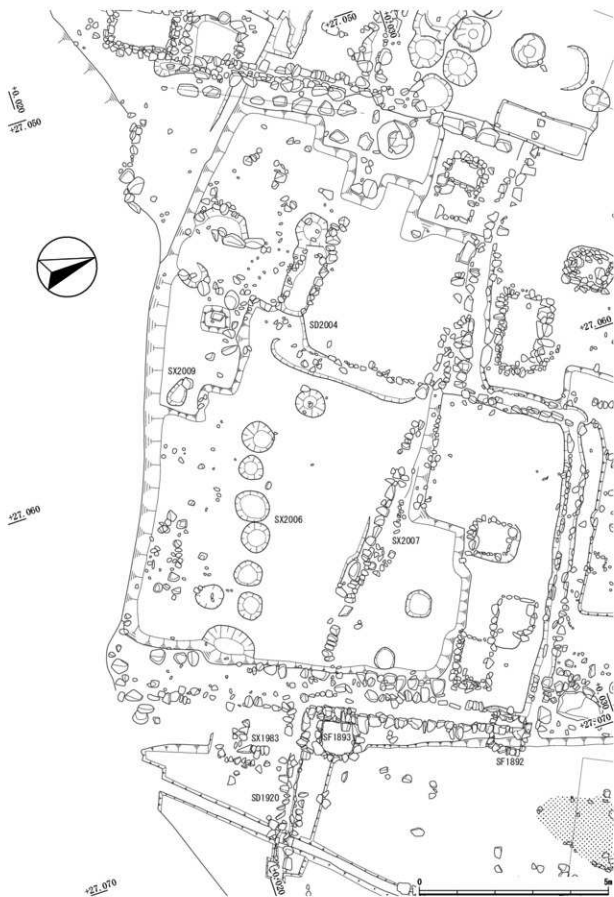
第10图 区画42-6下位検出面(縮尺1/100)



第12图 H2·4区(区画42·7·10·11·12·13)下位検出面(縮尺1/100)

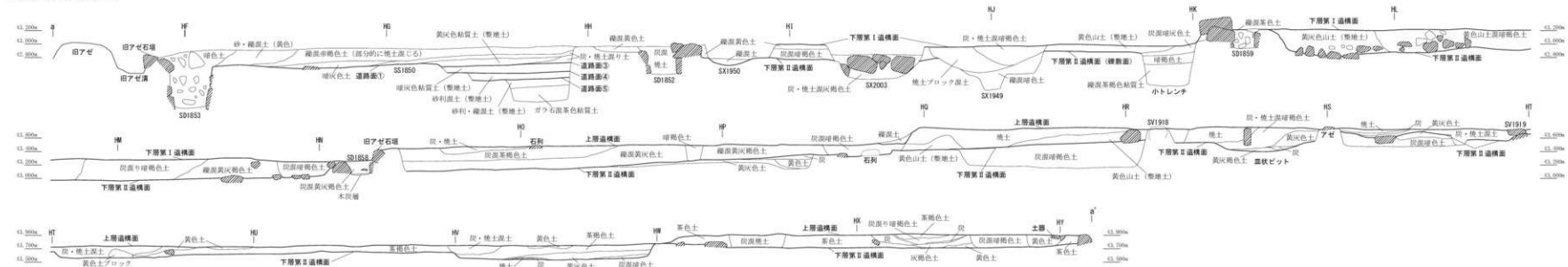


第 13 図 H3 地 (区画 42-8-9) 上位検出面 (縮尺 1/100)

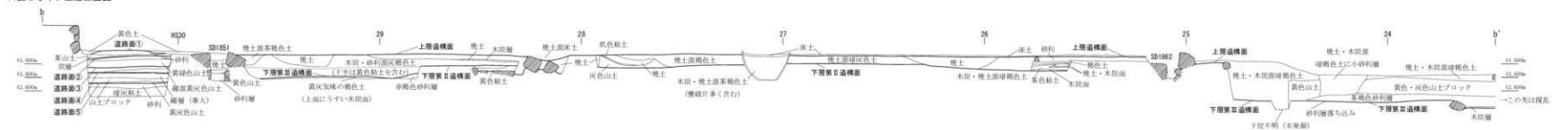


第 14 图 H3 区 (区画 42-8-9) 下位検出面 (縮尺 1/100)

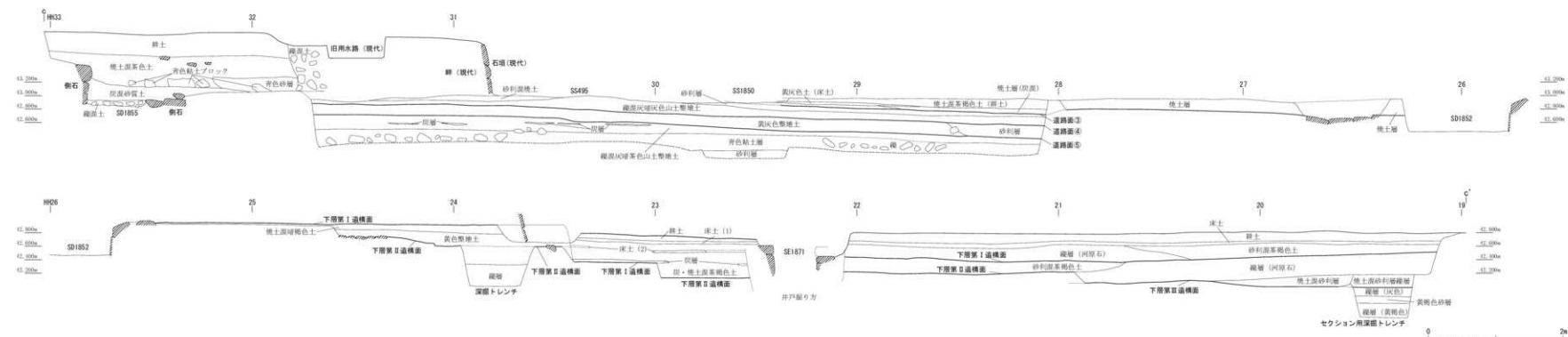
H区 28ライン土層断面図



H区 Sライン土層断面図



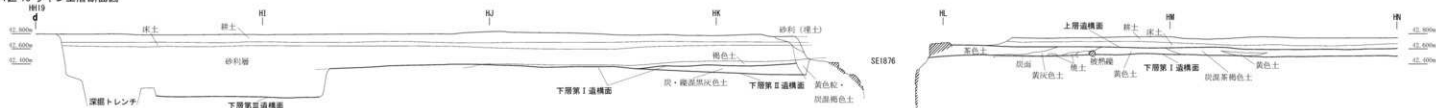
H区 Hライン土層断面図



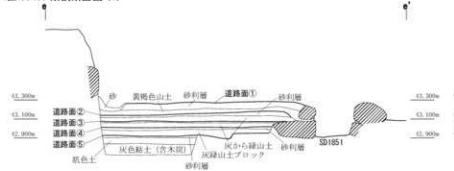
第 15 図 H区セクション断面図 (縮尺 1/50)



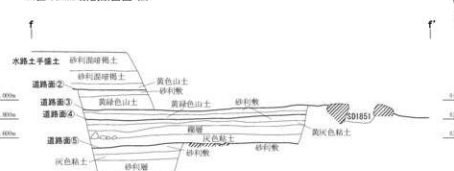
H区 19 ライン土層断面図



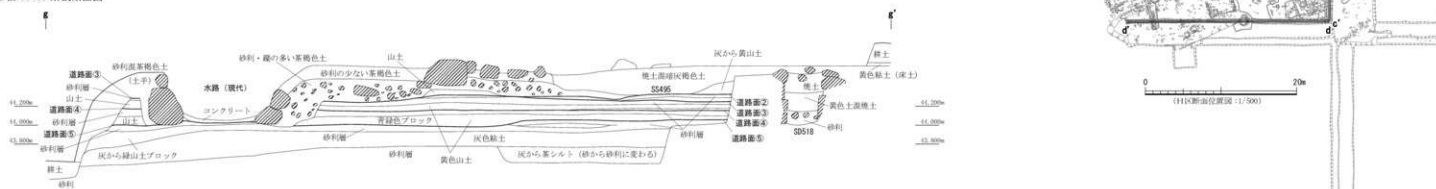
H区 SS495 断面断面図 (1)



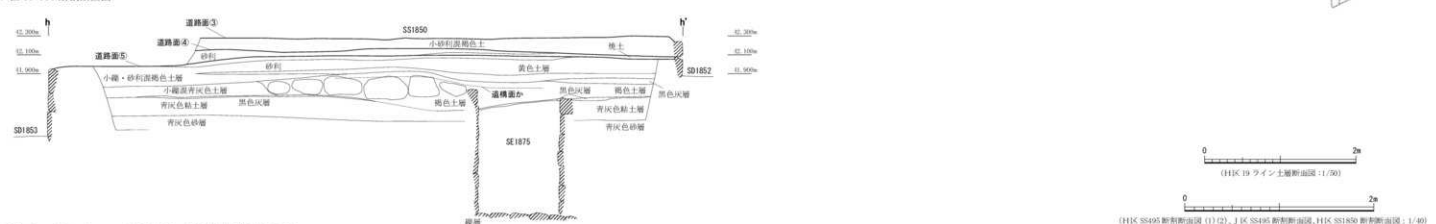
H区 SS495 断面断面図 (2)



J区 SS495 断面断面図



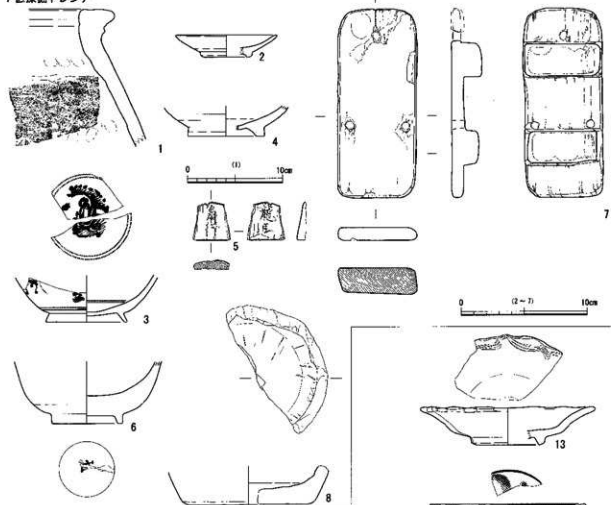
H区 SS1850 断面断面図



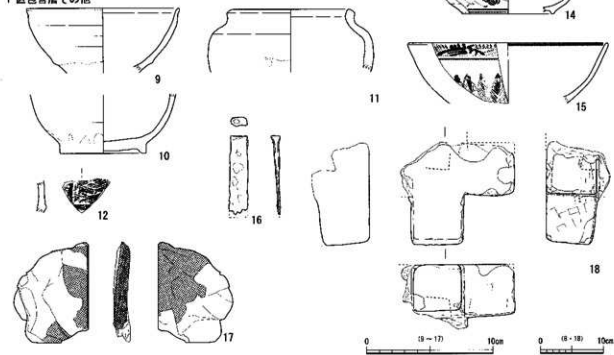
第 16 図 H区セクション断面図及び遺跡遺構断面断面図

(H区 SS495 断面断面図 (1)(2)、J区 SS495 断面断面図、H区 SS1850 断面断面図 : 1/40)

F区深掘トレンチ

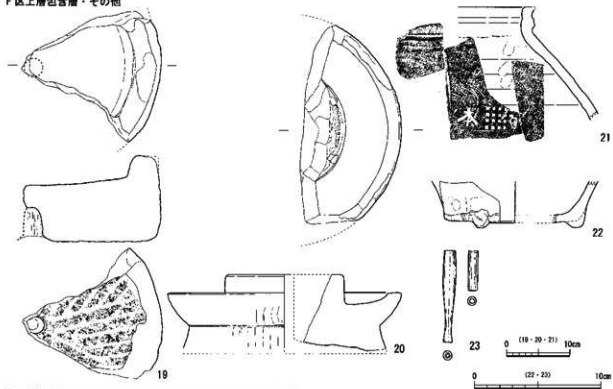


F区包含層その他

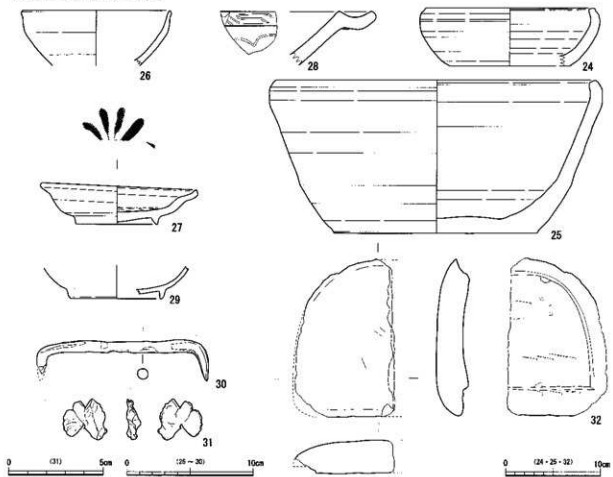


第17圖 出土遺物 F区(1)

F区上層包含層・その他

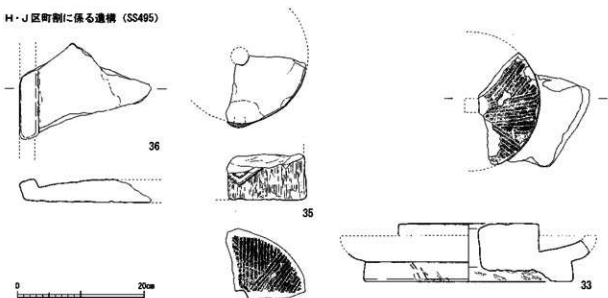


H・J区町割に係る遺構 (SS495)

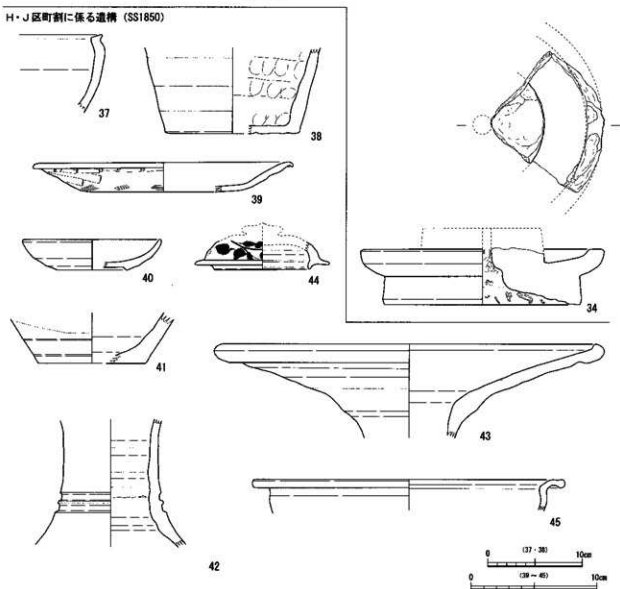


第18図 山上遺物 F区(2)・町割遺構(1)

H・J区町割に係る遺構 (SS495)

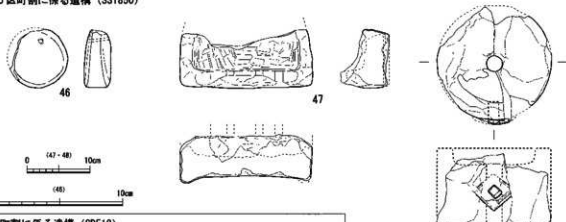


H・J区町割に係る遺構 (SS1850)

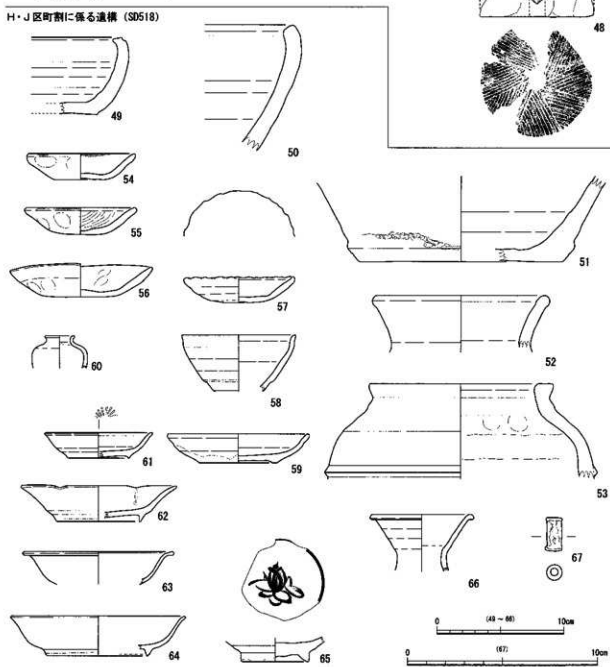


第19圖 出土遺物 町割遺構(2)

H・J区町割に係る遺構 (SS1850)

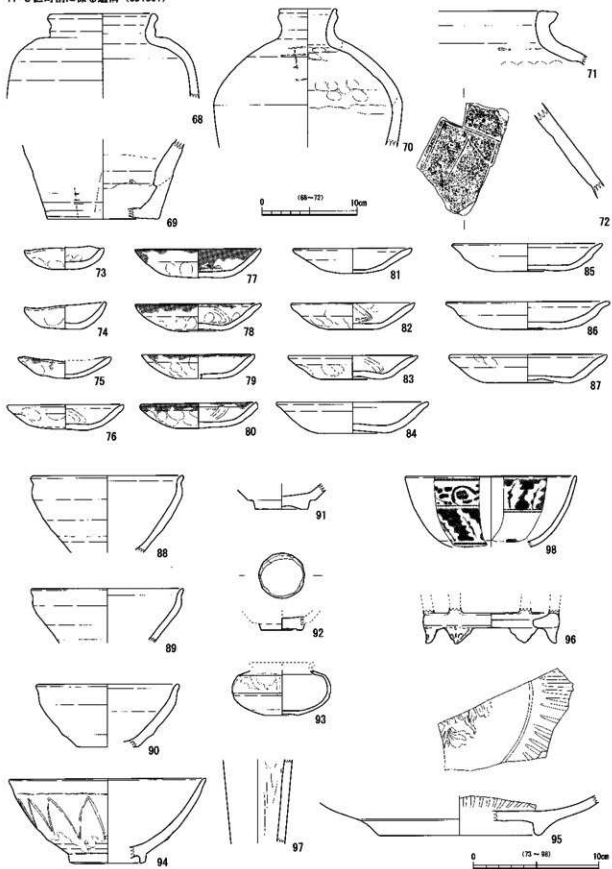


H・J区町割に係る遺構 (SD518)



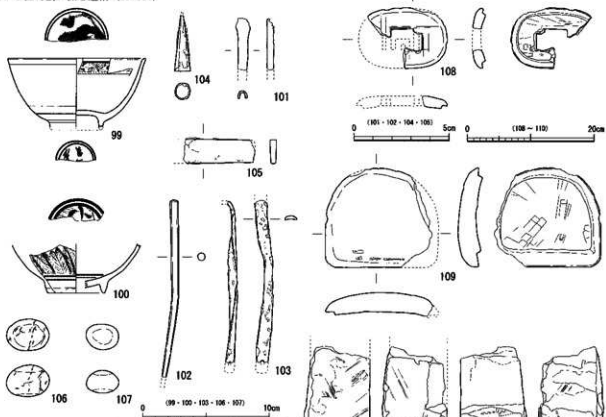
第20図 出土遺物 町割遺構(3)

H・J区町割に係る遺構 (SD1851)

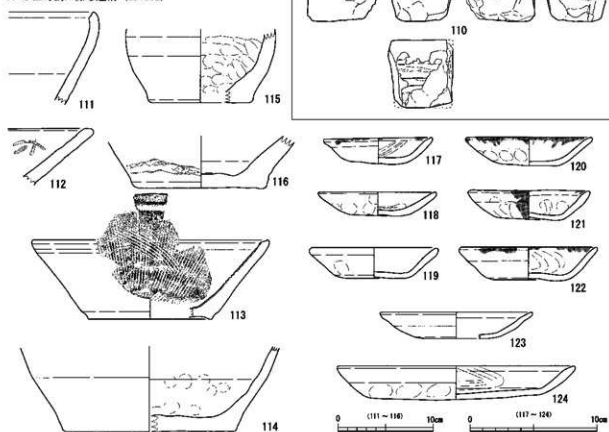


第21圖 出土遺物 町割遺構 (4)

H・J区町割に係る遺構 (SD1851)

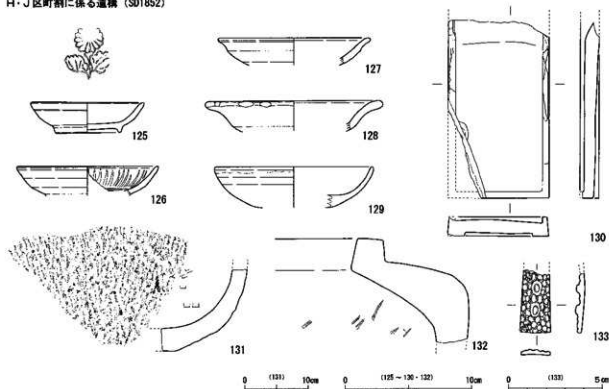


H・J区町割に係る遺構 (SD1852)

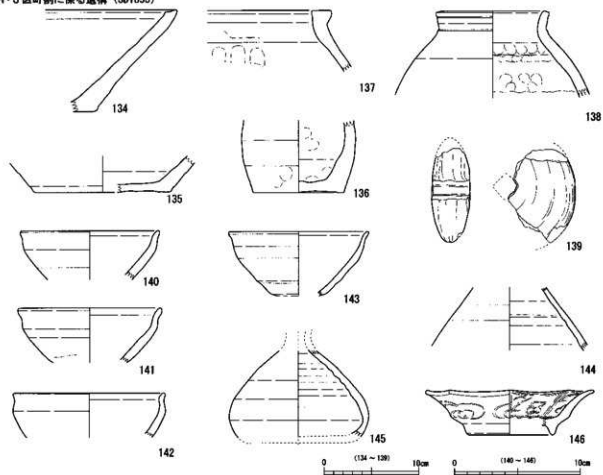


第22図 出土遺物 町割遺構 (5)

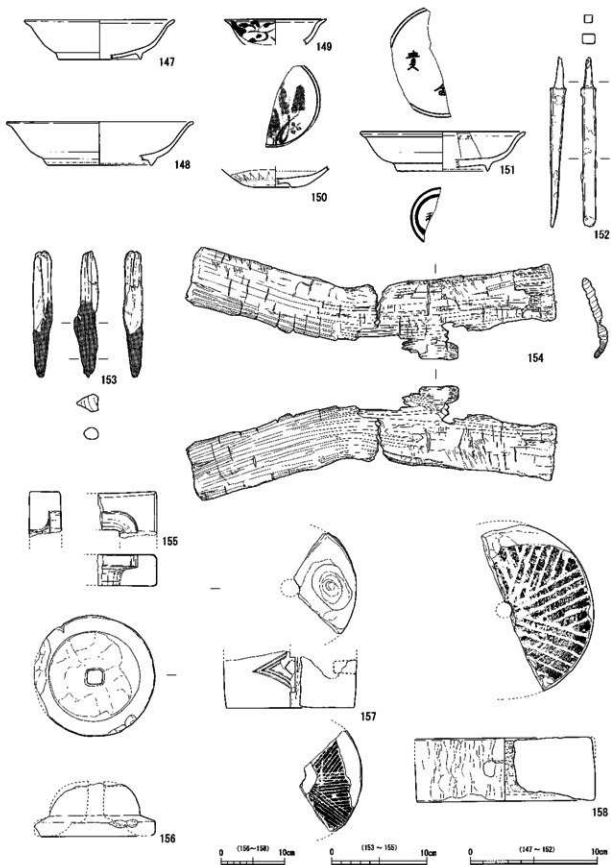
H・J区町割に係る遺構 (SD1852)



H・J区町割に係る遺構 (SD1853)

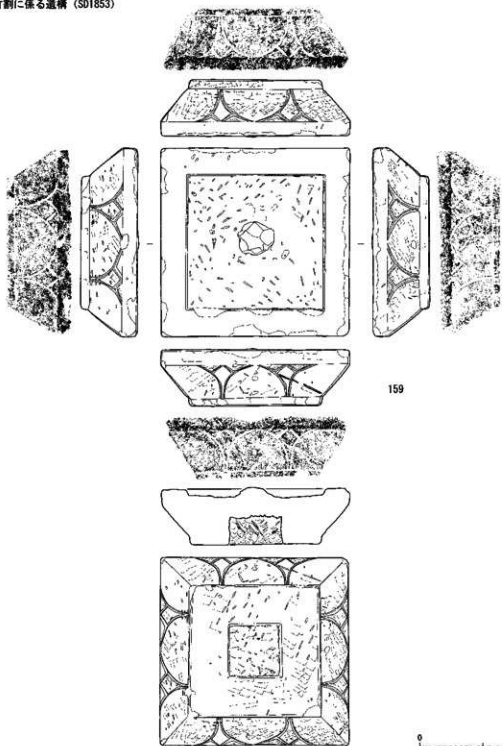


第23圖 出土遺物 町割遺構(6)



第24図 出土遺物 町割遺構(7)

H・J区町割に係る遺構 (SD1853)



159

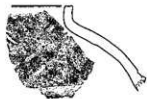
H・J区町割に係る遺構 (SD1854)



160



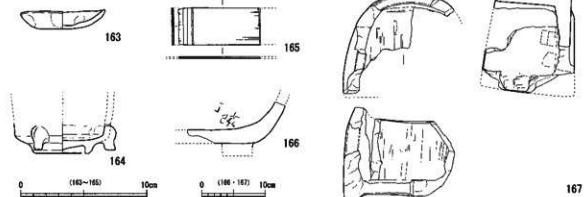
161



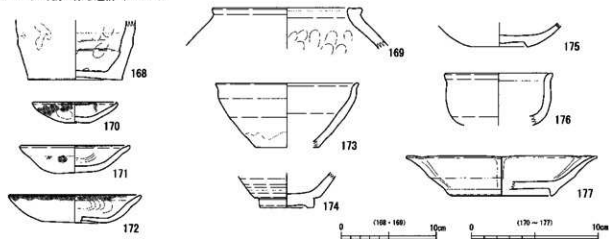
162

第25圖 出土遺物 町割遺構(8)

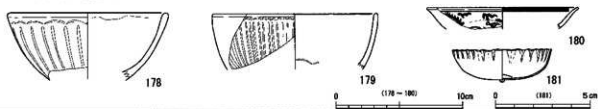
H・J 区町割に係る遺構 (SD1854)



H・J 区町割に係る遺構 (SD1855)



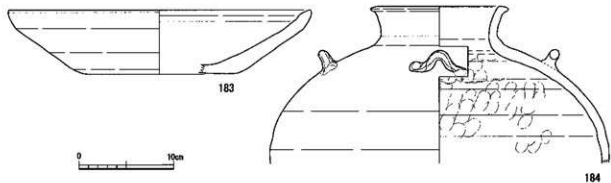
H・J 区町割に係る遺構 (SD1858)



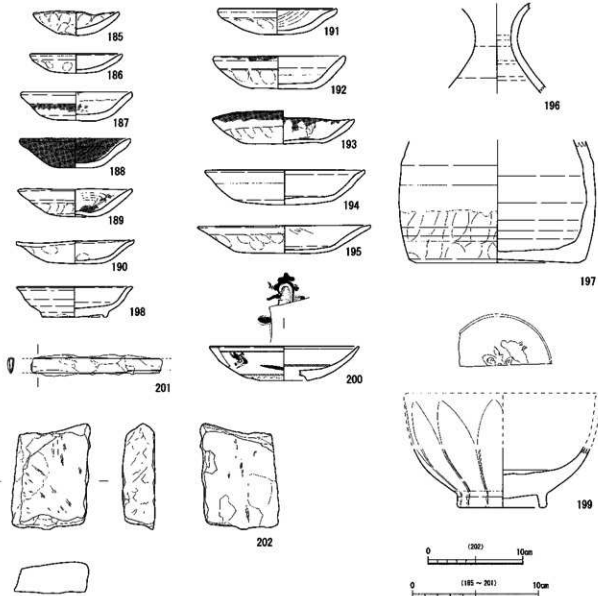
H・J 区町割に係る遺構 (SD1860)



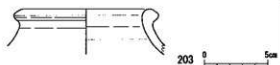
H・J 区町割に係る遺構 (SD1861)



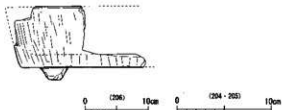
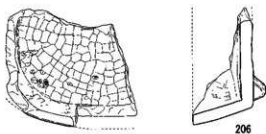
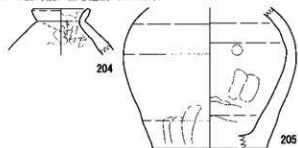
H・J区町割に係る遺構 (SD1861)



H・J区町割に係る遺構 (SD1862)

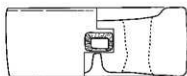
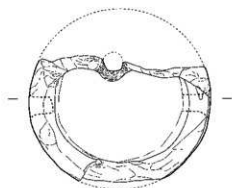


H・J区町割に係る遺構 (SD1920)



第27図 出土遺物 町割遺構 (10)

H・J区町割に係る遺構 (SD1920)



207



H・J区町割に係る遺構 (SE1875)



208



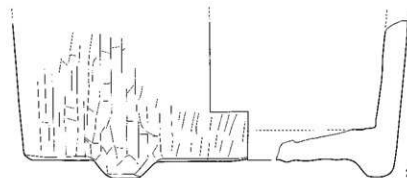
209



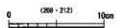
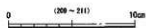
210



211

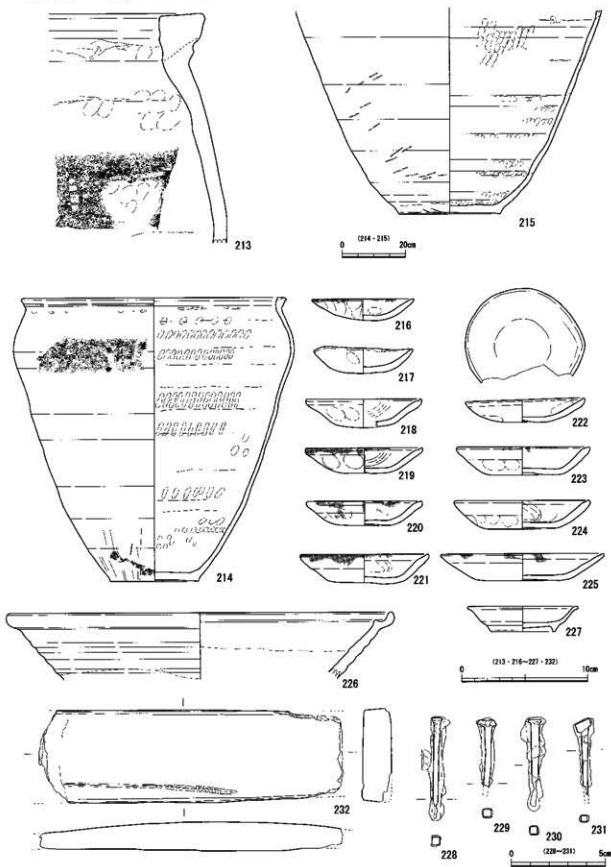


212



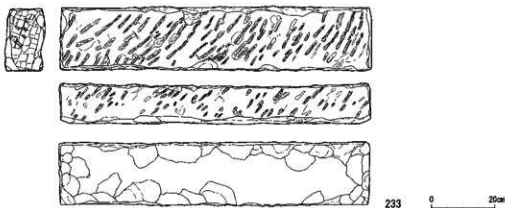
第28図 出土遺物 町割遺構(11)

H·J区 区画42-2遺構出土遺物(上層)

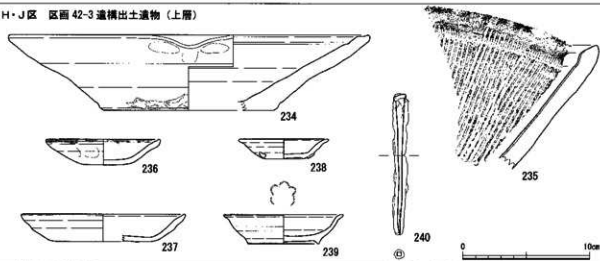


第29圖 出土遺物 区画内遺構(1)

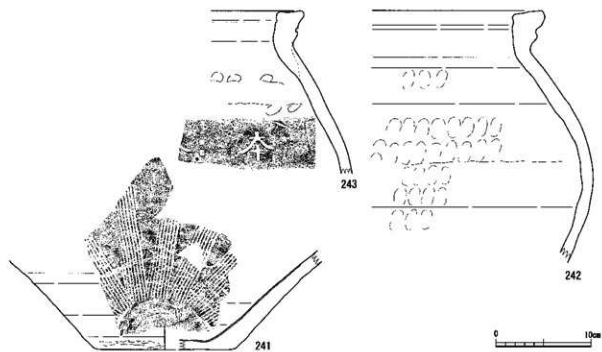
H·J区 区画42-2 遺構出土遺物(上層)



H·J区 区画42-3 遺構出土遺物(上層)

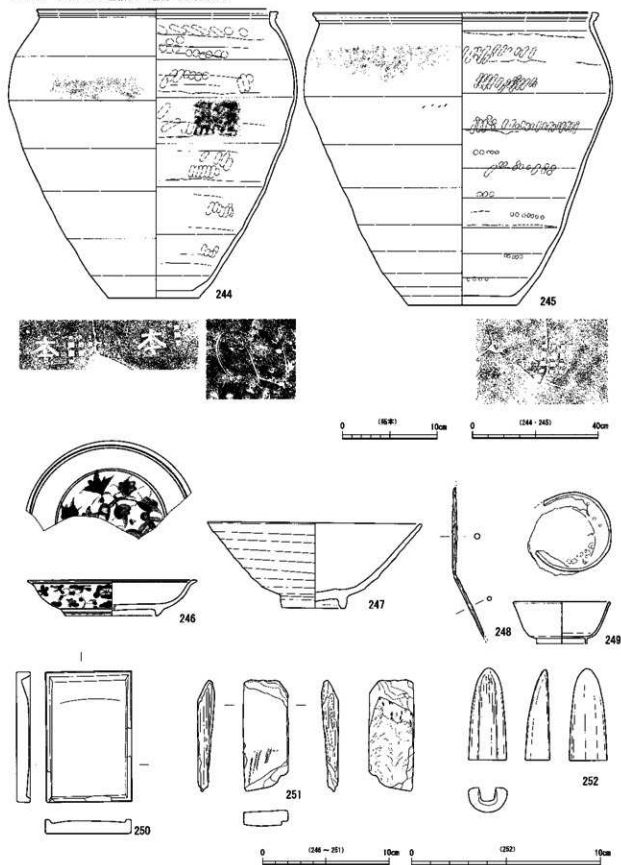


H·J区 区画42-3 遺構出土遺物(下層第Ⅱ)



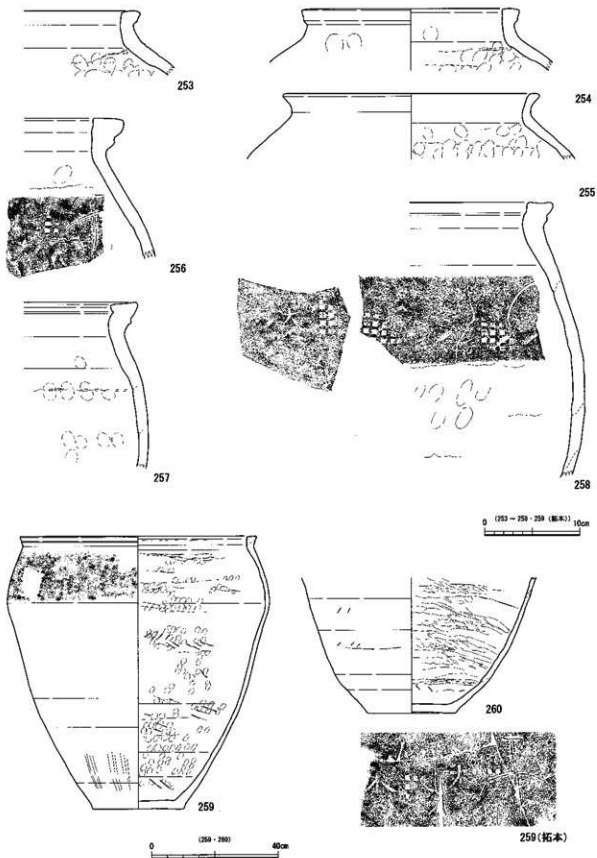
第30图 出土遺物 区画内遺構(2)

H·J区 区画42-3遺構出土遺物(下層第Ⅱ)



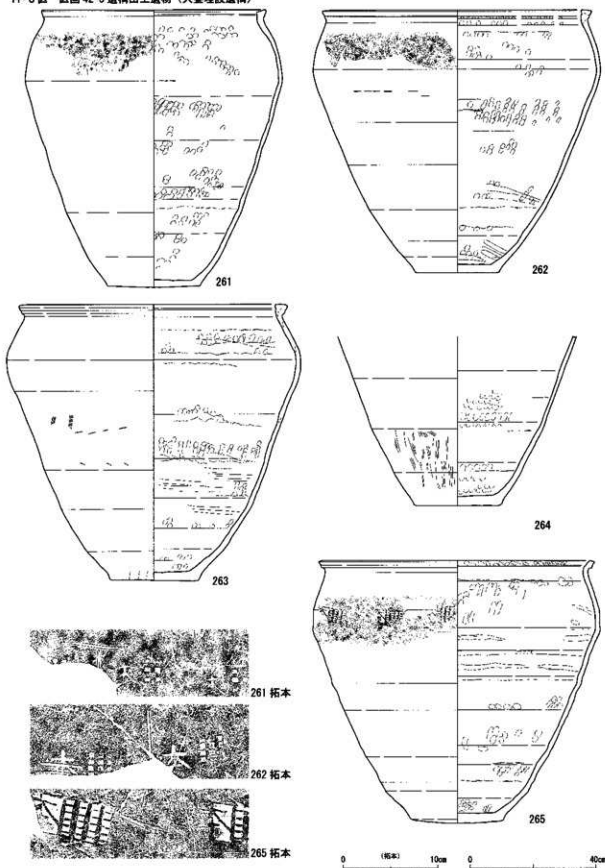
第31圖 出土遺物 区画内遺構(3)

H·J区 区画42-3 遺構出土遺物 (大塚埋設遺構)



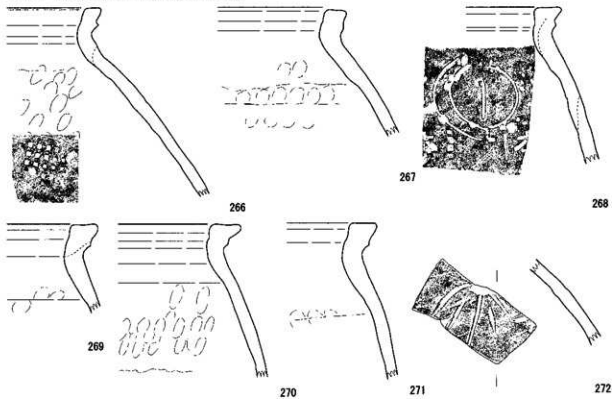
第32図 出土遺物 区画内遺構 (4)

H・J区 区画42-3 遺構出土遺物 (大甕埋設遺構)

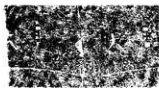
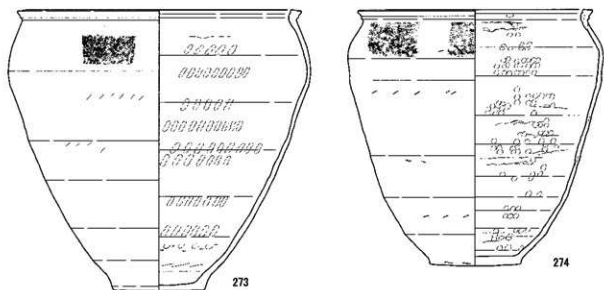


第33圖 出土遺物 区画内遺構 (5)

H・J区 区画42-3 遺構出土遺物（大塚埋設遺構）



0 (266-272・954) 10cm



273 拓本

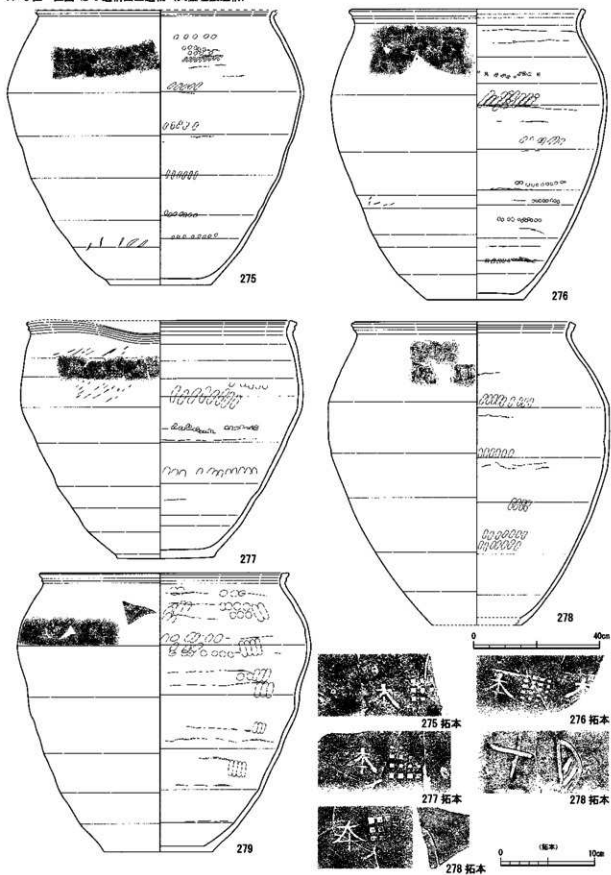


274 拓本

0 (273・274) 40cm

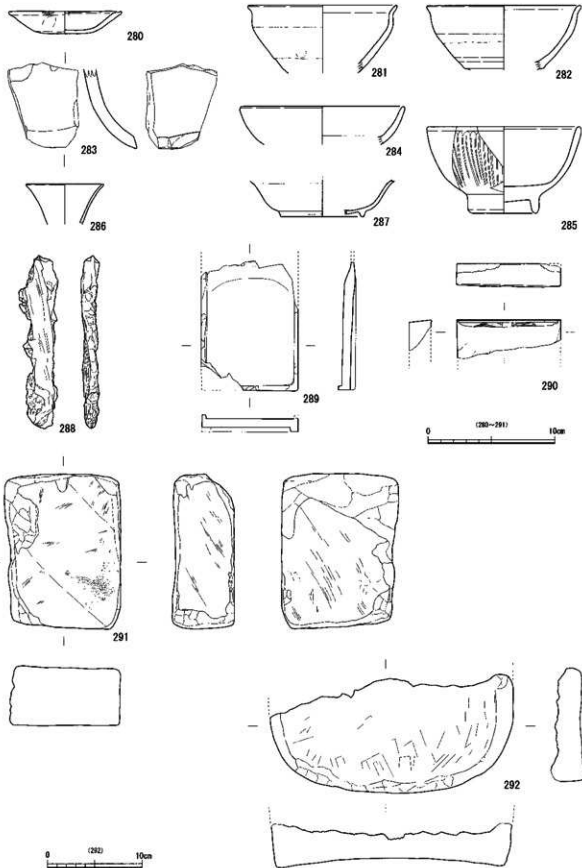
第34圖 出土遺物 区画内遺構（6）

H・J区 区画42-3遺構出土遺物(大甕埋設遺構)



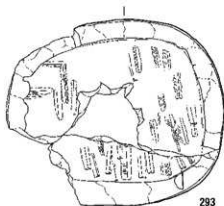
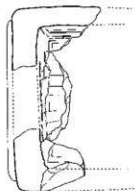
第35圖 出土遺物 区画内遺構(7)

H·J区 区画42-3遺構出土遺物（大塚埴段遺構）

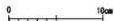
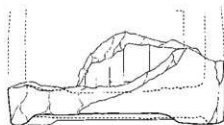


第36圖 出土遺物 区画内遺構(8)

H・J区 区画42-3 遺構出土遺物 (大甕埋設遺構)



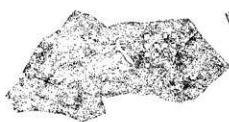
293



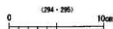
H・J区 区画42-4 遺構出土遺物 (上層)



294



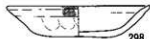
295



297



299



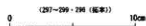
298



296



296 底部内面 (拓本)



第37圖 出土遺物 区画内遺構 (9)

区画 42-4 遺構出土遺物 (上層)



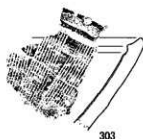
区画 42-4 遺構出土遺物 (下層第Ⅱ)



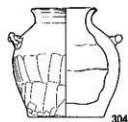
区画 42-5 遺構出土遺物 (上層)



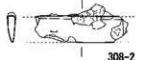
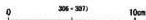
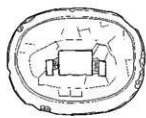
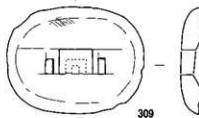
区画 42-5 遺構出土遺物 (下層第Ⅰ)



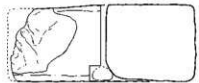
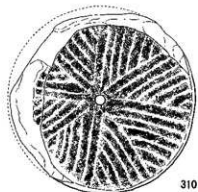
区画 42-5 遺構出土遺物 (下層第Ⅱ)



区画 42-5 遺構出土遺物 (下層第Ⅰ)

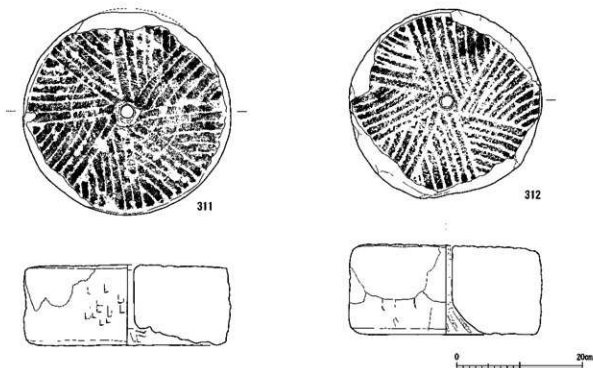


区画 42-6 遺構出土遺物 (下層第Ⅱ)

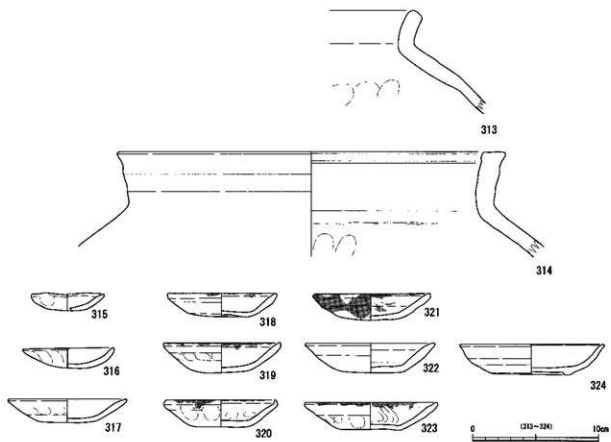


第 38 图 出土遺物 区画内遺構 (10)

区画 42-6 遺構出土遺物 (下層第 1)

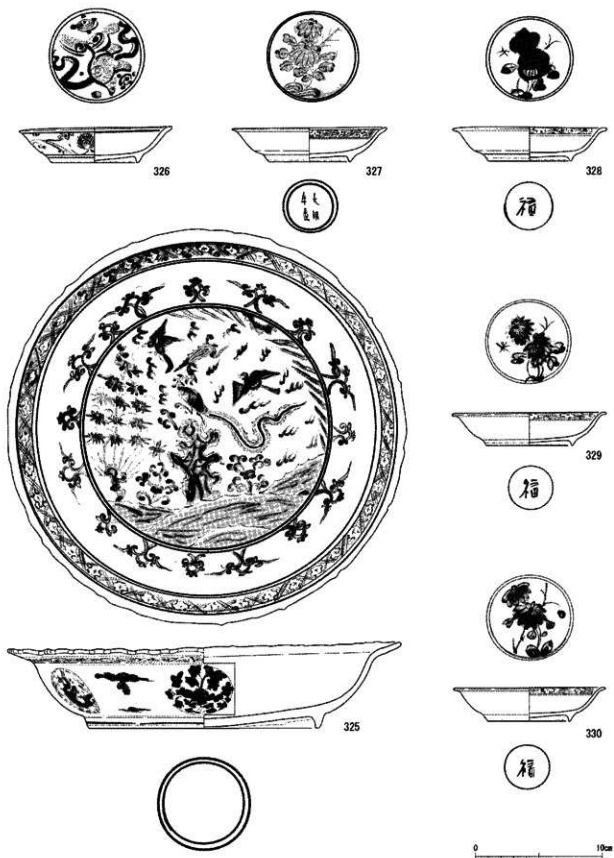


区画 42-7 遺構出土遺物 (上層)



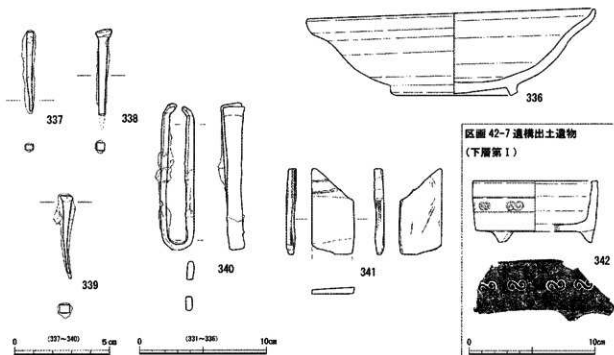
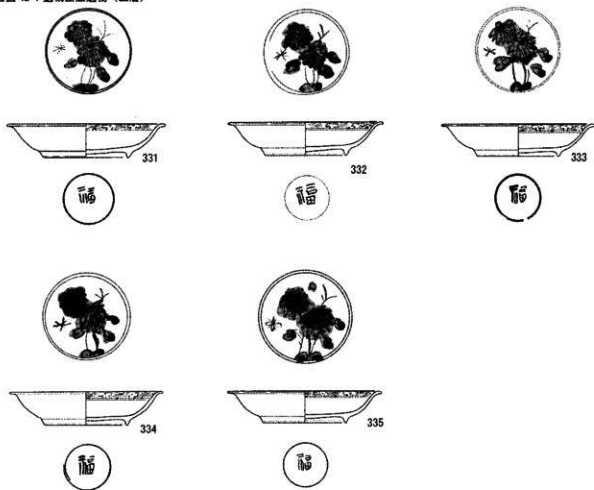
第 39 圖 出土遺物 区画内遺構 (11)

区画 42-7 遺構出土遺物 (上層)



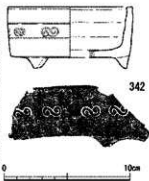
第 40 图 出土遺物 区画内遺構 (12)

区画 42-7 遺構出土遺物 (上層)



第 41 圖 出土遺物 区画内遺構 (13)

区画 42-7 遺構出土遺物
(下層第 1)



区画 42-7 遺構出土遺物 (下層第Ⅱ)



343

区画 42-7 遺構出土遺物 (下層第Ⅲ)



344

0 10cm

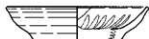
区画 42-8 遺構出土遺物 (上層)



346

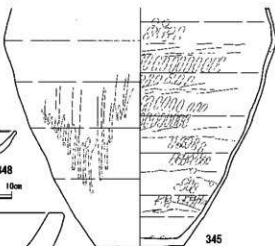


347



348

0 (346-348) 10cm



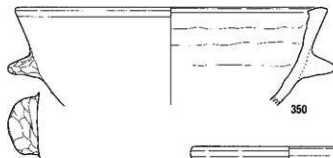
345



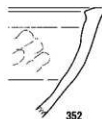
349

0 (349) 10cm 0 (345) 40cm

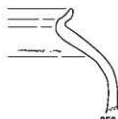
区画 42-9 遺構出土遺物 (上層)



350



352

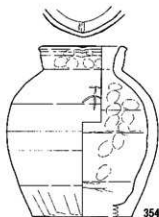


353

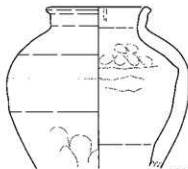
0 (350-353) 10cm



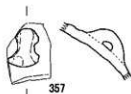
351



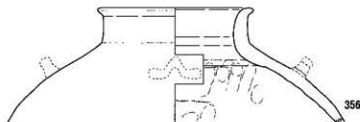
354



355



357



356

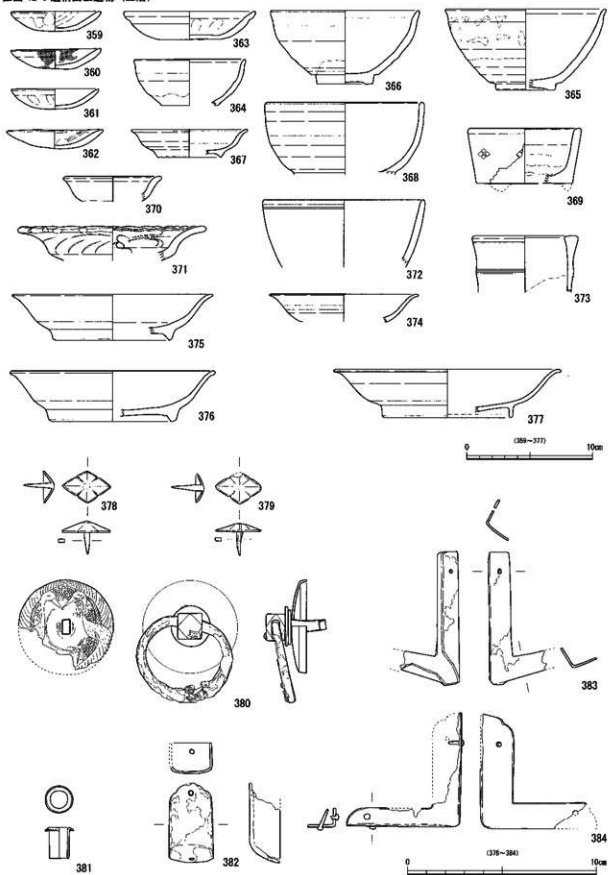


358

0 (358) 40cm

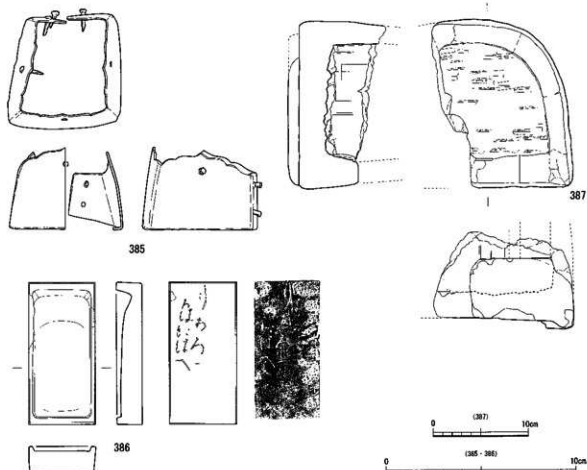
第 42 図 出土遺物 区画内遺構 (14)

区画 42-9 遺構出土遺物 (上層)

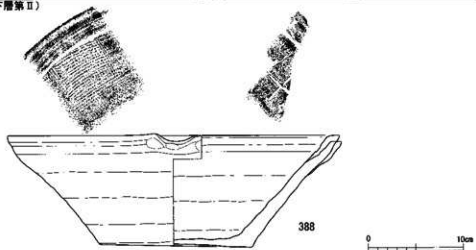


第43圖 出土遺物 区画内遺構 (15)

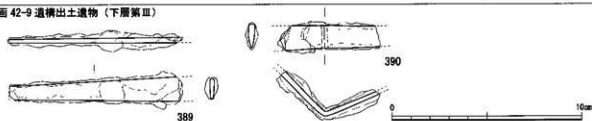
区画 42-9 遺構出土遺物 (上層)



区画 42-9 遺構出土遺物 (下層第Ⅱ)

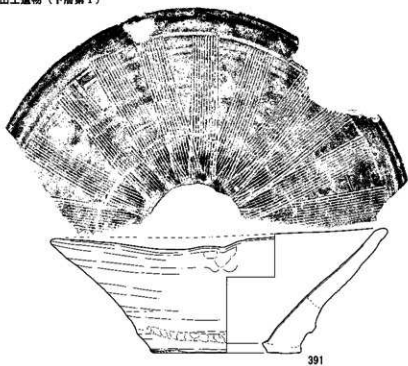


区画 42-9 遺構出土遺物 (下層第Ⅲ)

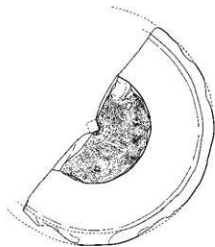


第44図 出土遺物 区画内遺構 (16)

区画 42-10 遺構出土遺物 (下層第 I)

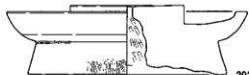


391



392

0 (CM) 40cm



393

0 (CM) 20cm

区画 42-10 遺構出土遺物 (下層第 III)



394

0 10cm



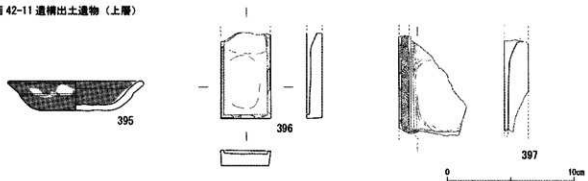
392 (拓本)

(391-392 (CM))

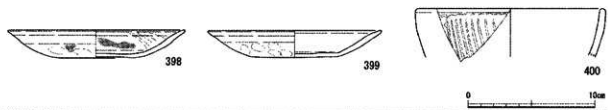
0 10cm

第 45 圖 出土遺物 区画内遺構 (17)

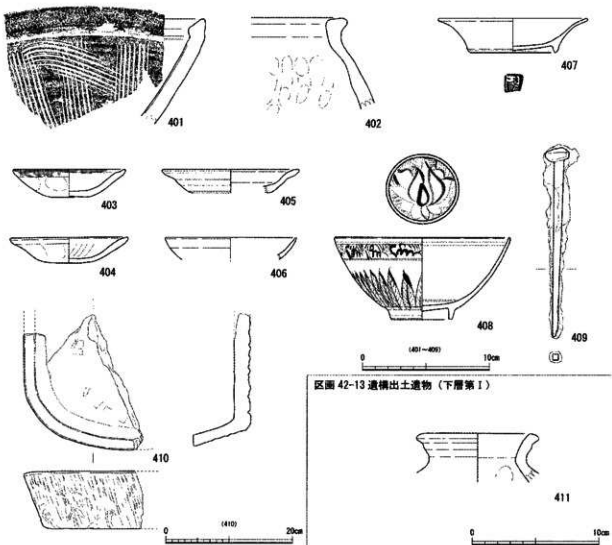
区画 42-11 遺構出土遺物（上層）



区画 42-11 遺構出土遺物（下層第 I）

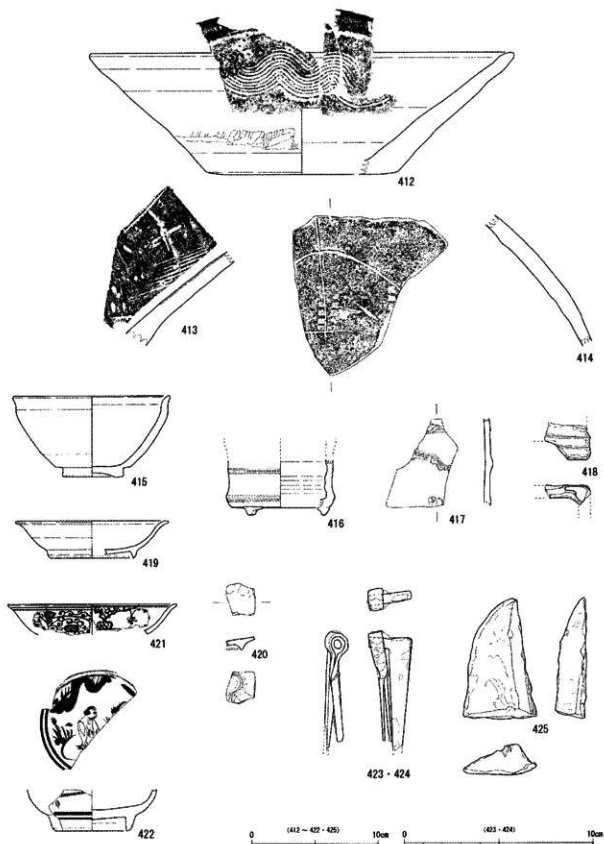


区画 42-12 遺構出土遺物（下層第 I）



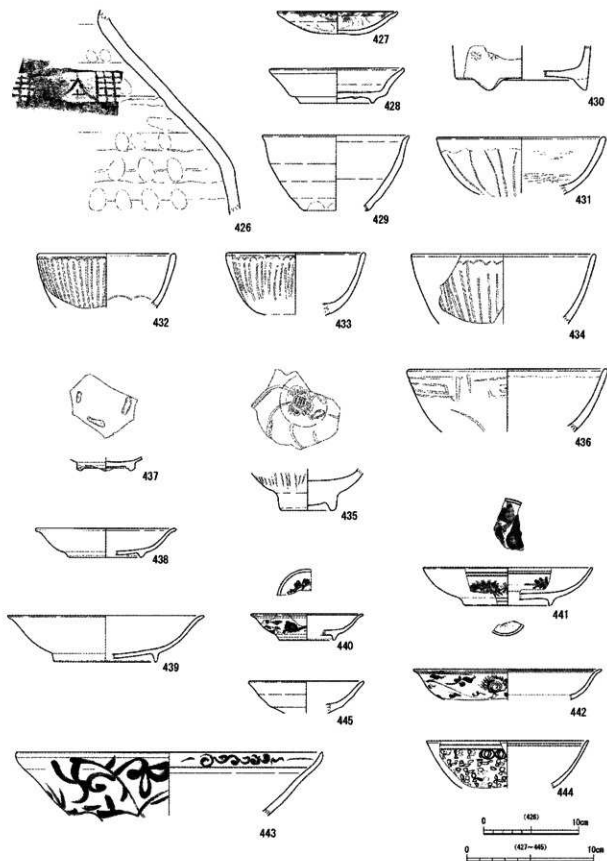
第 46 図 出土遺物 区画内遺構 (18)

H1区 (上层包含層)



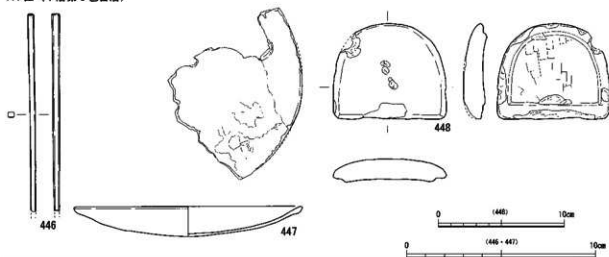
第47图 出土遺物 H区包含層 (1)

H1区 (下層第I包含層)

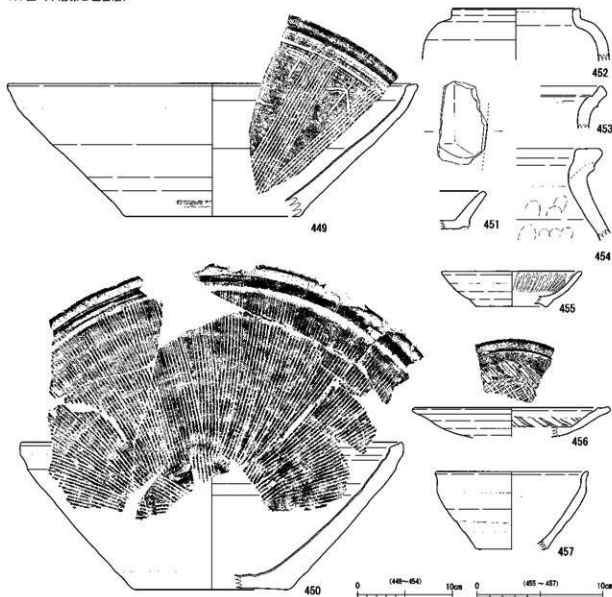


第48图 出土遺物 H区包含層(2)

H1区 (下層第I包含層)

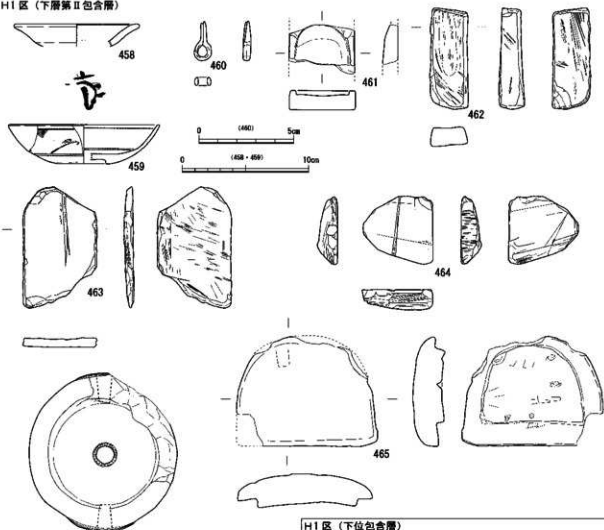


H1区 (下層第II包含層)

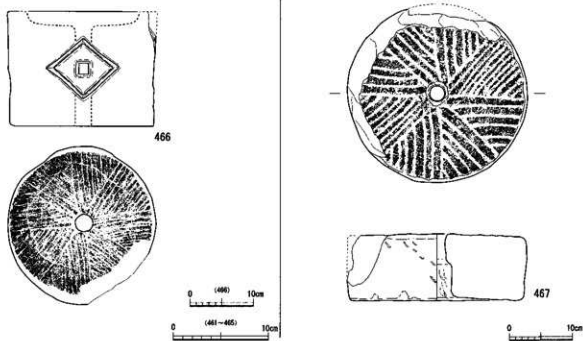


第49圖 出土遺物 II区包含層(3)

H1区 (下層第II包含層)

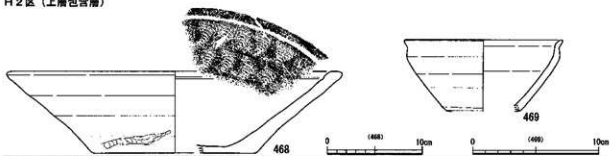


H1区 (下位包含層)

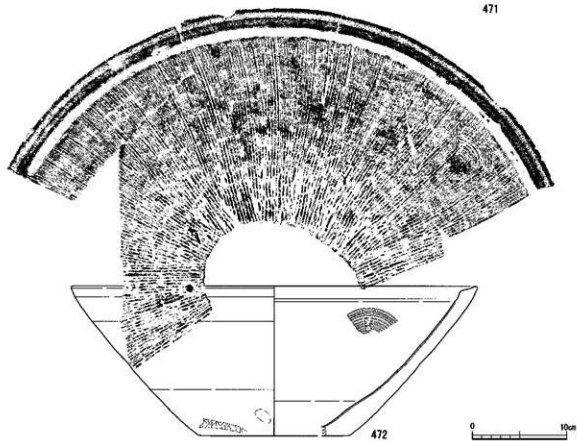
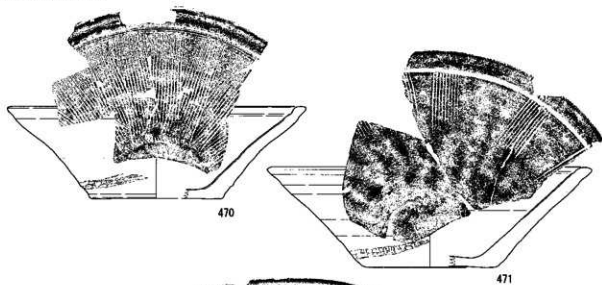


第50图 出土遺物 H1区包含層(4)

H2区 (上层包含層)

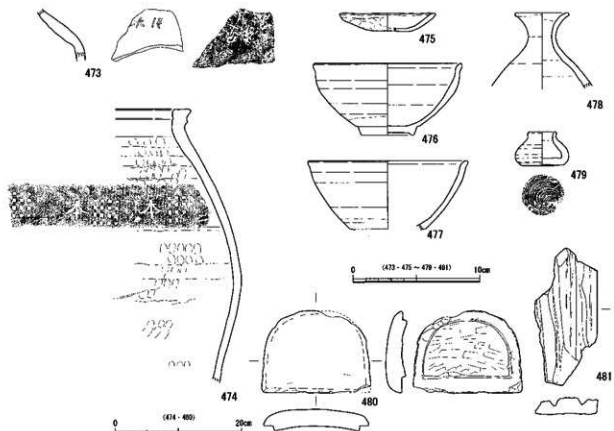


H2区 (下层第I包含層)

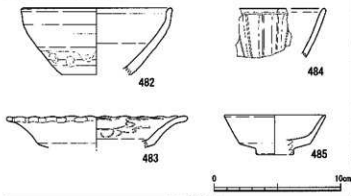


第51圖 出土遺物 H区包含層(5)

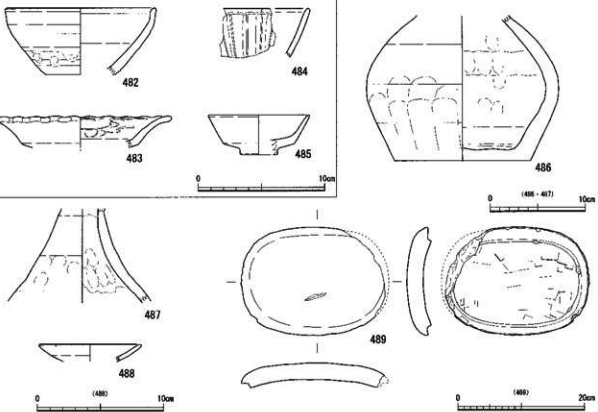
H2区 (下層第I包含層)



H2区 (下層第II包含層)

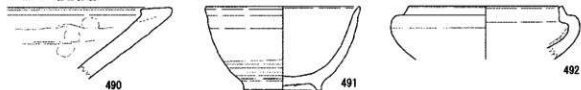


H2区 (下層第III包含層)



第52图 出土遺物 H区包含層 (6)

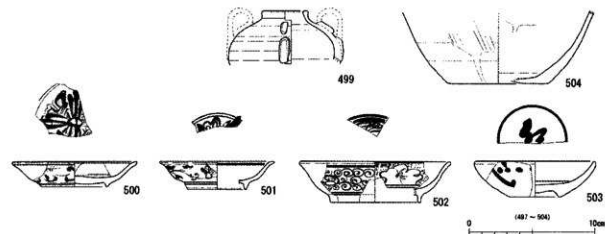
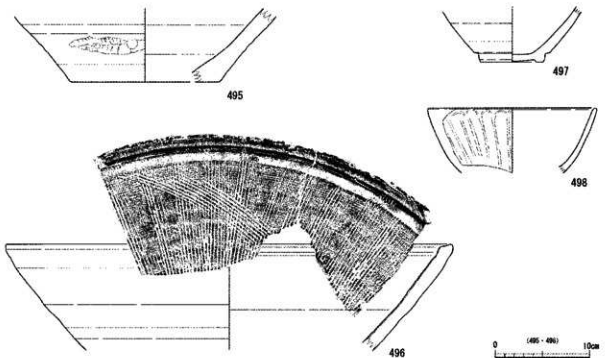
H 3 区 (上层包含層)



H 3 区 (下层第 I 包含層)



H 3 区 (下层第 II 包含層)

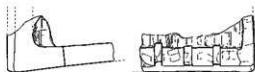


第 53 圖 出土遺物 II 区包含層 (7)

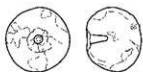
H3区 (下層第II包含層)



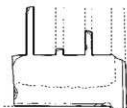
505



506



507



508

0 (505-507) 10cm

0 (508) 20cm

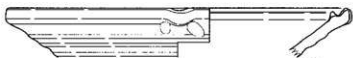
H3区 (下層第III包含層)



509



510



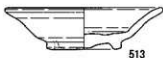
0 (509) 10cm



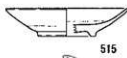
511



512



513



515



514

0 (510-515) 10cm

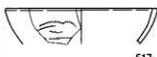
H3区 (その他)



516

0 5cm

H4区 (上層包含層)



517

0 5cm

H4区 (下層第I包含層)

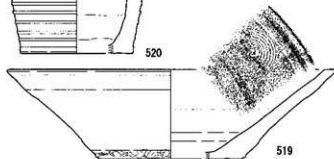


518

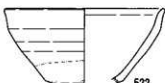
0 (518-520) 10cm



520



519



522

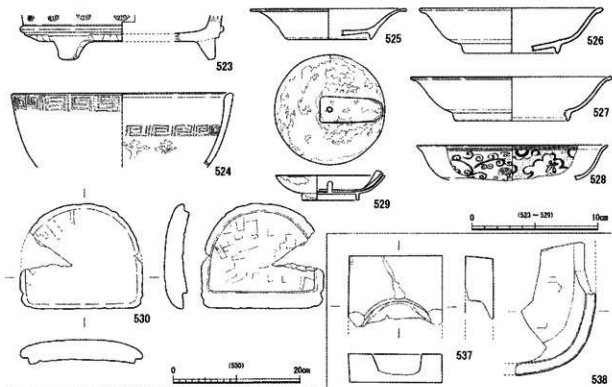


521

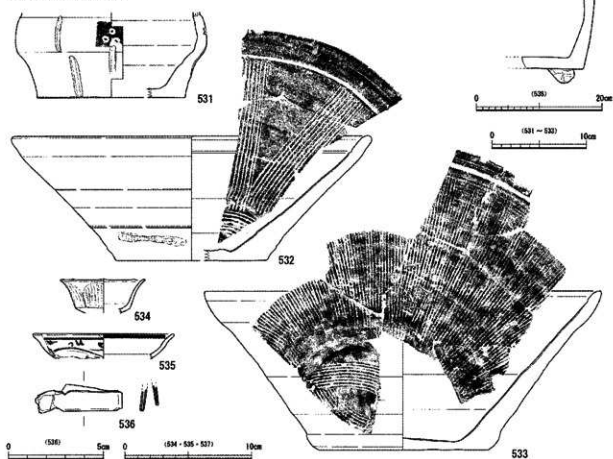
0 (521-522) 10cm

第54図 出土遺物 H区包含層(8)

H 4 区 (下層第 I 包含層)



H 4 区 (下層第 II 包含層)

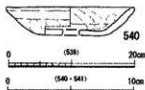


第 55 圖 出土遺物 H 区包含層 (9)

H4区 (下層第三包含層)



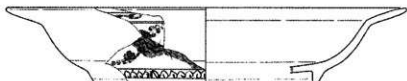
539



540

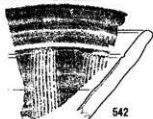
0 (539) 20cm

0 (540・541) 10cm



541

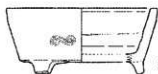
H4区 (下層包含層)



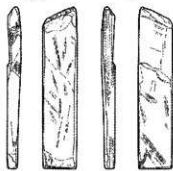
542



544

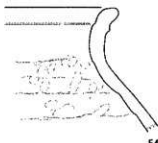


545



547

0 (542・543・547) 10cm



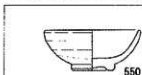
543



546



0 (544・546) 10cm



550



551



551

H4区 (その他)

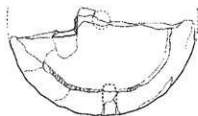


548

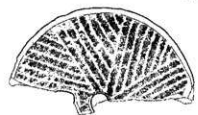
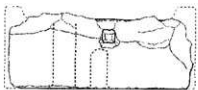


549

0 (548・549) 10cm



552



0 (552) 20cm

H区 包含層



553



554



555

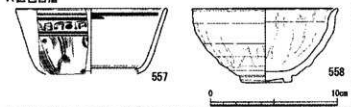


556

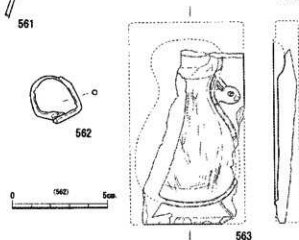
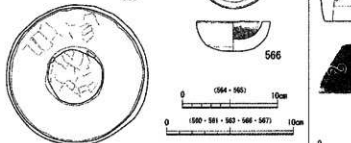
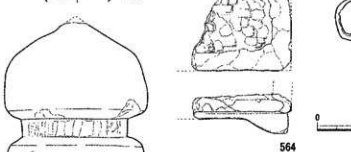
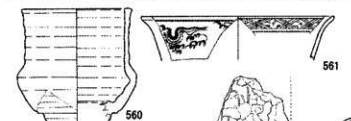
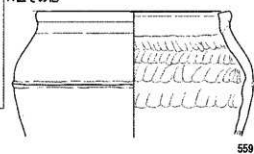
0 10cm

第56図 出土遺物 H区包含層 (10)

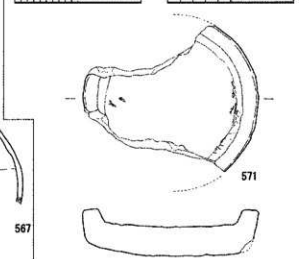
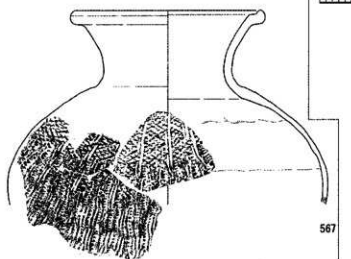
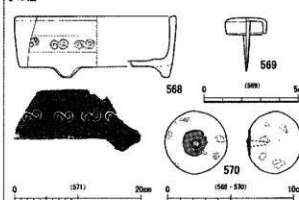
H区包含層



H区その他

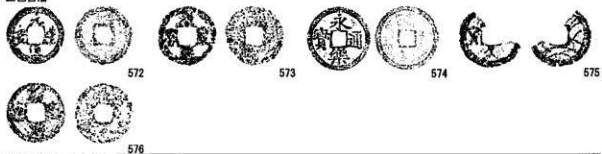


その他



第57図 出土遺物 II区包含層 (11)、その他遺物

F区包含層



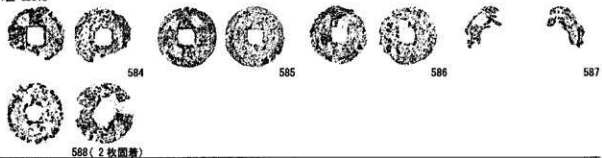
H区 SS495



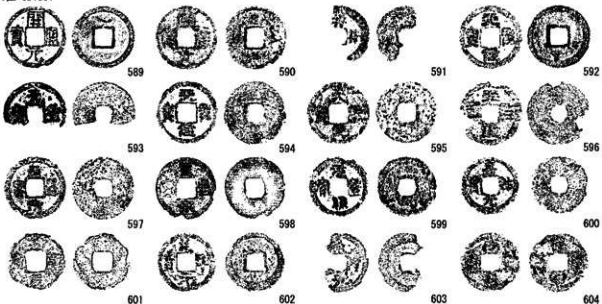
H区 SS1850



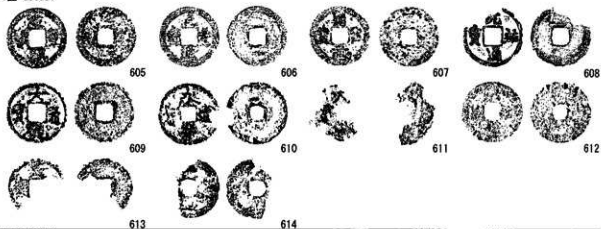
H区 SD618



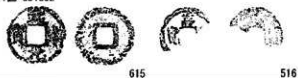
H区 SD1851



H区 SD1851



H区 SD1852



H区 SD1853



H区 SD1855



H区 SD1858



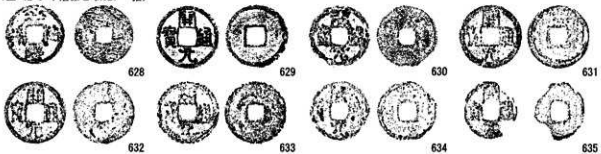
H区 SD1859



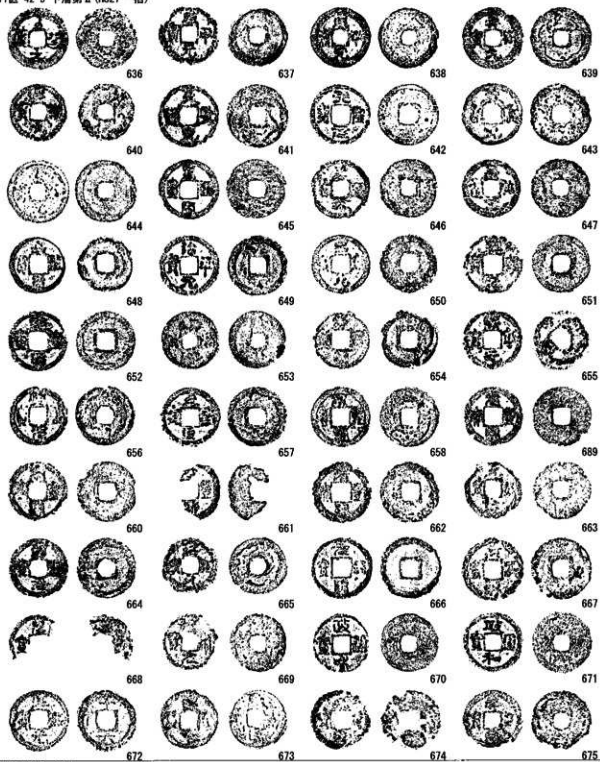
H区 42-3 下層第Ⅱ



H区 42-3 下層第Ⅱ (HS27一括)



H区 42-3 下層第Ⅱ (HS27一括)



H区 42-7 上層



第60圖 出土遺物 錢貨(3)

H区 42-7 上層



680

681

682

H区 42-7 下層第Ⅱ



683

H区 42-7 下層第Ⅲ



684

H区 42-7 上層



685

686

H区 42-13 下層第Ⅰ



687

688

689

690



691

HⅠ区 上層包含層



692

693

694

HⅠ区 下層第Ⅰ包含層



695

696

697

HⅠ区 下層第Ⅱ包含層



698

699

700

701



702

703

704

705



706

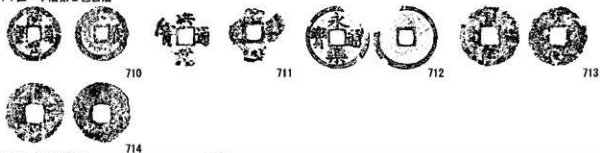
707

708

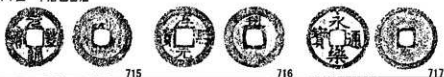
709



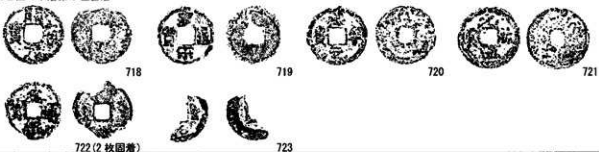
H 1区 下層第Ⅱ包含層



H 1区 下層包含層



H 2区 下層第Ⅰ包含層



H 2区 下層包含層



H 3区 下層第Ⅱ包含層



H 4区 下層第Ⅰ包含層



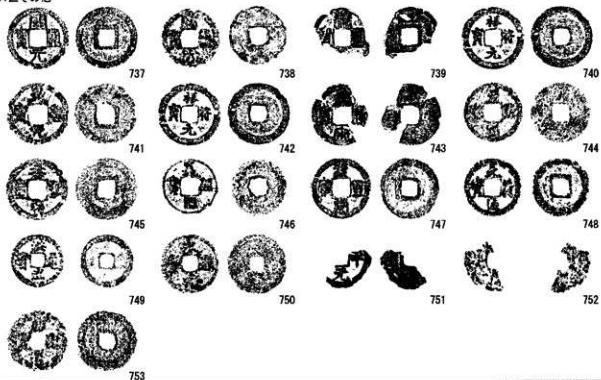
H 4区 下層第Ⅱ包含層



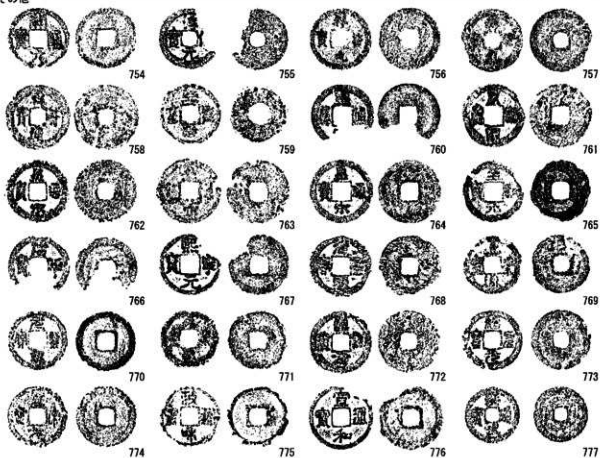
H 4区 その他



H区その他

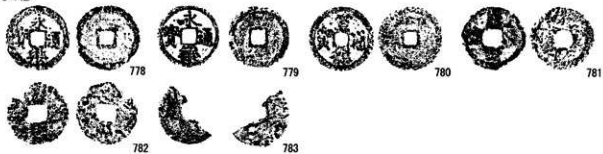


その他



第 63 図 出土遺物 銭貨 (6)

その他



第 64 図 出土遺物 銭貨 (7)



(1) 第42次調査区遠景（南から）



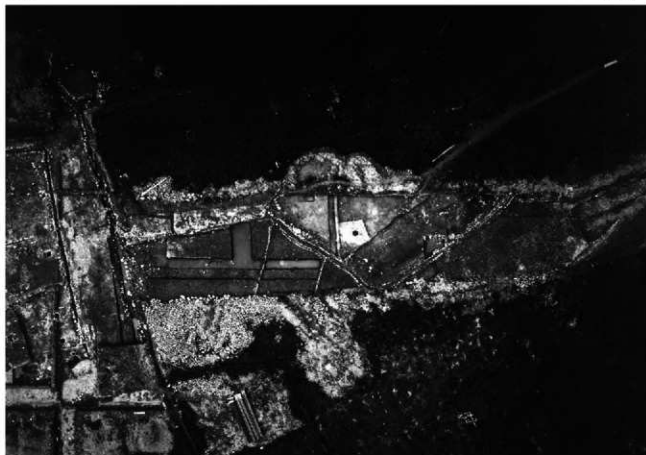
(2) 第42次調査区遠景（東から）



(3) A・D区垂直写真



(4) A・D区遠景（南から）



(5) F区垂直写真



(6) F区遠景(南から)



(7) H区垂直写真



(8) H・J区全景（北東から）



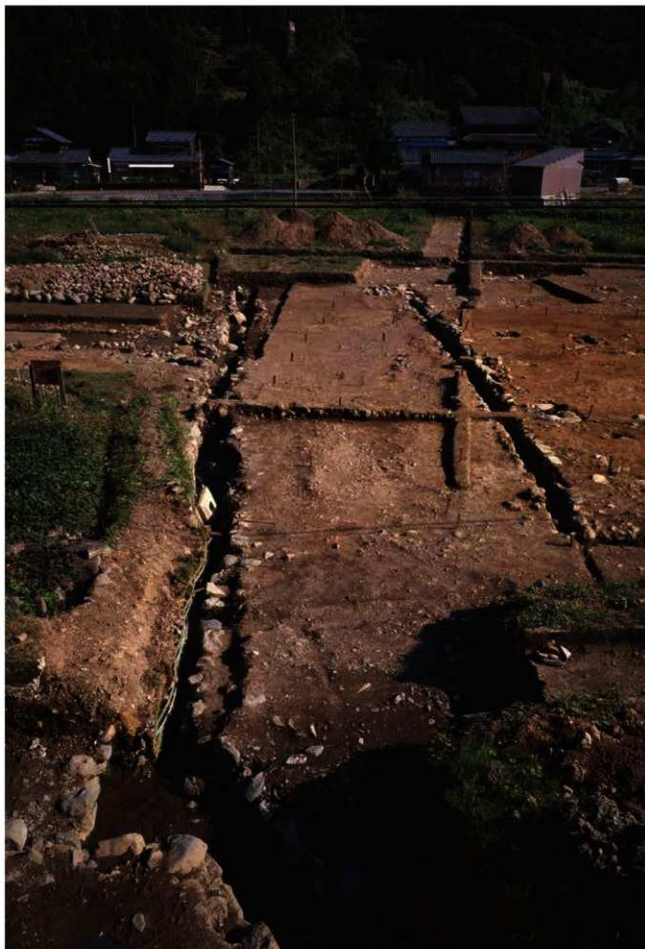
(9) SS945 (南北幹線道路)・SD518・SD1851 (南から)



(10) J区 SS495 断割断面 (北から)



(11) H区 Y列 SS495 断割断面 (東から)



(12) SS1850 (上殿の橋の通)・SD1852・SD1853 (西から)



(13) SD1851 (北から)



(14) SD1852 (東から)



(15) SD1854, SD1855 (東から)



(16) SD1858 (西から)



(17) SD1859 (西から)



(18) SX1977、区画 42-7 下位検出面 (東から)



(19) SD1850 断割、SE1875 (北から)



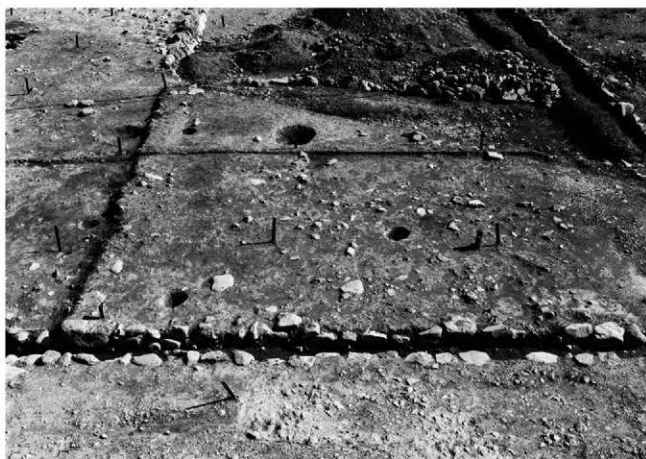
(20) SX1977 (東から)



(21) SX1959、SK1914 (北東から)



(22) SX1928 (東から)



(23) 区画 42-1 上位検出面 (西から)



(24) 区画 42-2 上位検出面 (西から)



(25) SE1863 (南から)



(26) SE1864 (南から)



(27) SX1921 (南から)



(28) SE1879 (南から)



(29) 区画 42-3 上位検出面 (西から)



(30) SX1922 (西から)



(31) SE1923 (西から)



(32) SF1880、SF1881、SF1882、SF1936 (南から)



(33) 区画 42-3 下位検出面 (西から)



(34) SX1923 下層埋設遺構・SK1905 (北から)



(35) SD2000 (西から)



(36) 区画 42-4 上位検出面、SB1895 (西から)



(37) SE1866 (東から)



(38) SE1867 (東から)



(39) SF1884 (北から)



(40) SF1996 (西から)



(41) 区画 42-4 下位検出面 (北西から)



(42) 区画 42-5 上位検出面 (西から)



(43) 区画 42-5 下位検出面 (西から)



(44) 区画 42-6 上位検出面 (西から)



(45) SX1949 (壺埋設遺構) 検出状況



(46) 区画 42-6 下位検出面 (西から)



(47) SX1948、SX1950、SX2003、SE1869 (北から)



(48) 区画 42-7 上位検出面 (北から)



(49) SE1870 (西から)



(50) SF1888 (東から)



(51) SF1889 (東から)



(52) SX2005 (北から)



(53) 区画 42-7 下位検出面 (北から)



(54) 区画 42-8・9 上位検出面 (東から)



(55) 区画 42-8・9 下位検出面 (東から)



(56) SF1883、SX1926 (西から)



(57) SF1885 (北から)



(58) SF1886 (北から)



(59) SF1887 (北から)



(60) 区画 42-10 上位検出面 (北から)



(61) SE1871、SE1872、SX1925、SX1958 (東から)



(62) SE1871 (東から)



(63) SX1957 (南西から)



(64) 区画 42-10 下位検出面 (東から)



(65) 区画 42-11・12・13 下位検出面 (北から)



(66) SB1899 (南から)



(67) SB1989・SF1890・SX1962・SX1963 (東から)



(68) 区画 42-11 北側下位検出面 (東から)



(69) 区画 42-11 南側、42-12 下位検出面 (南から)



(70) SF1876 (東から)



(71) SE1877 (北から)



(72) SF1892 (東から)



(73) SD1920・SX1983 (東から)





16



17



18



19



20



21



22



23



25



24



28



26



29



27



31



30







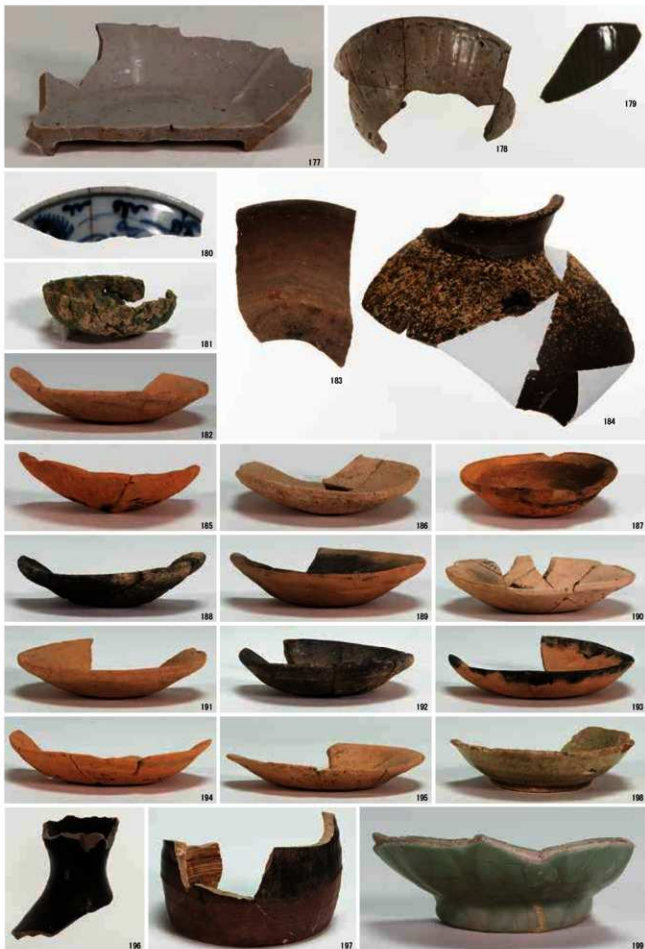






















266



267



268



271



269



270



274



272



273



275



276



277



278



279



280



282



281

283



285



284

286

287



288



290

289



291





310



311



312



313

314



315

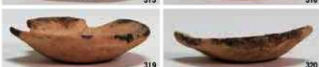
316



317



318



319

320



321



322



323

324



325



326



327



328



329



330



331



332



333











422



421



420



423・424

(X線透過写真)



426



427



429



425



431

432



430



434

433



436



435



437



438



439















560



559



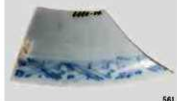
563



561



564



562



567



565



566



567 (内面)



568



566



569



570



571



784



785



787



791



788



790



789



792



792 (断面照片)



793



795



796



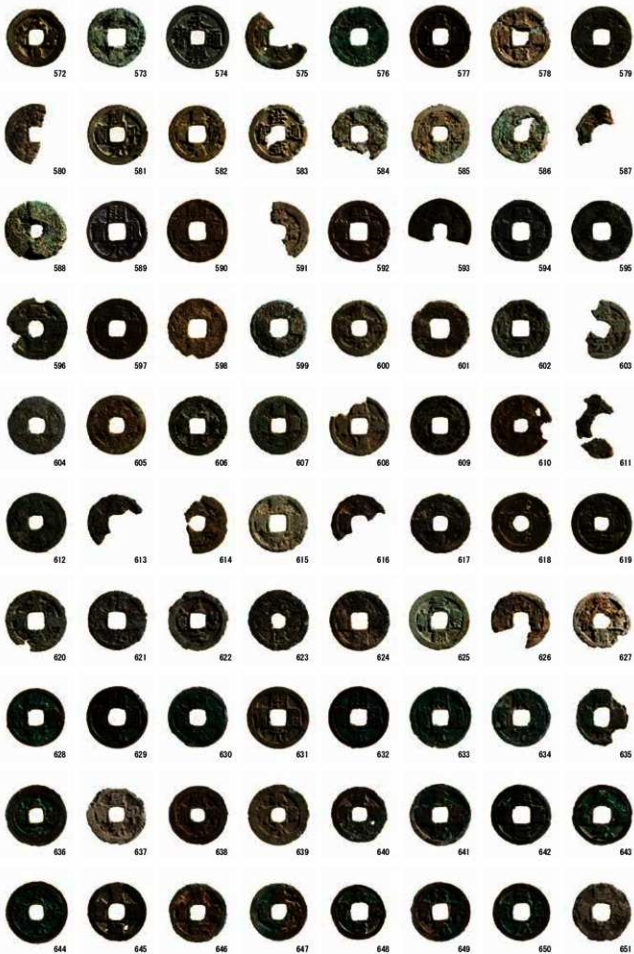
794

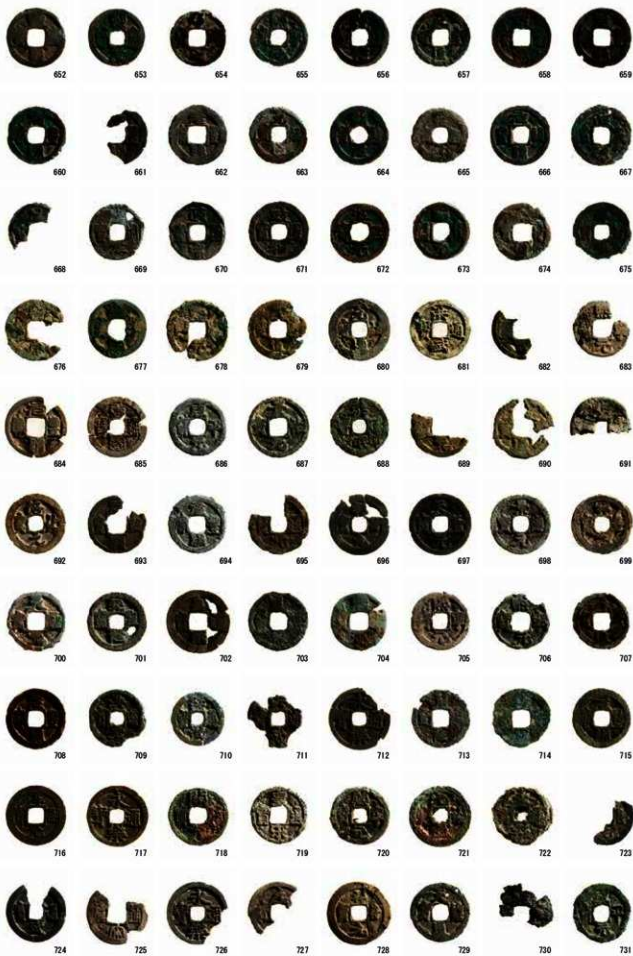


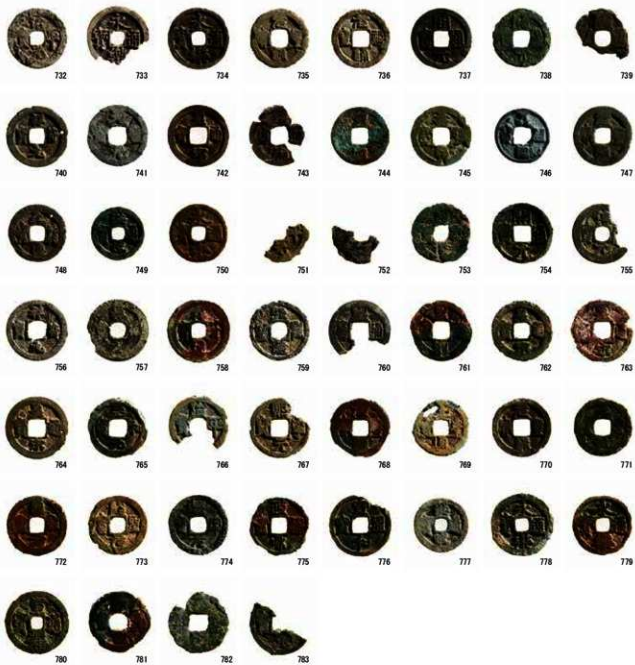
797

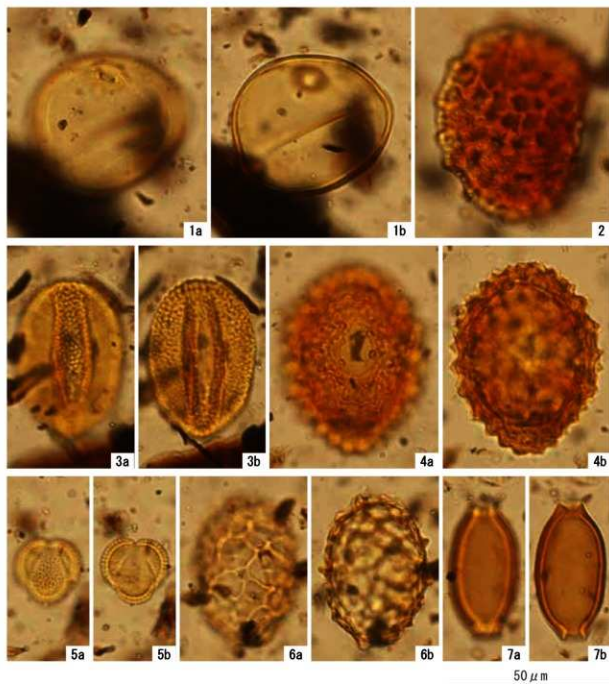


798

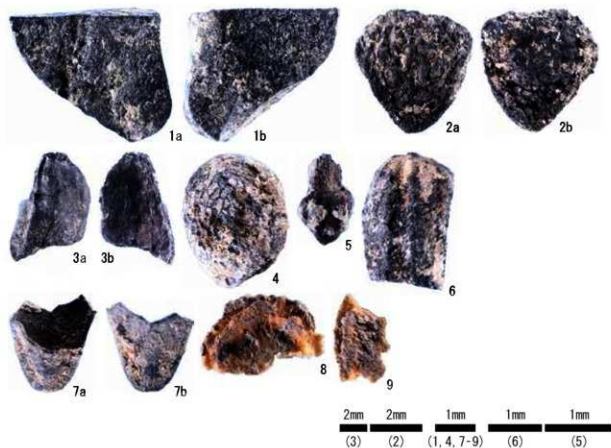




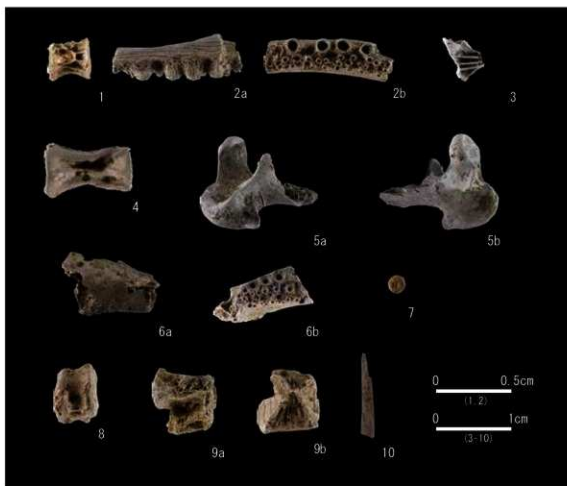




1. イネ科 (42次SF1881底付近堆積土)
2. サナエタデ節—ウナギツカミ節 (42次SF1881底付近堆積土)
3. ソバ属 (42次SF1881底付近堆積土)
4. ベニバナ属 (42次SF1881底付近堆積土)
5. アブラナ科 (42次SF1881底付近堆積土)
6. 回虫卵 (42次SF1881底付近堆積土)
7. 鞭虫卵 (42次SF1881底付近堆積土)



1. オニグルミ 核 (42次SF1881底付近堆積土)
2. コナラ垂風(ナラガシワ?) 殻斗 (42次SF1881底付近堆積土)
3. クリ 果実 (42次SF1881底付近堆積土)
4. サンショウ 種子 (42次SF1881底付近堆積土)
5. イネ 籾(基部) (42次SF1881底付近堆積土)
6. イネ 籾果(玄米) (42次SF1881底付近堆積土)
7. メロン類 種子(基部) (42次SF1881底付近堆積土)
8. トウガン 種子 (42次SF1881底付近堆積土)
9. トウガン 種子 (42次SF1881底付近堆積土)



- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1. フナ属?腹椎 (42次SF1881底付近堆積土) | 2. タラ科?右前上顎骨 (42次SF1881底付近堆積土) |
| 3. タラ科?尾椎 (42次SF1881底付近堆積土) | 4. コナ科尾椎 (42次SF1881底付近堆積土) |
| 5. マダイ左主上顎骨 (42次SF1881底付近堆積土) | 6. マダイ?左前上顎骨 (42次SF1881底付近堆積土) |
| 7. 魚類歯 (42次SF1881底付近堆積土) | 8. 魚類腹椎 (42次SF1881底付近堆積土) |
| 9. 魚類椎骨 (42次SF1881底付近堆積土) | 10. 魚類鱗棘等 (42次SF1881底付近堆積土) |

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさぐらしいせきはつくつちょうさほうこく
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 22
副書名	第42次調査
シリーズ番号	22
編著者名	川崎雄一郎(編著) 藤バリノ・サーヴェイ
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館
所在地	〒910-2151 福井県福井市安波賀中島町8-10 TEL. 0776-41-7700
発行年月日	令和6年3月22日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
第42次発掘調査	福井市城戸ノ内町 字川久保・赤測	18210	史-31	36° 00' 11"	136° 17' 50"	19810721 ～ 19820323	4,800 m ²	県道改良工事・ 環境整備に伴う 発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第42次発掘調査	道路 町屋	室町・戦国	道路、溝、礎石建物、井戸、 石積施設、大甕埋設遺構	越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、 金属製品、木製品、石製品、 紙片、繊維製品	一括埋納の中国製陶磁器が出土。 銀粒子が付着した埴壇、 鉛地金などが出土。
要 約	<p>第42次発掘調査地は、福井市城戸ノ内町字川久保・赤測に所在する。</p> <p>当地区は、一乗谷川の左岸に位置しており、調査の結果、南北幹線道路SS495及び、これに交差する東西道路SS1850(上殿ノ橋ノ通)を検出した。また、道路沿いでは、石組溝等で区画された町屋とみられる屋敷地を検出した。区画内で検出された大甕埋設遺構や、金属製品の加工に関連する埴壇や鉛地金の出土は、町屋における生産活動を示すものであり、城戸の内の町屋に居住する商工業者の生活の一部を明らかにする重要な成果を得られた。</p>				

令和6年3月11日 印刷

令和6年3月22日 発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 22

第42次調査

編集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

〒910-2151 福井市安波賀中島町8-10

印刷 藤田製本印刷株式会社